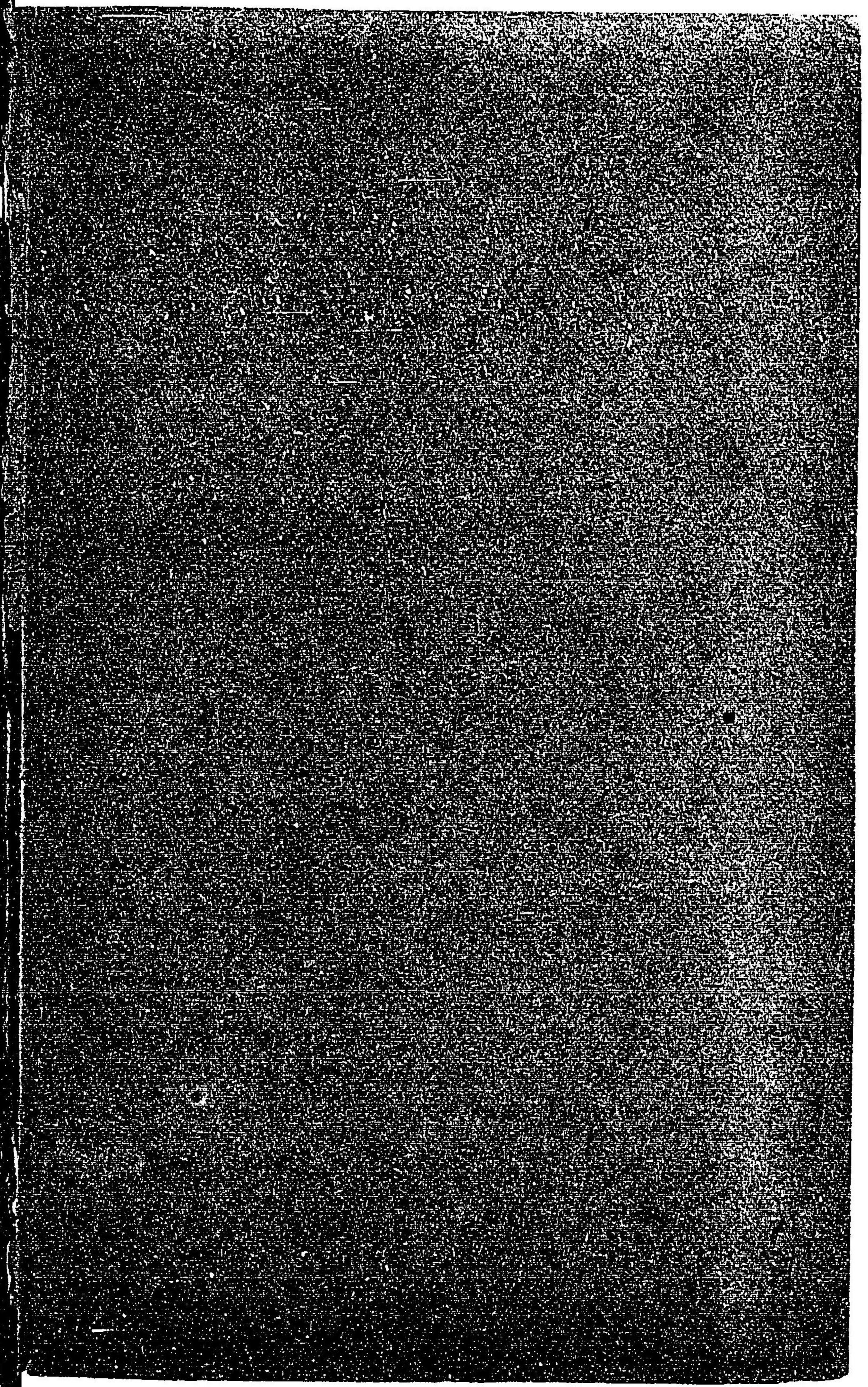


45-184

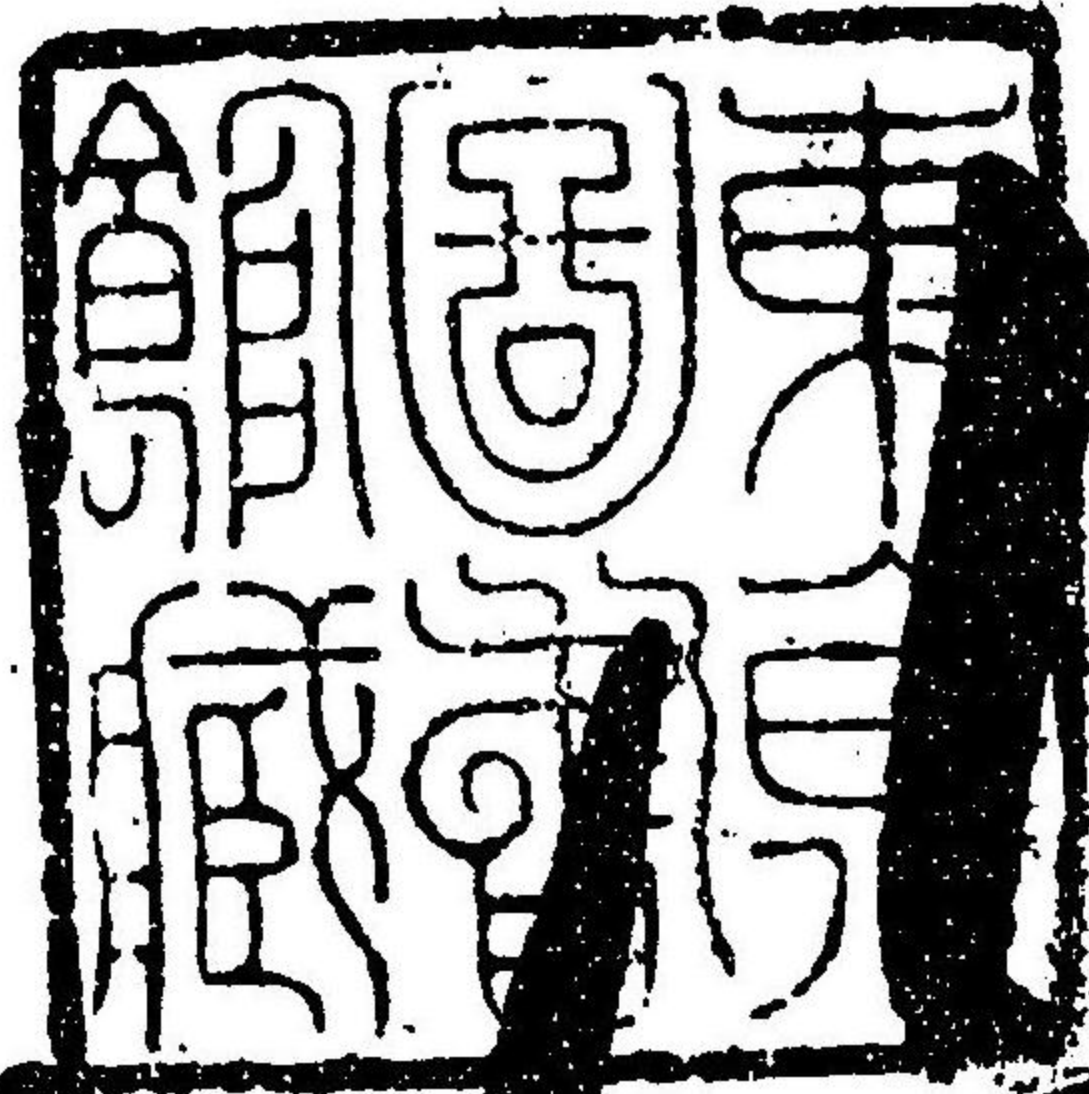
日
本
百
科
全
書
第
四
編

旅
行
案
內

東京博文館發行



東山
子



無名



信者

一子

酒

春の日は

ま

い

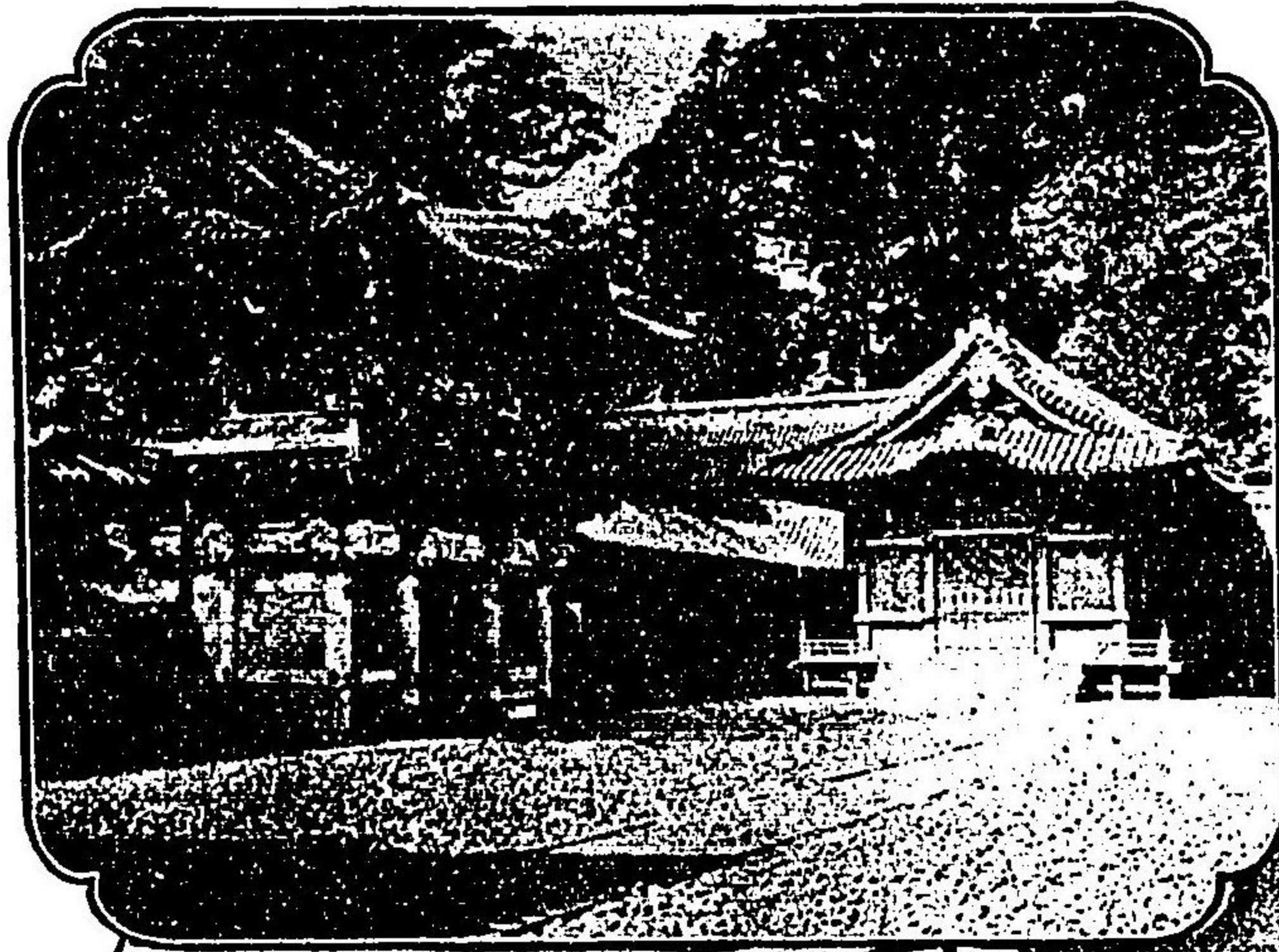
序

甲斐の黒駒雲を馳りて富士の頂より信濃路へ一足飛
も、浮世を壁と乗掛り口の合も踊者は膝栗毛の二人連も
駿と手と着けあつたの開化進歩の旅の樂も遠く及ばぬ
車の中今の旅行の手軽さ朝湯の辰も市湊を拭と
枕ぐさも平何勢態も春客を待つを置
け吉野龍田の花紅葉見や春の語もふくむなり歌人と
湯存り言も静なりや白河の村風も存りて名所を
知るをほべく座頭と宇都の谷の湮道に眼明の檻下
と笑ひて西京へ按摩取りも到るべしうら便利神楽の

世に生れ金で猿を養ふとんむ赤毛布を纏ひて者間
銀座通下とうらひの者よりも榮りたるべし佛と名生
と赤子つりよもの玉ふ人皆造化の寵児多や一視同仁造
化の賜あるとんむ可憐い子たる物にうづら猿を養ふとんむ
んや其の旅案内即ち編、その指せしに付て出汁
玉へはらひて走馬よまゝに捨鞭を加ふる者む
萬巻の書と誇むゆゑに他人桶上軍と名移る
中しや子聖の路の方よげりふらりと出づる
とんむる

竹の屋の主人あや

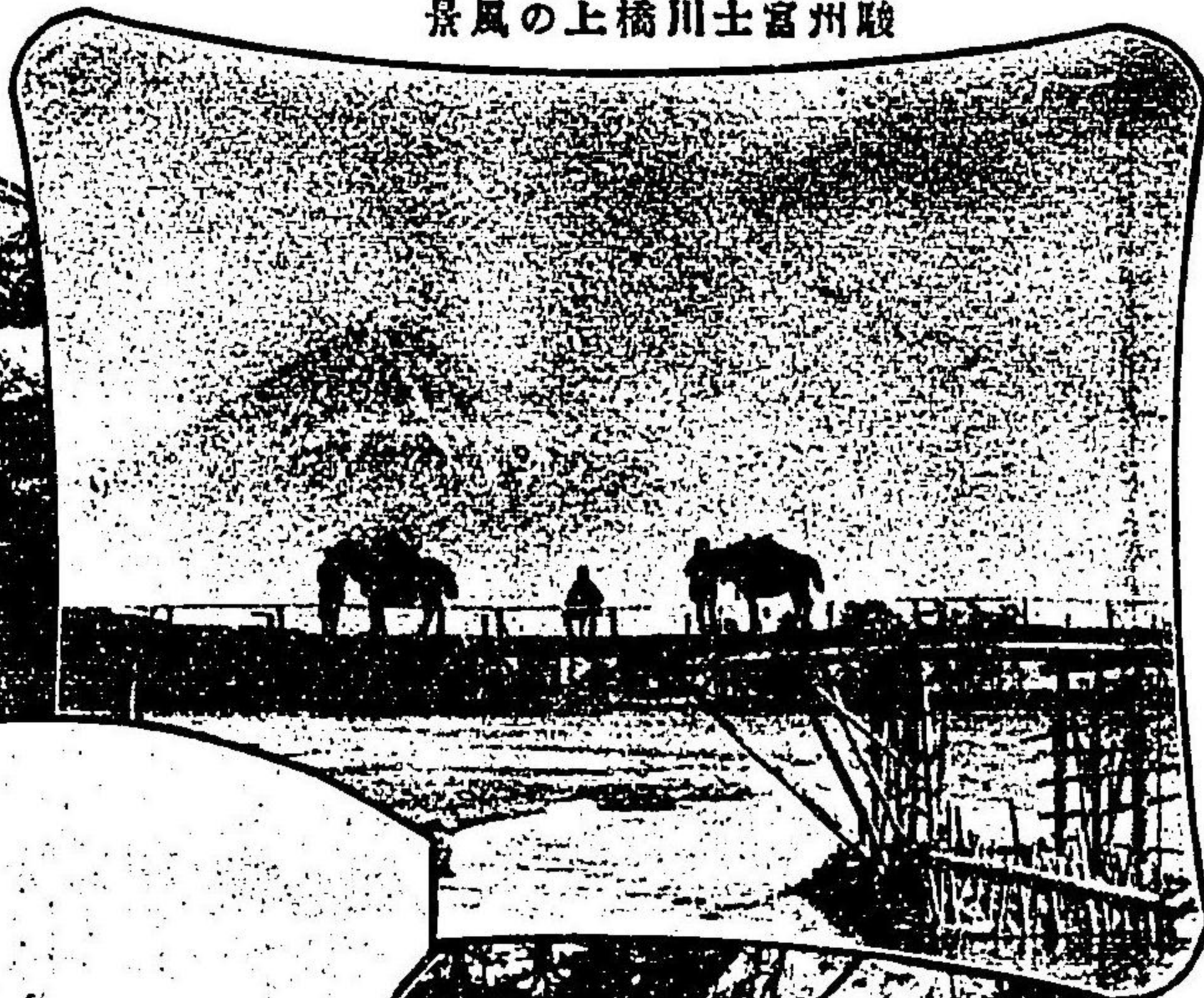
門明陽光日野下



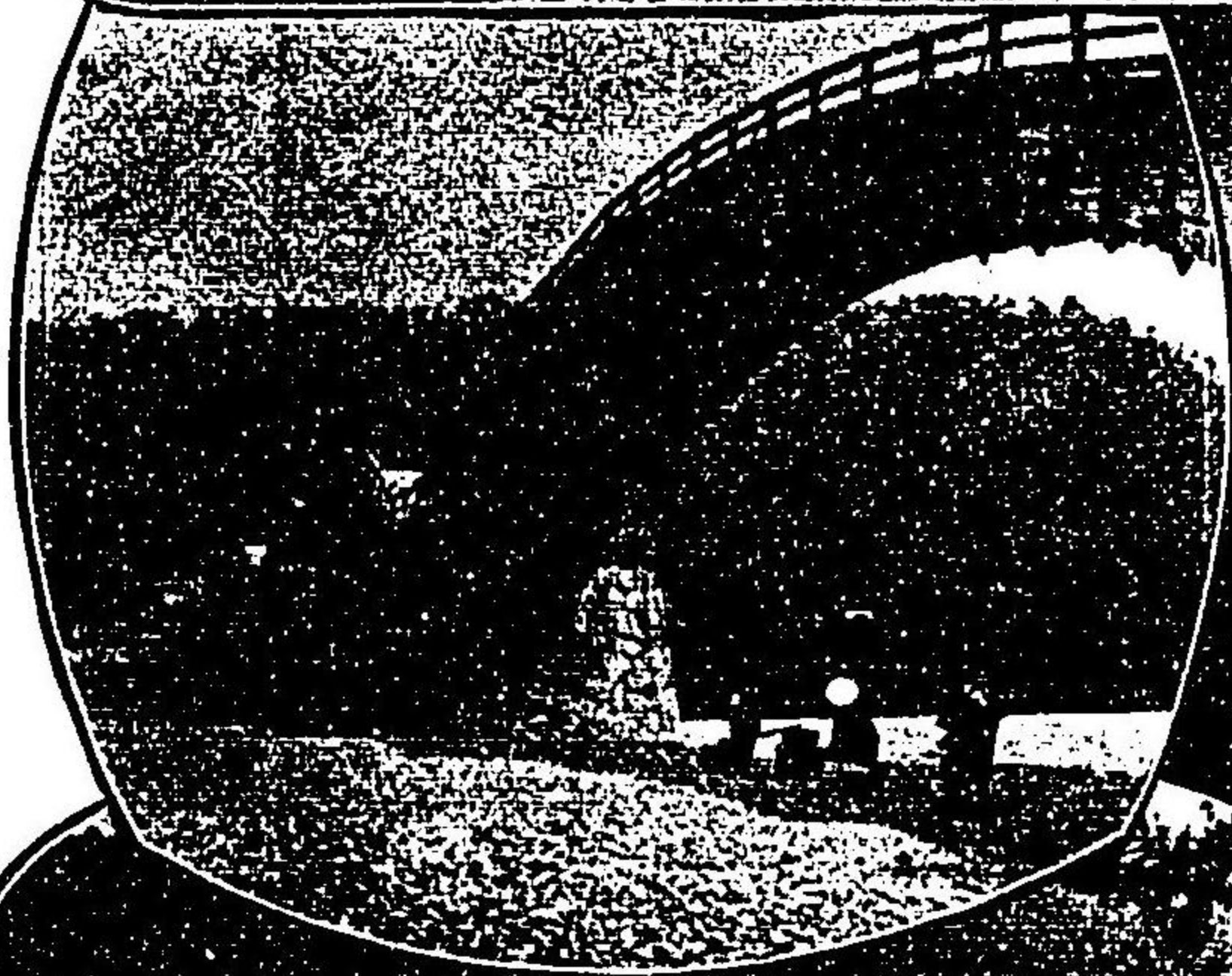
墓の土蔵寺岳泉輪高芝京東



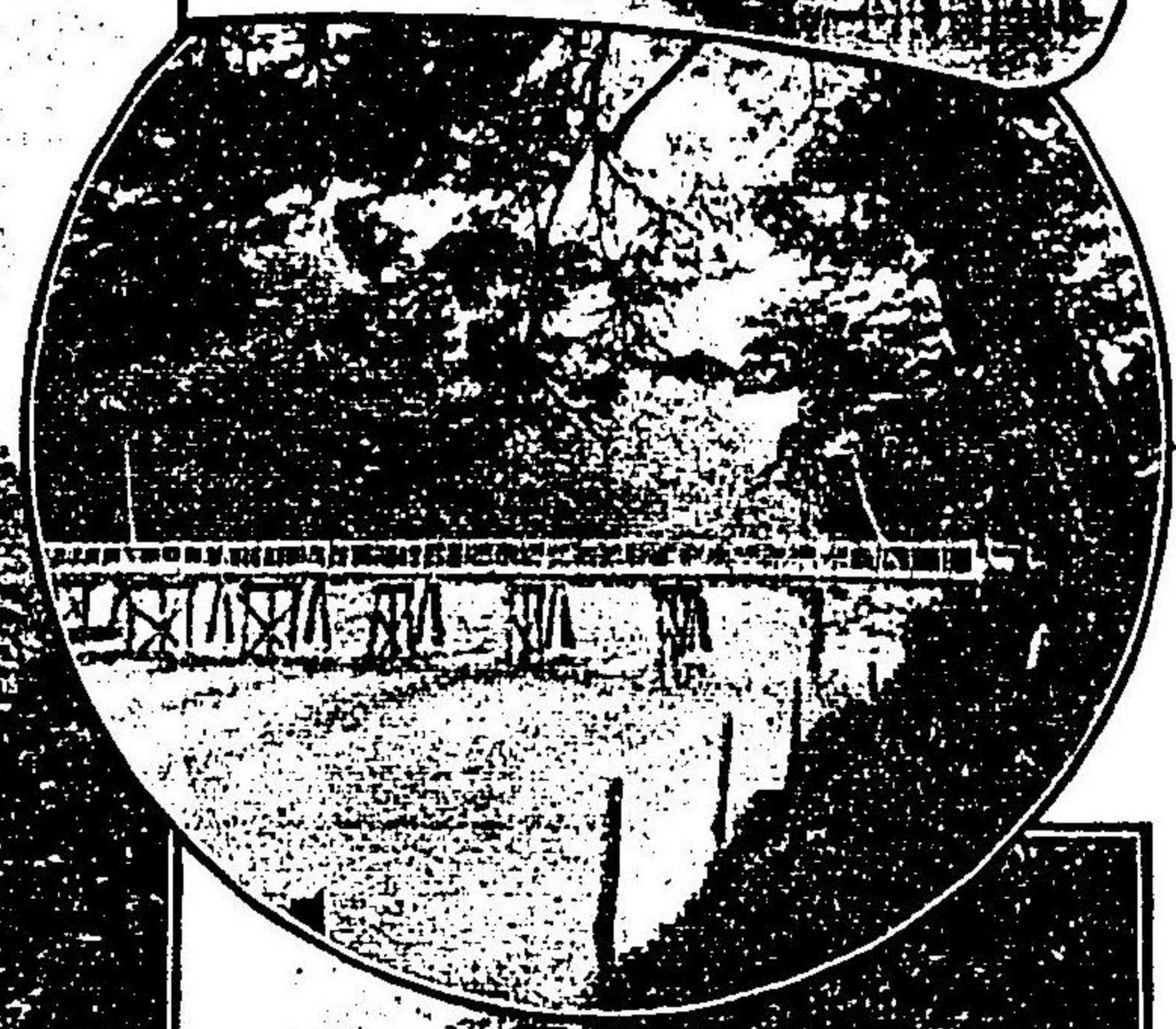
景風の上橋川土富州駿



周防岩國錦帯橋

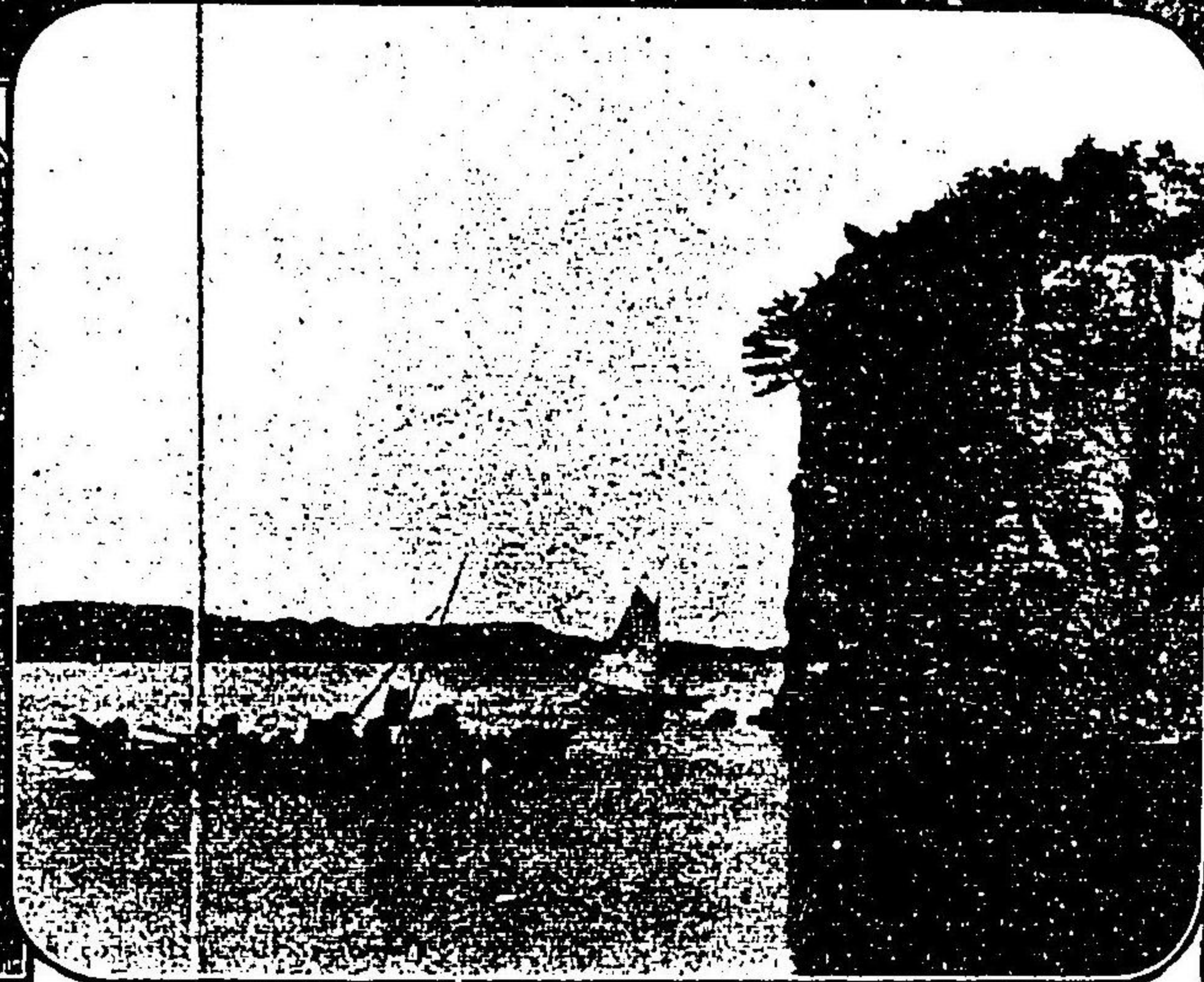


京都嵐山渡月橋



(支鹿館撮影)

神田鎌倉河津橋興合瓦瓦版



景全嶋巖安

濱の子舞州播

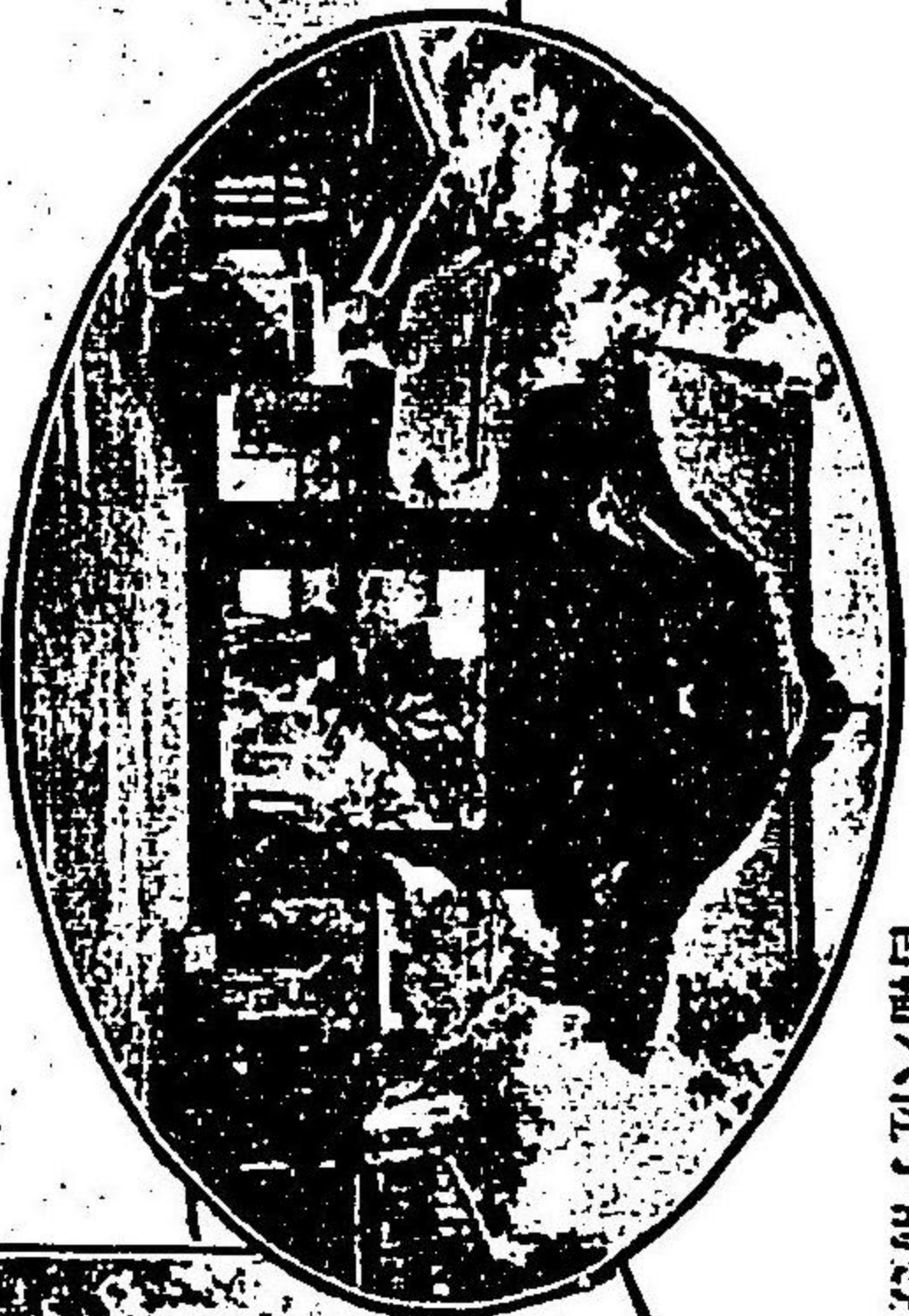
嶋松前陸

山義妙州上

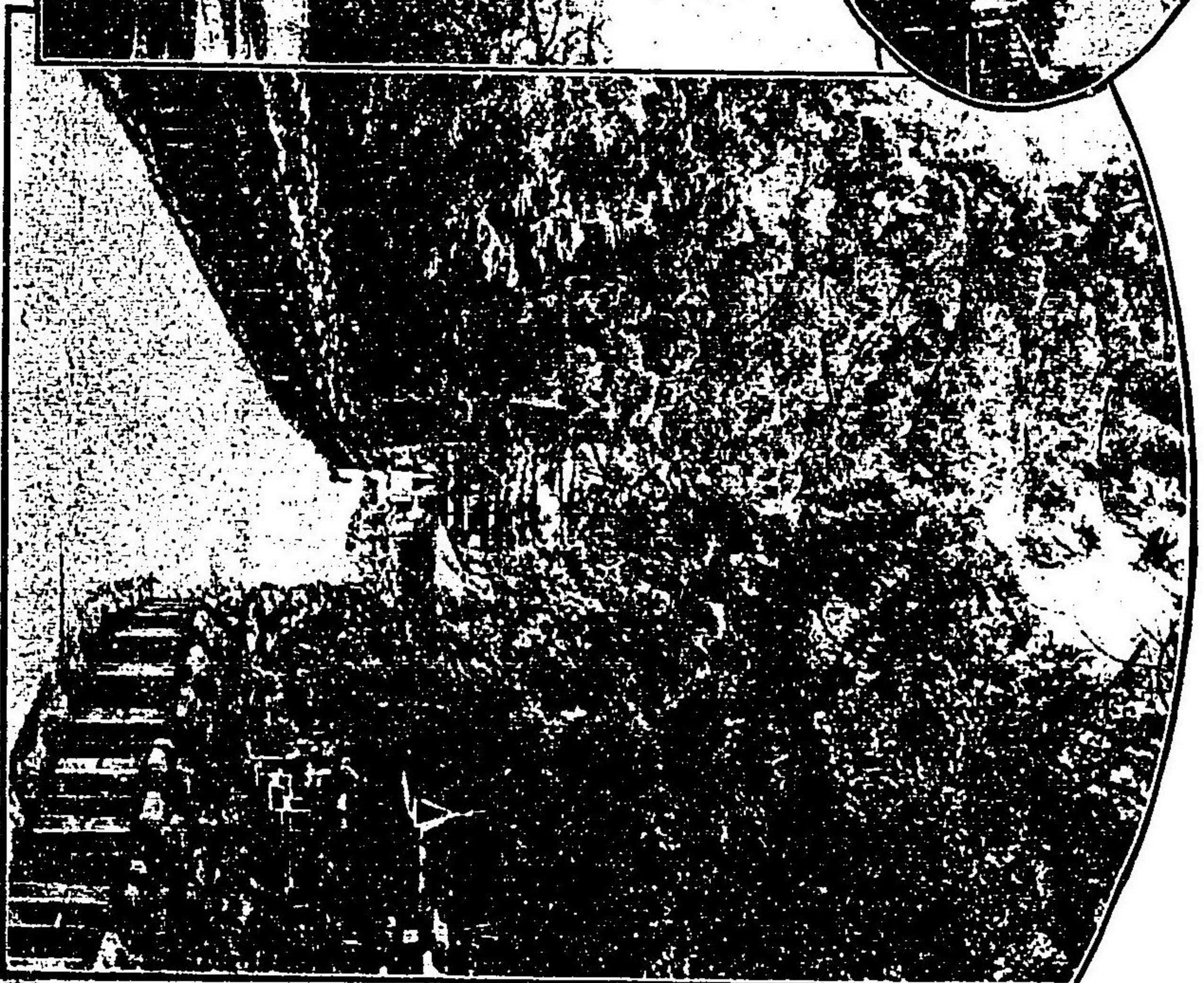
橋神山光日



伊勢大御宮



豐前宇佐八幡宮



大和家瓦染日神社

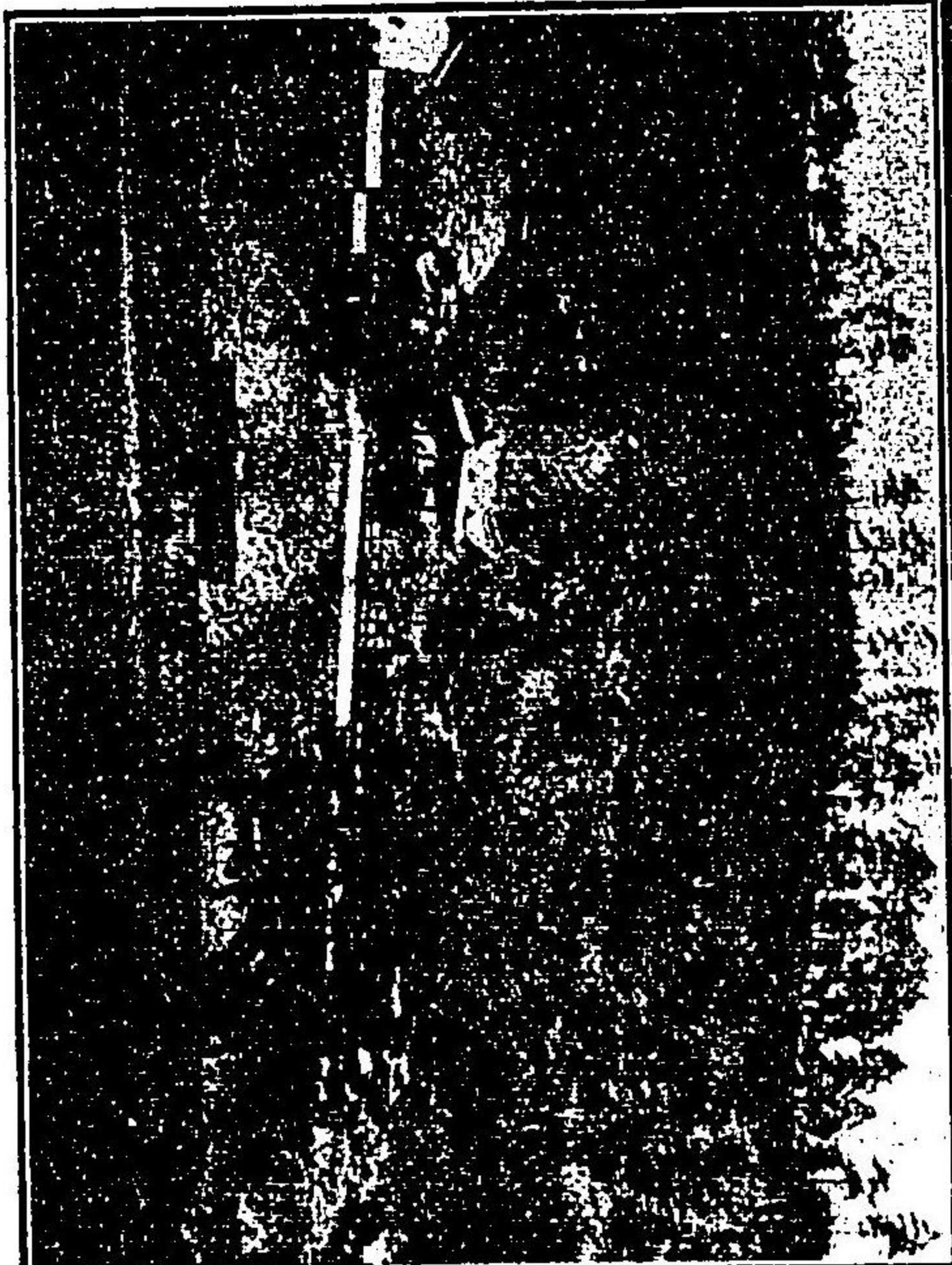
上州名湖より望む



江三井寺より望む湖



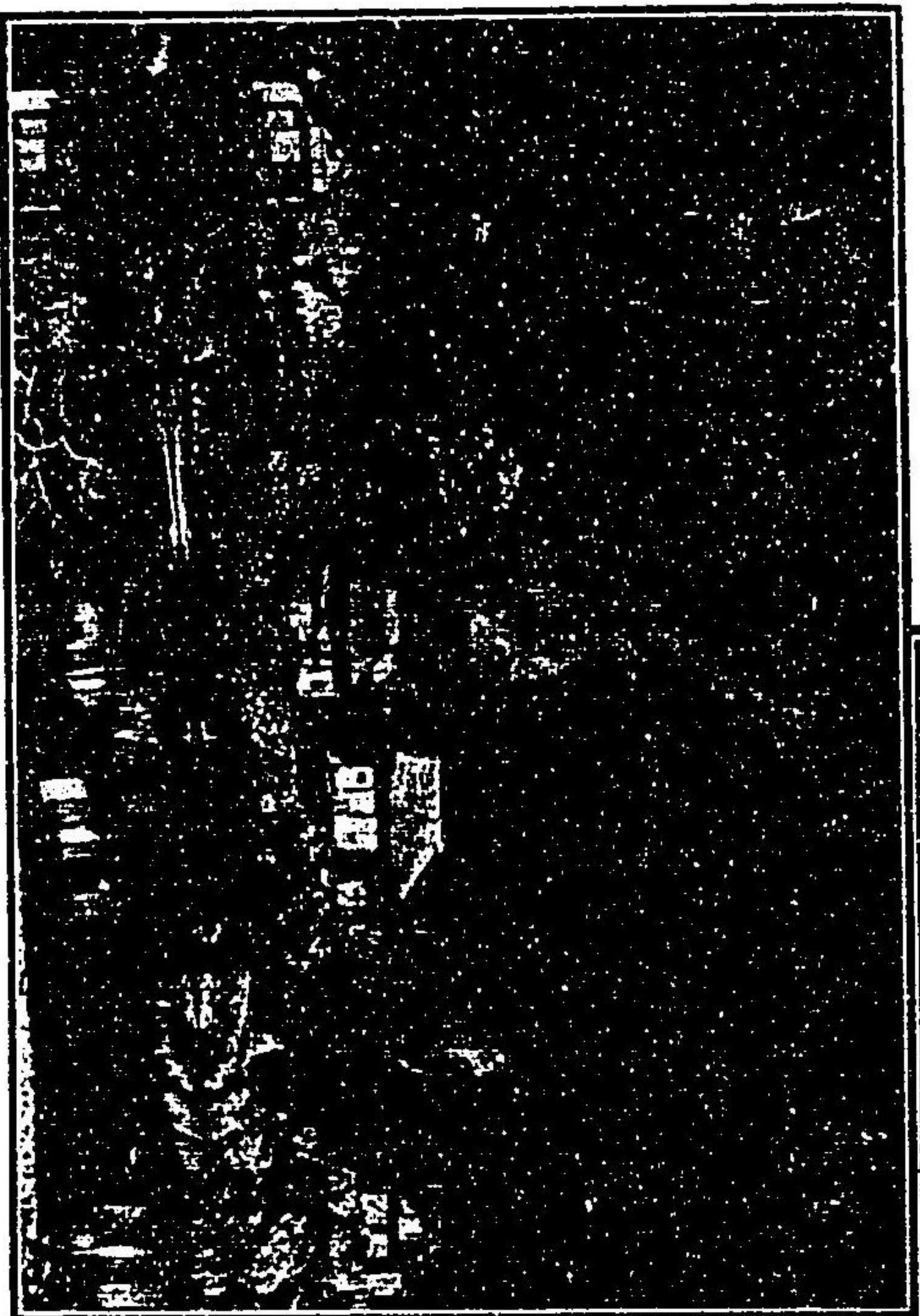
同興津清見寺



駿州富士原白糸の湖



紀州海入丁

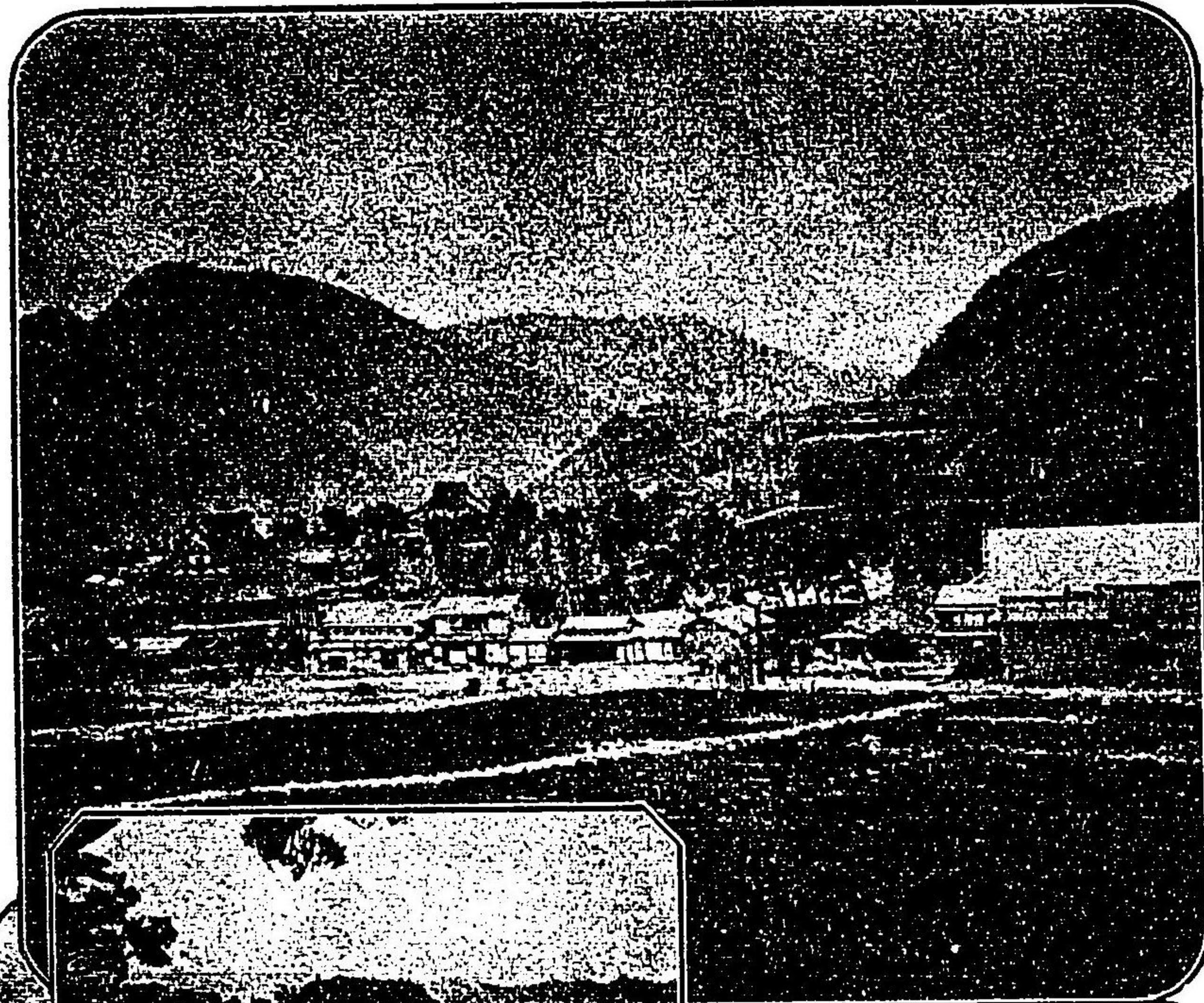


坂佛溪馬耶後壘



巖鶴浴州信

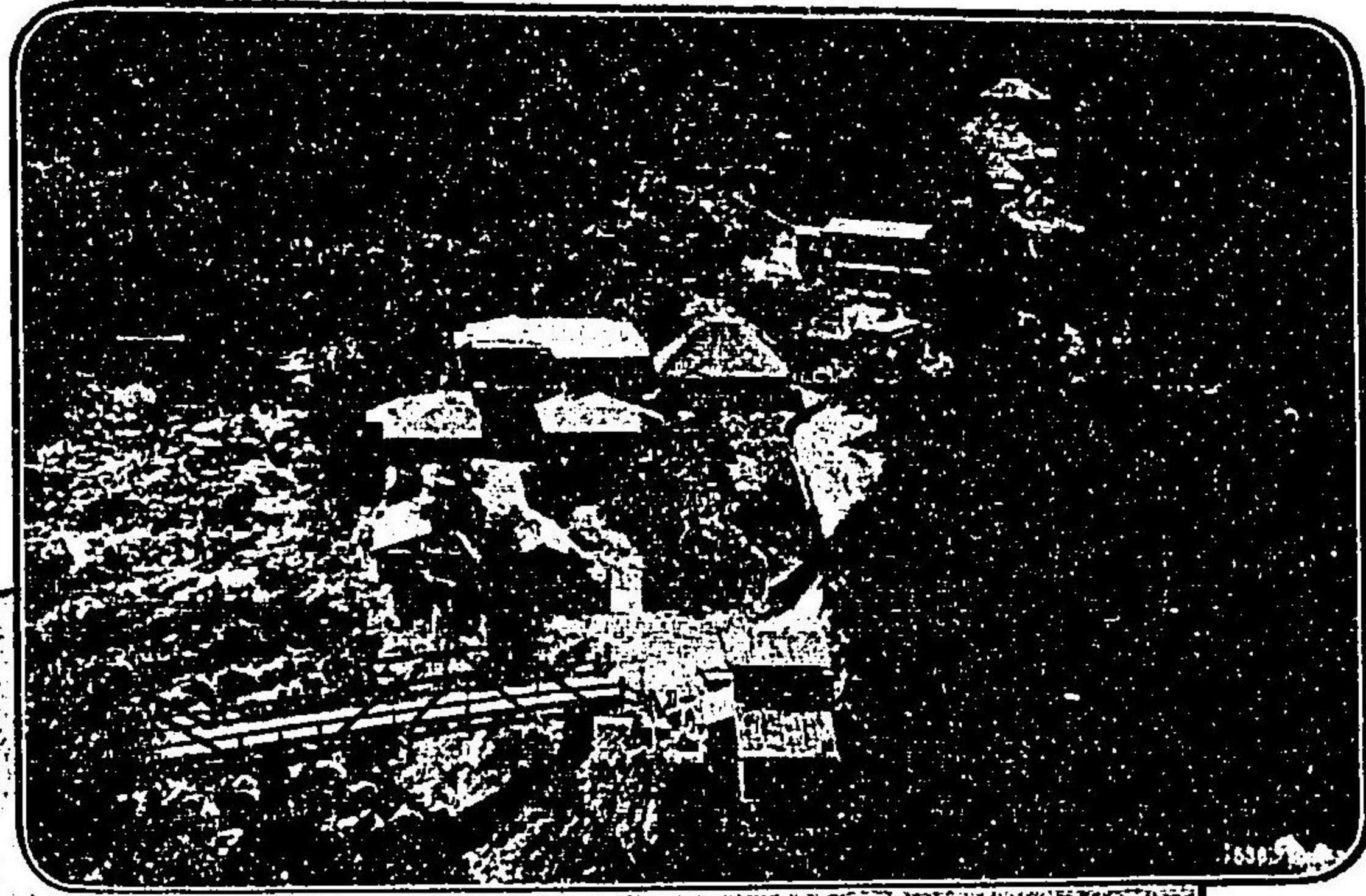
信州善光寺の側面



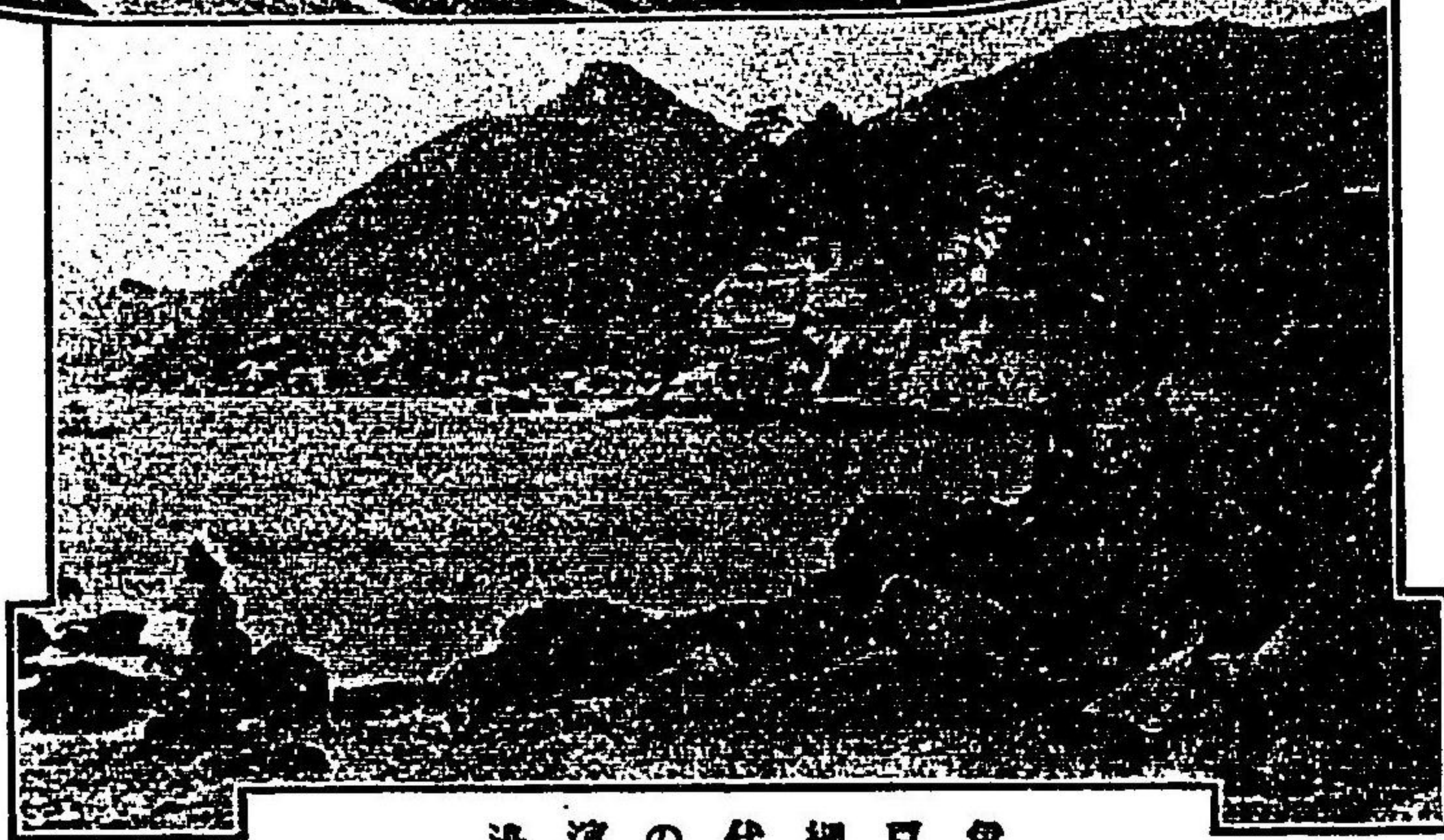
大坂道頓堀の光景

武州金澤八景の一・御戸

相州箱根の塔



伊豆熱海の浴舎

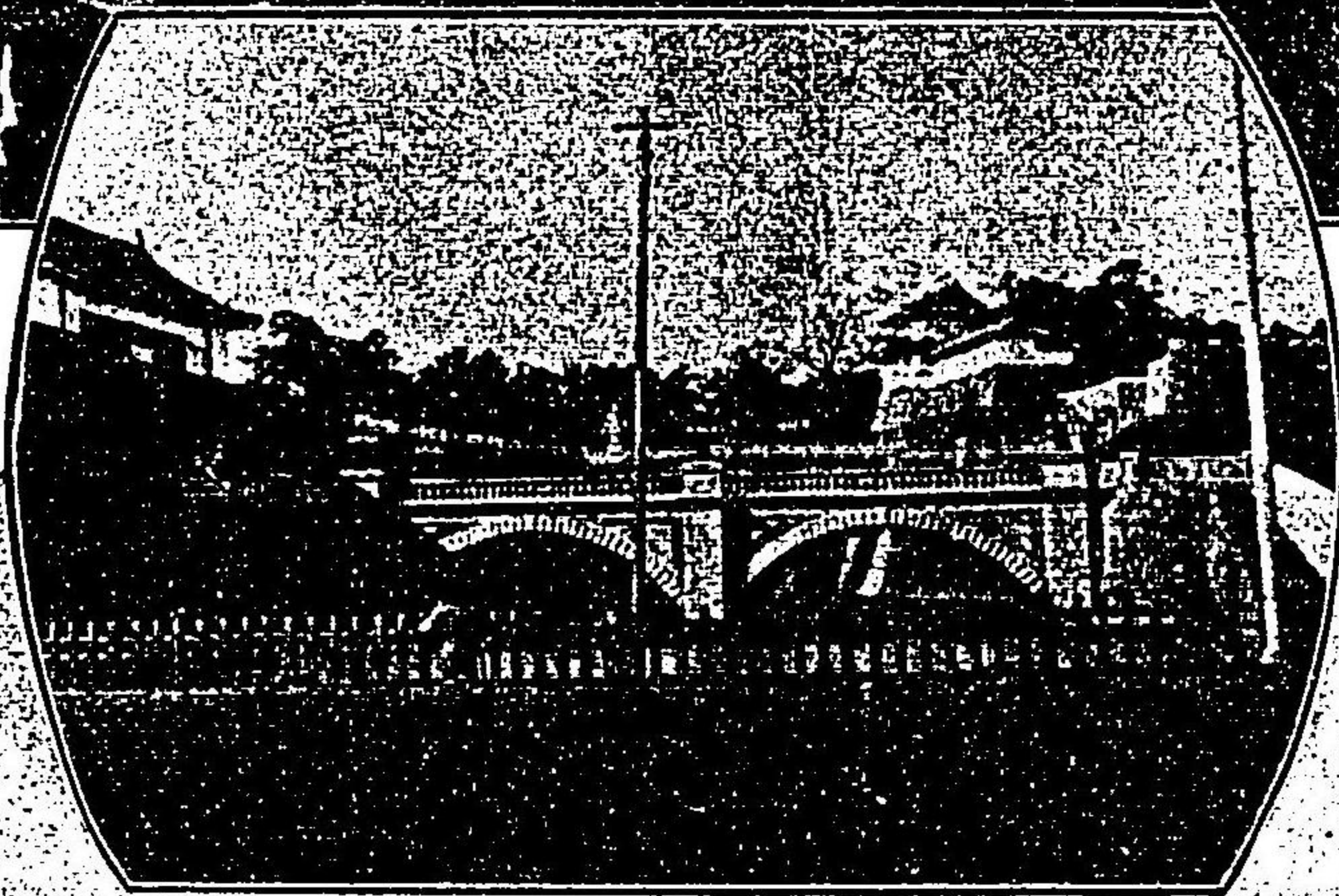


伊豆網代の濱邊

河水淡程和大北蛋灣登



宮城二重橋



湖茶尊鴨渡道舞北



肺病喘息患者心得

薬キクダ

薬 五日分 金四拾五銭
 十日分 金八拾銭
 二十日分 金一圓五拾銭
 六週分 金三圓

キンクは亞米利加の輸入薬にて世界第一の高評を博したる奇薬にして現に重症患者と雖も一人として全治せざる病喘息一代根ることなきは切保證薬

キンク廿日分以上は薬用引金書と云ふ病理養生等の書物無代呈上す

切保證薬 東京市神田區駿河田四紅梅町 金長商店

發賣元 東京市神田區駿河田四紅梅町 金長商店

取次は全國各藥店に有 萬一是無地は送料五日十日は三錢以上六錢

野崎左文君著

日本名勝地誌

第一編	畿内	既刊	第七編	北陸	既刊
第二編	海内	既刊	第八編	山陰	既刊
第三編	海内	既刊	第九編	海道	既刊
第四編	海内	既刊	第十編	北陸	既刊
第五編	山東	既刊	第十一編	北陸	既刊
第六編	山東	既刊	第十二編	北陸	既刊
第七編	山東	既刊	第十三編	北陸	既刊
第八編	山東	既刊	第十四編	北陸	既刊
第九編	山東	既刊	第十五編	北陸	既刊
第十編	山東	既刊	第十六編	北陸	既刊
第十一編	山東	既刊	第十七編	北陸	既刊
第十二編	山東	既刊	第十八編	北陸	既刊
第十三編	山東	既刊	第十九編	北陸	既刊
第十四編	山東	既刊	第二十編	北陸	既刊
第十五編	山東	既刊	第二十一編	北陸	既刊
第十六編	山東	既刊	第二十二編	北陸	既刊
第十七編	山東	既刊	第二十三編	北陸	既刊
第十八編	山東	既刊	第二十四編	北陸	既刊
第十九編	山東	既刊	第二十五編	北陸	既刊
第二十編	山東	既刊	第二十六編	北陸	既刊
第二十一編	山東	既刊	第二十七編	北陸	既刊
第二十二編	山東	既刊	第二十八編	北陸	既刊
第二十三編	山東	既刊	第二十九編	北陸	既刊
第二十四編	山東	既刊	第三十編	北陸	既刊
第二十五編	山東	既刊	第三十一編	北陸	既刊
第二十六編	山東	既刊	第三十二編	北陸	既刊
第二十七編	山東	既刊	第三十三編	北陸	既刊
第二十八編	山東	既刊	第三十四編	北陸	既刊
第二十九編	山東	既刊	第三十五編	北陸	既刊
第三十編	山東	既刊	第三十六編	北陸	既刊
第三十一編	山東	既刊	第三十七編	北陸	既刊
第三十二編	山東	既刊	第三十八編	北陸	既刊
第三十三編	山東	既刊	第三十九編	北陸	既刊
第三十四編	山東	既刊	第四十編	北陸	既刊
第三十五編	山東	既刊	第四十一編	北陸	既刊
第三十六編	山東	既刊	第四十二編	北陸	既刊
第三十七編	山東	既刊	第四十三編	北陸	既刊
第三十八編	山東	既刊	第四十四編	北陸	既刊
第三十九編	山東	既刊	第四十五編	北陸	既刊
第四十編	山東	既刊	第四十六編	北陸	既刊
第四十一編	山東	既刊	第四十七編	北陸	既刊
第四十二編	山東	既刊	第四十八編	北陸	既刊
第四十三編	山東	既刊	第四十九編	北陸	既刊
第四十四編	山東	既刊	第五十編	北陸	既刊
第四十五編	山東	既刊	第五十一編	北陸	既刊
第四十六編	山東	既刊	第五十二編	北陸	既刊
第四十七編	山東	既刊	第五十三編	北陸	既刊
第四十八編	山東	既刊	第五十四編	北陸	既刊
第四十九編	山東	既刊	第五十五編	北陸	既刊
第五十編	山東	既刊	第五十六編	北陸	既刊
第五十一編	山東	既刊	第五十七編	北陸	既刊
第五十二編	山東	既刊	第五十八編	北陸	既刊
第五十三編	山東	既刊	第五十九編	北陸	既刊
第五十四編	山東	既刊	第六十編	北陸	既刊
第五十五編	山東	既刊	第六十一編	北陸	既刊
第五十六編	山東	既刊	第六十二編	北陸	既刊
第五十七編	山東	既刊	第六十三編	北陸	既刊
第五十八編	山東	既刊	第六十四編	北陸	既刊
第五十九編	山東	既刊	第六十五編	北陸	既刊
第六十編	山東	既刊	第六十六編	北陸	既刊
第六十一編	山東	既刊	第六十七編	北陸	既刊
第六十二編	山東	既刊	第六十八編	北陸	既刊
第六十三編	山東	既刊	第六十九編	北陸	既刊
第六十四編	山東	既刊	第七十編	北陸	既刊
第六十五編	山東	既刊	第七十一編	北陸	既刊
第六十六編	山東	既刊	第七十二編	北陸	既刊
第六十七編	山東	既刊	第七十三編	北陸	既刊
第六十八編	山東	既刊	第七十四編	北陸	既刊
第六十九編	山東	既刊	第七十五編	北陸	既刊
第七十編	山東	既刊	第七十六編	北陸	既刊
第七十一編	山東	既刊	第七十七編	北陸	既刊
第七十二編	山東	既刊	第七十八編	北陸	既刊
第七十三編	山東	既刊	第七十九編	北陸	既刊
第七十四編	山東	既刊	第八十編	北陸	既刊
第七十五編	山東	既刊	第八十一編	北陸	既刊
第七十六編	山東	既刊	第八十二編	北陸	既刊
第七十七編	山東	既刊	第八十三編	北陸	既刊
第七十八編	山東	既刊	第八十四編	北陸	既刊
第七十九編	山東	既刊	第八十五編	北陸	既刊
第八十編	山東	既刊	第八十六編	北陸	既刊
第八十一編	山東	既刊	第八十七編	北陸	既刊
第八十二編	山東	既刊	第八十八編	北陸	既刊
第八十三編	山東	既刊	第八十九編	北陸	既刊
第八十四編	山東	既刊	第九十編	北陸	既刊
第八十五編	山東	既刊	第九十一編	北陸	既刊
第八十六編	山東	既刊	第九十二編	北陸	既刊
第八十七編	山東	既刊	第九十三編	北陸	既刊
第八十八編	山東	既刊	第九十四編	北陸	既刊
第八十九編	山東	既刊	第九十五編	北陸	既刊
第九十編	山東	既刊	第九十六編	北陸	既刊
第九十一編	山東	既刊	第九十七編	北陸	既刊
第九十二編	山東	既刊	第九十八編	北陸	既刊
第九十三編	山東	既刊	第九十九編	北陸	既刊
第九十四編	山東	既刊	第一百編	北陸	既刊

日三町本區橋本日京東

博文館發

產婦人科診療 入院及遠近往診 隨時申込を受く

水原産科婦人科醫院

神田猿樂町十二番地

花玉白粉

本舖 東京横山町 脇田盛貞堂



(前付の二)

堅牢世界無比

◎變換符合文字合付

專賣 特許 火災 保險 付



寸法定價表御報次第進呈(電話三八五)

內閣諸官省御金庫製造所

製造元祖 東京築地 一丁目 日本橋區 同國末良支店吉

上毛四萬温泉第一等旅館

當温泉場普く鴻湖の好評を博し著名なるは鑛泉の質
好に於て能く病弱を醫し神を養ふ仙境の勝地とあり
亦弊舎の御信用篤きは第一浴用分析の結果第一等に
鹽の湯は先年内務省泉質試験所を以て加へて來るに
せらるゝに依り毎年御來浴多きを加へて來るに
は手狭につき本年より更に當所清心館全部を引受同
内へ右原泉を分離用諸事整備御便利に御案内に
致候且當地不案内の諸君御照會次第詳細なる御案内書
郵送可申上候倍舊の御愛顧伏て希上候御案内書

岩根之湯鹽の湯元 田村茂三郎

伊豆山 大湯瀧

一名れうまち 腦病湯瀧

子戀の瀧 開場

是ハ庭内ニ在リ有名ナル子戀ノ深山
ヨリ直下スル數丈ノ水瀧本年ノ新開
ニ係ル

當地ハ小田原ヨリ輕便愉快ナル人車鐵道
(賃金廿九錢三時間)アリ又僅ニ十八丁ニ
シテ熱海温泉アリ靈岸島ヨリ瀛船アリ
大暑日中八十二三度

弊樓ハ輕便安直清潔ヲ旨トシ且昨年來隣
家ヲ買收シテ庭園ヲ設ケ家屋ヲ増築シ及
ヒ料理ヲ精選シテ百事改良大勉強候間續
々御來遊之程奉待上候

伊豆山 相摸屋 文作

修善寺温泉廣告

近頃の廣告は實地よりも誇大に風聽するもの多
 けれど小館は有の儘に飾らす陳述仕候
 一常地は未だ半開の地なれども人情淳真輕薄の
 風なし
 一五里の間瀝車無も道路平坦車の輾穩にて足を
 勞せず
 一追從御世辭等は少きも御扱方は極めて懇切實
 直なり
 一繁華全盛ならざるも物事不足なく幽靜閑趣に
 富めり
 右の通便否相半すれ共山川の秀麗なる靈泉の奇
 効あるは他に譲らす夫の酷熱釜中に在り極寒氷
 底に閉ちたるか如きの候は優遊浩然を養ふの耐え
 ズ鬱々消憂に由なく或は湯遊明滅大針に縫の方
 花片一二春風に舞ふの日に流蒸烟の立騰るを見
 紅葉の下に香鬘を狩り川中に湯烟の倦めは青苔滑な
 つの邊に源將軍の墓碣を拜し幽深雲鎖すの庵に大
 師の遺墟に詣せば更に一段の趣味ある耳ならす
 滯留月に涉りて尙歸るを思さらん而して其散財
 は待合一夕の費を要せざるへし大方の華客御來
 遊御實驗奉願上候
 豆州修善寺温泉場

疑雨來館 野田屋八郎平 敬白
 全支店

日光神橋前旅館

小西喜一郎本店

同停車場前左角

支店

嘗本店及別館ハ神橋前ニシテ社廟御
 拜觀并ニ諸瀑布等御遊覽ニハ最モ便
 利ナリ且別館ノ地ハ龍厓山遊園ニ連
 リ西北ニ男體女體ノ諸峯ヲ望ミ東方
 ニ日光市街ヲ下瞰シ大谷川ノ清流其
 前ニ横ハリ土地高燥ニシテ空氣清涼
 其眺望ニ至テハ日光市街中第一位ヲ
 占ムルトノ御高評ヲ得タル所ニ候室
 内器具清潔客室其他悉ク電燈ヲ利用
 シテ且別館ノ間ニハ私設電話ノ備アリ
 店ト別館ノ間ニハ私設電話ノ備アリ
 其他文明ノ利器既ニ完備セリ避暑御
 遊晃ノ諸君ニハ至極ノ位置ニ御座候
 御登晃諸君御旅宿被仰付度奉希候

本品は明治二十四年創業以來内外各地に非常なる好評を博し従て販賣高の多き事日本全國中第一とす且つ品位の純良と價格の低廉なるは普く世人の知る處なり

(前付の九)

第四回内國勸業博覽會褒賞受領
 第五回全國品評會一等褒狀受領

TRADE MARK
 THE DIAMOND
 AN EXCELLENT TOOTH POWDER

登錄商標

無類

貴功
 牙
 磨
 粉

改良

東京市馬喰町三丁目
 平尾氏護製

袋	二入	小	三箱	大	五箱	瓶	拾入	鏡付大箱	拾錢	鏡付罐入	拾五錢	高等名木箱入	三拾錢	定價
---	----	---	----	---	----	---	----	------	----	------	-----	--------	-----	----

大方諸君の記憶し給ふ

弘報堂は

誠實懇切を旨とし取扱ひ割引の低廉と意匠の斬新を以て厚く江湖の御信用を蒙り日に増業務盛大に赴き候段深く奉感謝候就ては御恩顧に酬ひ奉らんが爲各新聞雜誌廣告に一切廉價を以て御取扱申候間何卒舊倍の御愛顧偏に奉希上候敬白

尙御用の節は電話又は端書にて御通知被下候得は早速堂員推参意匠参考等に至る迄御依頼に相應じ御用辨可仕候

東京市京橋區尾張町
新地一番地大通り角

新聞雜誌
廣告取次

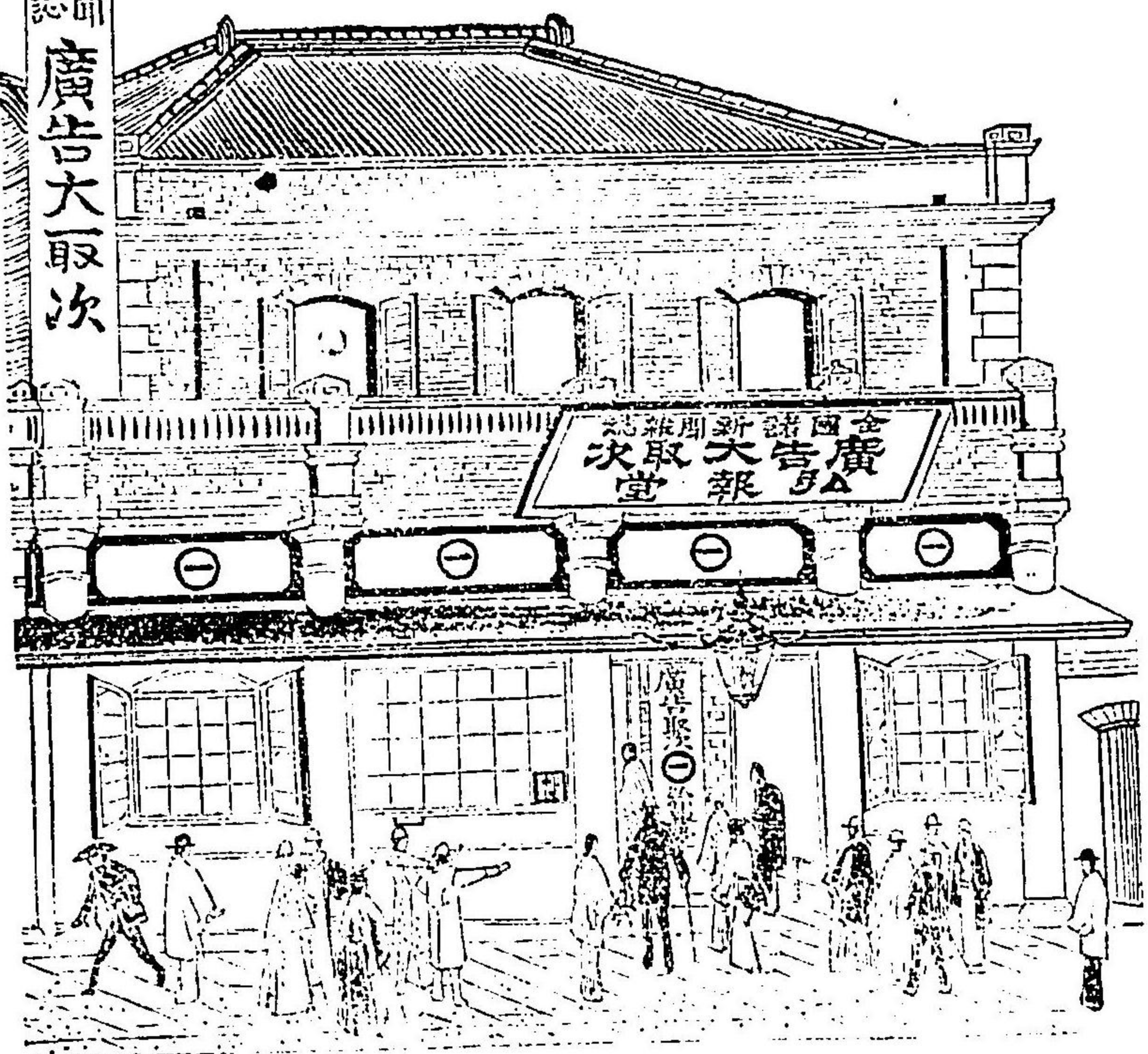


弘報堂

電話八百五十一番

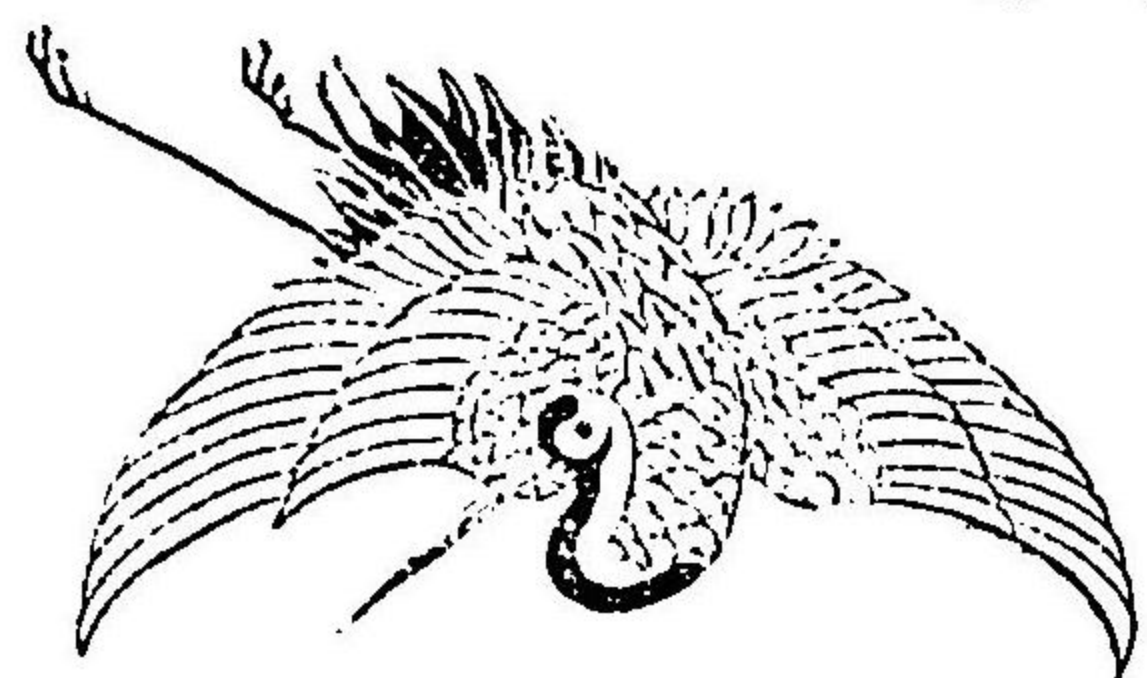
弘報堂主人
敬中寫

新聞廣告大取次



(前付の十四)

廣 告



東京市京橋區木挽學貳丁目拾四番地

大日本生命保險株式會社

社 長	堀越 寛介	監 査 役	鷹 森 茂
取 締 役	青山牧太郎	同	福島哲次郎
同	柿崎政次郎	支 配 人	山下 知七
同	宮本 一雄	副支配人	加藤 辰治
同	小杉恒太郎	同	平野 貫一

(前付の十五)



芳香滋養金鷄葡萄酒

(前付の十六)

金鷄勳章は最大無上の光榮を顯揚し、金鷄葡萄酒は最大無上の効能を表白したり、今や時炎暑に向ひ、悪疫流行の期は近づけり、更に貔貅の臺灣に駐割せるあり、異郷の風土は氣候の變化に逢ふ、最も意を攝生に用ゐざるべからず、人皆志氣剛健に身軀強壯なる者ならざるべからずとすれば、金鷄葡萄酒を常用して平素の攝生に注意せざるべからざる也、金鷄葡萄酒は醸造精良にして風味絶好、悪疫豫防の上には無大無上の効顯あるを信じて、續々御需用あらんことを乞ふ



●●賣捌所は全國到る處にあり●●

發賣元 東京日本橋區本町三丁目 守田重次郎

例言

一 本篇を編するの趣意は、其の風流韻事を追ふの人たると、業務のために東奔西走するの人たるとを論せず、總て旅客のために輕便簡易なる案内書を供するにあり、従つて旅行に關して知らざるべからざるの事項は、其の雅と俗とに論なく、悉く之を網羅して遺漏なきを期せり。

一 漁車、涼船の發着表（貨錢表）の如きは、時に或は變更を免れずと雖も、今は力めて其の最近なるものを取れり。

一 文章は力めて簡明適切なるを期せり、是れ此の一小冊子の中に包羅するに、旅行に關する多大の事項を以てせんとしたるに由る、間々また輕快洒落の筆を弄せしは、這般の文字、由來乾燥無味人を飽かしめむとを憂うればなり。

一 上欄には別に掲ぐるに、紀行文、風俗志の最も適切なるものを以てし、聊か旅行癖を有する人の參考に供せんとす、旅客もし之を提挈せば、地の勝と文の奇と併せて之を味ふの便あらむ。

一口繪は富岡永洗氏が殊に精を盡して描きたる新婚旅行の圖、灼爛人目を奪ふ、寫真版八頁、平時より多きこと四頁、皆以て日本風景の粹と爲すに足る、題詞は公爵、霞山近衛篤磨君に請ひ、題歌は從四位子爵夫人大河内一子君、權典侍千種任子君の筆に成り、序文は則ち饗庭篁村君の撰するところ、本篇の爲に光を加ふる幾許なるを知らず。

一 旅行案内の書汗牛充棟曾ならず、然れども其の能く要を得たるもの本篇の如きは少かるべし、著者は知名の文士三宅青軒君、山紫水明の地西京に於て多年養ひたる風流の筆を揮ふて此篇を叙す、必らず瀟洒瑯々々きものあらむ。

明治二十九年七月

編者識

日用百科全書 第十四編 旅行案内 總目次

○第一 瀛車と瀛船	一	大阪奈良及び櫻井間の案内	三五
既設鐵道	一	龜山津間の案内	三七
○第二 官設鐵道荷物の賃金	四	宮川津間の案内	三七
官設鐵道手荷物及小荷物賃金表	四	名古屋前々須桑名草津間の案内	三八
官設鐵道貨品賃金表	五	神戸廣島間の案内	三九
官設鐵道小荷物預り	六	門司熊本松橋及び小倉行平島樫武雄間の案内	四二
官設鐵道小荷物運送	六	丸龜琴平間の案内	四四
○第三 日本鐵道會社小荷物賃金表	七	本所佐倉間の案内	四四
○第四 日本郵船會社乗客賃金表	七	飯田町八王子間の案内	四五
○第五 内國通運會社運賃表	一〇	國分寺川越間の案内	四七
○第六 小包郵便規則	一一	立川青森間の案内	四八
○第七 電信要覽	一五	東京青森間の案内	四九
○第八 瀛車乗り下りと切符の通用期限	一八	小山水戸間の案内	五三
○第九 瀛車乗客賃金	一九	小山前橋間の案内	五四
○第十 瀛車にて貨物運送の手續概要	二〇	日光宇津宮間の案内	五六
○第十一 鐵道線路案内概略	二五	東京直江津間の案内	五六
新橋神戸間の案内	二五	手宮室蘭間の案内	六〇
大船橋須賀間の案内	三三	標茶跡佐登間の案内	六二
大府武蔵間の案内	三三	高松	六四
米原金ヶ崎支線間の案内	三四	高松の城	六四
		栗林公園	六五
		屋島	六五
		多度津	六六
		善通寺	六六
		福平宮	六六
		福津	六六
		仙醉島	六七
		沼名前神社	六七
		福禪寺	六七
		阿武寛岬	六八
		尾の道	六八
		千光寺	六八
		竹原	六九
		瀬戸	六九
		吳	七〇
		宇品	七〇
		砥島	七一
		岩國	七一
		錦帯橋	七二
		大畑の瀬戸	七二
		柳井津	七二
		徳山	七二
		三田尻	七三
		松崎神社	七三
		門司	七三
		清瀬公園	七四
		速戸神社	七四
		赤間関	七四
		龜山神社	七五
		赤間宮	七五
		壇の浦	七五
		諸港宿泊料	七六
		○第十三 大阪商船會社乗客賃金表	七八

第十四 漁船小荷物賃金
第十五 東海道案内

安房館山	八八
全北條海水浴	八九
全小鷹神社	九〇
全太古の船	九〇
全龍伏の松	九一
全菅野井の鑛泉	九一
全那古の観音	九二
全船形観音	九二
全高崎鑛泉	九二
全元名の霸王樹	九二
全日本寺	九三
全鴨川町	九三
全天津町	九三
全清澄寺	九三
全誕生寺	九四
全不動の瀧	九四
全上磯瀧町	九五
全金谷神社	九五
全田倉の大樟	九五
全佐賀驛	九五
全八見山	九六
全貞元親王の墓	九六
全神將寺	九七
全鹿野山	九七
全木更津	九七
全田代の瀧	九八
全姉ヶ崎神社	九八
全飯香岡八幡	九八

上磯瀧観泉	九八
全勝浦町	九八
下越千葉町	九九
全稻毛海水浴	九九
全佐倉町	九九
全宗吾靈室	九九
全印旛沼	〇〇
全成田山新勝寺	〇〇
全香取神宮	〇〇
全鏡子港	〇〇
全若城町	〇〇
全粟森	〇〇
全本多金次の墓	〇〇
常陸國筑波山	〇〇
全筑波町	〇〇
全藤田	〇〇
全浮島	〇〇
全土浦町	〇〇
全洲來町	〇〇
全鹿島神社	〇〇
全大洗海水浴	〇〇
全水戸市	〇〇
武蔵國東京	〇〇
全宮城	〇〇
全日枝神社	〇〇
全靖國神社	〇〇
全四本願寺	〇〇
全兩國橋	〇〇
全上野公園	〇〇
全東本願寺	〇〇
全淺草公園	〇〇
全吾妻橋	〇〇

武蔵野乳山	〇八
全新吉原	〇八
全龜戸神社	〇八
全富岡八幡	〇八
全西福庵の舊趾	〇九
全野平神社	〇九
全愛宕神社	〇九
全芝公園	〇九
全泉岳寺	〇九
全後樂園	〇〇
全湯殿山	〇〇
全蒲田梅林	〇〇
全飛鳥山	〇〇
全隅田川	〇〇
全細切菖蒲園	〇〇
全龜井戸梅林	〇〇
全興野公園	〇〇
全大宮公園	〇〇
全小金井の櫻花	〇〇
全御嶽山	〇〇
全横濱市	〇〇
全杉田の梅林	〇〇
全金澤八景	〇〇
相模湾子海水浴	〇〇
全鎌倉	〇〇
全江ノ島	〇〇
全鶴ヶ沼海水浴	〇〇
全大山雨降神社	〇〇
全大磯海水浴場	〇〇
全國府津海水浴	〇〇
全酒匂海水浴	〇〇
全小田原海水浴	〇〇

相模箱根の温泉	一一
全足柄上郡の瀧	一一
全甲斐の猿橋	一一
全武田勝信之墓	一一
全湯村温泉	一一
全御嶽山	一一
全甲府公園	一一
全神代櫻	一一
全身延山	一一
全下部温泉	一一
全屏風岩	一一
伊豆熱海	一一
全下田町	一一
全湯ヶ島温泉	一一
全修善寺温泉	一一
全河佐野湯園	一一
全千本松原	一一
全我入道海水浴	一一
全牛臥海水浴	一一
全三土山	一一
全清見湯海水浴	一一
全三保の松原	一一
全久能山	一一
全静岡公園	一一
全焼津海水浴	一一
全志太鑛泉	一一
全江五和村鑛泉	一一
全秋葉山	一一
全小夜の中山	一一
全瀨名湖	一一
全河内伊賀子崎	一一
全七瀬	一一

三河風來寺山	一四七
全前芝海水浴	一四八
全蒲郡海水浴	一四八
全宮崎海水浴	一四八
尾張國鶴崎町	一四八
全平田町	一四九
全武蔵町	一四九
全師崎海水浴	一四九
全豐濱海水浴	一四九
全淡路朝の古殿	一五〇
全大野海水浴	一五〇
全熱田神宮	一五一
全秀吉誕生之地	一五一
伊勢國湯之山温泉	一五一
全笠捨山	一五二
全不所櫻	一五二
全津の公園	一五二
全河津の浦	一五三
全内外宮	一五三
全幸洲海水浴	一五三
全朝熊山	一五四
全見ヶ浦海水浴	一五四
志摩の日和山	一五四

近江堅田淨御堂	一五七
全比良山	一五七
全藤樹香院	一五八
全毛受勝助の墓	一五八
全余吾湖	一五八
全賤ヶ嶽	一五八
全中川清秀の墓	一五八
全野路の玉川	一五八
全矢橋浦	一五九
全鏡山	一五九
全彦根公園	一五九
全伊吹山	一五九
全瀧登老の瀧	一五九
全長良川の船岡	一五九
全虎溪山奇景	一六〇
信濃夜光の床	一六一
全龍井澤	一六一
全瀧間山	一六二
全瀧間温泉	一六二
全坂捨山	一六四
全善光寺	一六四
全戸隠山	一六五
全湯田中温泉	一六五
全藤原温泉	一六六
全諏訪湖	一六六
全諏訪温泉	一六六
全上州鬼石の奇景	一六六
全伊香保温泉	一六七
全海津温泉	一六九
全四草温泉	一六九
全川原湯温泉	一七〇

空は塵ばかりも曇なく、晴れ渡りたるに、朝日の花やかたし出でたるほどに、木々の木の芽も春深き山々の景色、霞たに今朝はかゝらで、物あざやかに見渡されけり、吉水院は唯はひ渡るほどにて、行きかふ人のけはひまで真近く目の前に見ゆ、大方この里はかの水分の峰より片下りに續きて、細き尾の上になん有んめれば、左右に立ちなみたる民の家居どもも、前よりこそさりげなく、唯世の常の屋の縁に見入れらるれ、後ろは皆谷より作りあげて、三階の屋になんありければ、何れの家も見渡しの景色よし、さるは客やとし、又物賣りなんとするは、上の屋にて、道より直に入るところなり、次に家人の住居は、中の屋にて、其下なれば戸口より階を下りてなん入るめる、今一つ階を下りて、又下なる屋は、床なんどもなくて、唯土の上に、物打ち置きなんど、安りがはしくむつかしきに、湯浴むる處、圓なんどはそこにしもあんなれば、

日一日とあるき困じたる旅人の足は、八重山越行く心地して、此階ども上り下るなんいと苦しかりける、されど所の様の言ひ知らず面白きは、さることば物の敷ならず、花散りなばとまつらん人も打ち忘れて、やがて止まりても住みなばやとさへぞ思はる、今日は満ども見にものせんとて、例のの道しるべ先に立て、かれないひ酒など持たせて出で立つ、かの竹林院なんどいふあたりまではいかめしき僧坊どもなんど立ち交りて、ひたつづきの町屋なるを、未はやうくまばらになりもて行きて、子守の御社より興は人の家もなく、唯杉の生ひ茂りたる中をば分け行く、さてやうち晴れたる所にいで、左に遙の谷と名づけたる所、又いと櫻多くて盛なり、

高根より程も遙の谷かけて立ちつゝきたる花の白雲、

なほ行きて大きな朱の鳥居あり、この鳥居、又修行門とも名づくるとかや、金の

- 讃岐鐵道 丸龜平間
- 甲武鐵道 飯田町八王子間
- 關西鐵道 草津桑名間、龜山津間(桑名古屋) (拓植奈良)
- 大阪鐵道 淡町根井及奈良間、(天王寺梅田)
- 北海道鐵道 手宮幌内間、幌内太都春別間、室蘭空知太間、砂川歌志内間、追分夕張間、手宮樺橋間
- 兩毛鐵道 小山前橋間
- 阪堺鐵道 離波堺間
- 伊豫鐵道 高瀬平井河原間(立花森松)
- 攝津鐵道 尼ヶ崎池田間
- 釧路鐵道 標茶跡佐音間
- 佐野鐵道 葛生越名間
- 參宮鐵道 津宮川間
- 總武鐵道 本所佐倉間
- 豊州鐵道 (行橋四日市)(行橋伊賀里)
- 南和鐵道 (高田五條)
- 川越鐵道 (國分寺川越間)

- 青梅鐵道 青梅立川間(立川日向和田)
 - 播但鐵道 姫路飾磨間(長谷生野)
 - 奈良鐵道 (奈良京都)
 - 房總鐵道 (曾我大網)
 - 太田鐵道 (太田水戸)
 - 南豫鐵道 (松山郡中)
 - 道後鐵道 (道後より松山市御室町古町停車場)
 - 浪速鐵道 (大坂北條村)
 - 初瀬鐵道 (奈良櫻井)
- 右は、私立鐵道にして其の官設に係るものは、
- 東海道及び信越線
 - 奥羽線(福島弘前)弘前青森
 - 北陸線(敦賀富山)
- 以上の表にて、其括弧内に在る分は、昨廿八年三月調査の節、未だ開業なし居らざりしものなれど、其後追々開業なし、又これより開業なすものもあり、讀者之れを諒せよ。

御峰神社、今は金精大明神と申して、此山しろしめす神なりとぞ、此山前を少し左へ下りて、けぬけの塔とて古めかしき塔のあるは、むかし源義経が敵に追はれて、此中に隠れたりしを、探し出されたるとき、屋根を蹴放ちて逃げいにける跡なんといひて、見せけれど、すべてさる事はゆかしからねば、目とめて見ずなりぬ、なほ深く分け入りて、茶屋ある所に到る、其前を右へいさゝか下れば安禪寺なり、藏王堂大阪の右大臣の立て給へるとぞ、東の方に木茂き山は、青根が峰なりとて、此堂の前より向ひに近く見えたり、二三町奥に、何ぞかや事々しき名つきたる堂あり、其後一木の下道を二町ばかり下りたる谷陰に、昔清水とて岩間より水の滴り落つる所あり、西行法師が歌とてまねび言ふを聞くに、更にかの法師が口つきにあらす、むげに腹しきえせ歌なり、なほ一町ばかり分け行きて、かの住めりし跡と云ふは、少し平かなる所に

にて、一丈ばかりなるかりそめの庵今も在り、櫻もこゝかしこに見ゆ、花見つゝ住みし昔の跡問へば、昔の清水に浮ぶ影、此近き頃、ある法師も、三とせばかりここに籠り居けるとぞ、京にて高野嶺といふ木を、こゝ人はたゞに嶺とぞいふ、是を思へば古へ嶺の外に嶺と言ひしは此木なるべし、是はこゝに必ず言ふべき事にもあらぬと、此わたりの山に此木の多かるに就きて、人の尋ねけるに、いらへつる言葉を聞きて、ふと思ひ寄れる故、筆のついでに書き付けつるぞ、本の道を安禪寺の前の茶屋まで歸りて、御嶽へ詣づる道にかゝり、三町あまりも来たらんと思ふ所に、しるべの石ぶみ立てたる道を左へ分れ行く、御嶽の道へは是れより女は登らずとぞ、かの見えし青根が峰は、即ち此山なりけり、少し行きて東の方の谷の底はるか夏見の里見ゆ、行きく又東北の谷に見下さるゝ里を向へば、

尙此外に、假死状を下附され、漸次工事に着手せんとする私設鐵道甚だ多く、日本全國は、やがて蜘蛛の巣張りたる如くに鐵道布設され、愈々以て香氣な旅行の出来るやうになるべし。偕て汽船はこゝにいふまでもなく、日本郵船會社大坂商船會社の手に、内海の航路は握られ居るが如き姿なれば、何處の港からにても、自由に乘て行くべきなり。

○第二官設鐵道荷物の賃金

商人の旅行はいふまでもなく、縦ひ遊歴の旅行にても、荷物携帶せぬものなければ、こゝに其賃金の規定を表出す。

●官設鐵道手荷物及小荷物賃金表

里程	無賃制限外手荷物		旅客列車ニテ旅行スル行商并呼賃荷物但緩急ニテ運送スルモノ	
	貨金五錢未満ノ者ハ支拂テ要セズ	目方二十五斤迄	目方五十斤迄	目方百斤迄
廿五哩迄	一斤二付 五厘	二十錢	三十錢	五十三錢
五十哩迄	全 七厘五毛	二十錢	三十錢	五十三錢
百哩迄	全 一錢	二十錢	三十錢	五十三錢
百哩以上五十哩毎ニ	全 二厘五毛	二十錢	三十錢	五十三錢

里程	小荷物		子犬、子豚、小獸、家禽、其他鳥類、但網等ニ入レタルモノニ限ル	
	通常小荷物	紙細工、漆器、造花、帽子、輕キ家具等ニシテ損易ク且嵩高ノ物品最低賃金十錢	紙細工、漆器、造花、帽子、輕キ家具等ニシテ損易ク且嵩高ノ物品最低賃金十錢	紙細工、漆器、造花、帽子、輕キ家具等ニシテ損易ク且嵩高ノ物品最低賃金十錢
廿五哩迄	一斤二付 一錢	一斤二付 二錢	一斤二付 二錢	一斤二付 二錢
五十哩迄	全 一錢五厘	全 三錢	全 三錢	全 三錢
百哩迄	全 二錢	全 四錢	全 四錢	全 四錢
百哩以上五十哩毎ニ	全 五厘	全 一錢	全 一錢	全 一錢

●官設鐵道貴重品賃金表

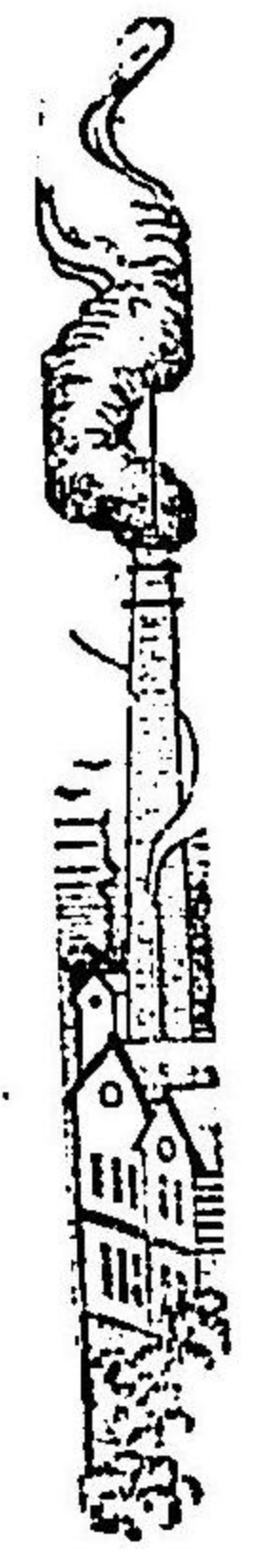
里程	金銀貨並地金銀、寶石、寶玉細工物最低賃金五十錢		紙幣、郵便切手、金銀ニ係ル證書類最低賃金壹圓	
	一斤二付	二錢	一斤二付	二十錢
廿五哩迄	全	三錢	全	三十錢
五十哩迄	全	四錢	全	四十錢
百哩迄	全	一錢	全	十錢
百哩以上五十哩毎ニ	全	一錢	全	十錢

國栖とぞ云ふ、此わたりうち離れたる山の脊を傳ひ行く程いと遠し、さて下る坂路のけはしと物に似ず、されど登るやうに苦しくはあらず、此坂を下り果つれば西河の里なり、安禪寺より一里といひしかどいと遠く覺えき、山の中に包まれて何方も見はるかす處もなき里なるを、家毎に紙をすきて門に多くほせる、これは未だ見ぬ業なれば、ゆかしくて足も休めがてら立ち入りて見るに、一枚づゝすき上げては重ねくする様、いと珍らかにて、立つ事も忘れつ、さて右の方へ三町ばかり里を離れ行きて、谷川に渡せる板橋の下より分れて、左へいさゝか登り山のかひをあなたへ打ち越ゆれば、即ち大瀧村なり、此間は五町ばかりあらんか、此大瀧の里のあなたのはづれば、即ち吉野川の川の邊にて、瀧と云ふもやがて川づらなる家の前より見やらるゝ早瀬にて、上より直様に落つる瀧にはあらず、此瀧は遠くては異なることもなし、近く寄りて

●官設鐵道手荷物預り
手荷物は、各ステーションに於て預るものとす。其預り賃は、手荷物一個に付、一日金二銭、一日を増す毎に、金二銭づゝを増す。旅客若し瀧車より下りて、道寄などなすときは、右の法によりて、何れのステーションへでも手荷物を預け置くべし、安全にして頗る便利なり。

●官設鐵道小荷物配達

各ステーション(直江津線を除く)に於ては、小荷物に限り、請取人の宿所まで配達すべし。其配達賃は、十斤までは五銭、十斤以上は、十斤毎に一銭増しなり。但し配達區域は、ステーションより一里以内とす、東京だけは、日本橋より二里以内まで配達すべし。



●第二日本鐵道會社小荷物賃金表

種類	重量	一哩迄	二哩迄	三哩迄	四哩迄	五哩迄	六哩迄	七哩迄	八哩迄	九哩迄	十哩迄	十一哩迄	十二哩迄	十三哩迄	十四哩迄	十五哩迄	十六哩迄	十七哩迄	十八哩迄	十九哩迄	二十哩迄
通常小荷物	一斤二付	一錢	二錢	三錢	四錢	五錢	六錢	七錢	八錢	九錢	十錢	十一錢	十二錢	十三錢	十四錢	十五錢	十六錢	十七錢	十八錢	十九錢	二十錢
輕くして嵩高き物	一斤二付	一錢五厘	二錢五厘	三錢五厘	四錢五厘	五錢五厘	六錢五厘	七錢五厘	八錢五厘	九錢五厘	十錢五厘	十一錢五厘	十二錢五厘	十三錢五厘	十四錢五厘	十五錢五厘	十六錢五厘	十七錢五厘	十八錢五厘	十九錢五厘	二十錢五厘
菓物野菜鮮魚鮮肉	一斤二付	五厘	七厘	七厘五毛	一錢	一錢一厘	一錢二厘	一錢三厘	一錢四厘	一錢五厘	一錢六厘	一錢七厘	一錢八厘	一錢九厘	二錢	二錢一厘	二錢二厘	二錢三厘	二錢四厘	二錢五厘	二錢六厘
小獸并に鳥類籠入	二斤二付	二錢	三錢	三錢五厘	四錢	四錢五厘	五錢	五錢五厘	六錢	六錢五厘	七錢	七錢五厘	八錢	八錢五厘	九錢	九錢五厘	十錢	十錢五厘	十一錢	十一錢五厘	十二錢
大	一匹二付	二十錢	三十五錢	六十錢	八十五錢	一圓	一圓一錢	一圓二錢	一圓三錢	一圓四錢	一圓五錢	一圓六錢	一圓七錢	一圓八錢	一圓九錢	二圓	二圓一錢	二圓二錢	二圓三錢	二圓四錢	二圓五錢
金銀貨同地金	一斤二付	二錢	三錢	四錢	五錢	六錢	七錢	八錢	九錢	十錢	十一錢	十二錢	十三錢	十四錢	十五錢	十六錢	十七錢	十八錢	十九錢	二十錢	
寶石玉類工物	一斤二付	二十錢	三十錢	四十錢	五十錢	六十錢	七十錢	八十錢	九十錢	一圓	一圓一錢	一圓二錢	一圓三錢	一圓四錢	一圓五錢	一圓六錢	一圓七錢	一圓八錢	一圓九錢	二圓	

見よと貝原の翁が教へ置きつる事もあれは、岩の上をどかく傳ひ行きて、せめて間近くのぞき見るに、其わたりすべて得も言はず、大きな巖どものこしら立ち重なる間を、さしも大きな川水の走り落つる様、岩に觸れて砕けあがる白波の景色など、面白しとも恐ろしとも言はんは、中々恐かなりぬべし、昔は筏も此瀬を唯に下しけるを、餘りに水の烈しく

右の如くにして、三銭未滿は、三銭を申し受くとの事なり。但し通常小荷物及び嵩高物は三銭、野菜物鮮魚は五銭、小獸鳥類は十銭、金銀貨等は五十銭、紙幣切手は一圓の低價賃金を申し受くべしと云ふ。日本鐵道會社が右の如くなれば、其他私立の鐵道會社も、大抵は、これに準じたるものなり。

●第四日本郵船會社乗客賃金表

て度毎に下しわづらひし故に、いはほのやしなだらかなる處を切り通して、今はかしこをなん下すなる、と教ふる方を見れば、あなたさまに一道分れて落ち行く水、實に下方の瀨より少しは長閑かに見えたり、あはれ今下し來ん筏もがな、いかで此早瀨下す様見んと言ひつゝ、かれいひ喰ひ酒なんど飲み居る程に、水上遙に此筏下し來るものか、やうやう近づきて此瀨の際になりぬれば、乗りたる者共は左右の岩の上に飛び移りて、先なる一人綱をひかへて皆流に沿ひて走り行くに筏の早く下る様は矢なんどの行くやうなり、さて岩のどちめの處にて、人ども皆筏へ歸る、そこは殊に水の勢烈しくて、ほとばしり上る浪ゆられて浮き沈む丸木の上へ、いたはりもなく飛び移る様、いと危き物から珍らかに面白き事類ひなし、昔人此筏に見入りて、盃の流は何ぢならんと問はずなりぬ、さて此筏瀨を離れてひら瀨に下りたるを能く見れば、

○横濱より 神戸迄 下ノ關迄 長崎迄 上海迄 萩ノ濱迄 函館迄 四日市迄 中田迄 小笠原島迄 高知迄	上等 七圓五十錢 二十圓 二十六圓 四十五圓 四圓五十錢 九圓 四圓五十錢 全 十六圓 十二圓五十錢	中等 五圓 十二圓 十六圓 二十八圓 三圓 六圓 三圓 全	下等 二圓五十錢 四圓五十錢 六圓五十錢 十一圓 一圓五十錢 三圓 全 三圓五十錢
神戸より 下ノ關迄 長崎迄 鹿兒島迄 大島迄 琉球迄 金山迄 元山津迄 仁川迄	上等 十圓 十六圓 十二圓 十七圓 二十二圓 二十八圓 四十圓 四十圓	中等 六圓 十圓 八圓 十二圓 十六圓 十八圓 二十六圓 二十四圓	下等 二圓 四圓 四圓 四圓 六圓 八圓 七圓五十錢 十一圓 十一圓

一丈二三尺ばかりの長さなる薄を三つ四つづゝ組み並べて、つぎ／＼に十六つなを繋げたるは、いと／＼長く引きはへたり、人は四人なん乗れりける、川瀨は此瀨の下にてあなたへ折れて、向ひの山あひに流れ入る、右も左も物を突き立てたるやうなる岩岸の下に、さる筏をしも下し行く景色、只繪にかけらんやうに見ゆ、斯かる處にては中々に口ふたがりて歌も出で來ぬを、わざと打ちかたぶきつゝ思ひ廻らさんも様悪ければ、さてやみぬ、古へ吉野の宮と申して、帝のしば／＼おはしまし、處、楠本人麻呂、主の御供にさぶらひて、瀨の都とよみけるも、此大瀨によれる處なりけんかし、其折々の歌どもに合はせて思ふに、蜻蛉の小野なんど云ひしも、又瀨の上の御舟の山も必ず此わたりなりけん事、疑ひもなければ、今も云ふべき様したる山やあると心を付けて見廻すに、此川づらより左の少し廻る方に、さも言ひつゝ山あり、船

浦鹽迄 天津迄 牛莊迄 芝罘迄 福州迄 厦門迄 マニラ迄	五十圓 六十一圓 六十一圓 五十一圓 三十七圓 五十圓 八十圓	三十五圓 三十六圓 三十六圓 三十圓 二十四圓 三十四圓 五十一圓	十三圓 十七圓 十七圓 十四圓 十一圓 十五圓 二十三圓
長崎より 五島迄 對馬迄 釜山迄 仁川迄	上等 三圓五十錢 八圓五十錢 十二圓 二十四圓	中等 二圓五十錢 六圓 八圓 十六圓	下等 一圓 二圓 三圓五十錢 七圓
神戸より 坂井迄 敦賀迄 直江津迄 新潟迄 酒田迄 土崎迄 能代迄	上等 十二圓 十八圓 二十四圓 二十六圓 二十七圓 二十八圓 三十圓	中等	下等 四圓五十錢 六圓五十錢 九圓 九圓五十錢 十圓 十圓五十錢 十一圓

にして言はんには、前後平らに長く、中央ばかりに一際高く、屋形と言ひつべき處ある山なり、これやさならんと思ひつれど、如何にあらんかぼつかなし、そは瀧の處よりは少し下さまに、し有んなれば、瀧の上と云へるにはいさゝか違へるやうにもあれど、なべて此わたりならん山は、などかさいはざらん、古へ忍ばん人またくも此處に來まざれば、必ず試み給へ、やがて此里の上なる山ぞかし、かくて又里の中を通りて、西河の方へ下り、こたびは前の板橋を渡りて、石の橋を一町ばかりも登り、木茂き谷陰を分け入りて、謂ゆるせいめいが瀧を見る、これはかの大瀧とはやう變りて、しげ山の岩のつらより、十丈ばかりが程ひた下りに落つる瀧なり、此見る處は傍よりさし出でたる岸の上にて、近う瀧のなからに當りたれば、上下を見あげ見おろす、上は狭きがやうく一丈餘りにも廣がりて落ち行く、末は此方彼方より深山木

西館より	上等	二圓五十錢	中等	下等	一圓
青森迄	六圓			二圓	一圓
小樽迄	三圓			一圓五十錢	一圓
江刺迄	四圓五十錢			三圓	一圓五十錢
森都迄	七圓五十錢			四圓	三圓
厚岸迄	十圓			四圓	三圓
根室迄	三圓七十錢			四圓	三圓
室蘭迄	十五圓			四圓	三圓
伏木迄	十三圓五十錢			四圓	三圓
直江津迄	十二圓			四圓	三圓
新潟迄	八圓			四圓五十錢	三圓
土崎迄	八圓			二圓五十錢	二圓

右諸表の如き定めにして、乗客四歳までの小兒は無賃、十二歳迄は半額、往復切手は、上中等に限り、大凡二割引なり。又手荷物は、上等船客十二貫目迄、中等船客九貫目迄、下等船客六貫目までは、何れも無賃なり。

○第五内國通運會社運賃表

旅行者其旅先より、物品を何れの場所へでも運送せんとせば、小

ども生ひ懸りて、小暗き谷の上を見れば、水はなほ上より落ち來て、岩間に入る、此淵二丈ばかりのわたりにて、程は

きものは小包郵便に托すべく、大きな物は、至急を要せず、瀧車ある所に限り、其便に托すべく、さして急がざるものは、内國通運會社に托すべし、今其便用の爲めに、左に其運賃表を掲ぐ。

目方	十里迄	二十里迄	三十里迄	四十里迄	五十里迄	六十里迄	八十里迄	百里迄	百五十里迄	百五十里上
百目迄	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	六錢	七錢	八錢	十錢
二百目迄	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	八錢	九錢	十錢	十二錢	十五錢
三百目迄	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	十一錢	十三錢	十五錢	十八錢	二十一錢
四百目迄	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	十四錢	十七錢	二十錢	二十四錢	二十八錢
五百目迄	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	十七錢	二十一錢	二十五錢	三十錢	三十五錢
六百目迄	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	二十一錢	二十五錢	三十錢	三十六錢	四十二錢
八百目迄	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	二十五錢	三十錢	三十五錢	四十三錢	五十一錢
一貫目迄	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	三十錢	三十五錢	四十錢	五十錢	六十錢
以上百目毎に増し	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	三錢五厘	三錢五厘	四錢	五錢	六錢

○第六小包郵便規則

これも旅行者の知らざるべからざることなれば、左に掲ぐ。

- 一 何品を問はず(毒藥、劇藥、爆發燃燒し易き物品、風俗を害すべき文書圖書、寫眞及び物品、信書又は信書の性質を有す)

ものなかりき、さるは此かたへたる岩の上より淵の底へ飛び入りて、浮び出づる事をして錢を取るなるを、水多くて烈しきときは、浮み出づる際に、若し押し流されて銚子の口にかかりぬれば、今堪へずと云ふに云ふに、銚子の口とは淵より瀧へ落ちんとする際を云ふなりけり、抑も此瀧を滑明の瀧ともしも云ふは、蜻蛉の小野によりたる名にて、虫の蜻蛉ならんと云ひし人もあれど、さにはあらし、里人は蟬の瀧とも云ふなれば、はじめはなべてさ言ひけんを、後に滑明とはさがしらにぞ言ひなしつらん、今瀧の標を見るに、上は細くてやう／＼に下ざるの廣きは、蟬の形にいとよう似たるに、鳴る音はた、かれが聲に通ひたんなれば、さも名づけつべきわざぞかし、又其蟬の瀧は是にはあらず、異瀧なりとも云へど、里人は即ち此瀧の事なりとぞ言ひける、そはとまれかくまれ、かの虫の蜻蛉はひが事なるべし、蜻蛉の小野とはか

るもの、若しくは音信文記入の物品を除く）小包郵便として差出すことを得。

但し流動物、流動腐敗し易き物、解化すべき物、動物、植物、銃刃器、硝子器、陶器等、他の郵便物を傷害すべき物品は郵便局又は取扱所の承諾を受けて差出すべし。

小包郵便物は、郵便料の外に、保険料を納めて、價格登記を爲すことを得。

但し其登記價格は、物品の寄價より超過する事を得ず。

小包郵便物を、其受取人に配達せず、又差出人に戻さるる以前に生じたる損害は、郵便局にて辨償するものとす。

左の場合に係る損害は、郵便局にては、辨償せざるものとす。

(一) 天災其他避くべからざる事變に因りしとき。

(二) 物品等の性質に因りしとき。

(三) 差出人の過ち又は怠に因りしとき。

(四) 本法郵便條例及び其施行に關する命令を守らずして出せしとき。

のあきつ野を誤りたる名にて、もとよりさる處はなき上に、其あきつ野はた、此わたりにはあらじ物をや、さて此瀧の流を音無川といひて、萬よりも怪しきは、月毎の初めなからは、上津瀧に水といふものなく、後のなからは又下津瀧に水なしとてかや、さて上より来る水は、いづちへ如何にして流れ行くぞといふに、石のはさま砂の下などへやう／＼浸み入りつゝ、なくなりては遙に下に到りて、又やう／＼に湧き出でつゝ流れ行くなりと云ふはさる事もありぬべけれど、頃をしも違へで、上津瀧と下津瀧と互にしか代らん事は、なほいと怪しきわざなりかし、されど今は、たゞ世の常の川にてさりけも見えぬは、此頃水の多き故なりとぞ云ふ、即ちかの板橋の懸れるも此川にて、下は西河の里中をなん流れ行くめ、彼里に歸りて、又今朝下り來し山路にかゝる、今朝はさしもあらざりしを、登るはこよなく苦しくて、同じ道とも思

小包配達の際其外部破損の跡なく、目方の變りなき時、又は受取人或は差出人にて、異議なく其郵便を受取たる時は、局は損害を償はず。

保險登記の郵便物の損害は、登記價格迄の金高を償ふ事。

通常小包の郵便物の損害は、目方百匁に付金十錢の割を以て償ふ事。

但し保險物又は通常品共一部分の損害なれば、其れに對せしだけ。

保險登記の價格は、金一百五十圓を限りとす。

登記保險料は價格金一圓まで七錢、金一圓以上は、一圓毎に一錢を加ふ。

小包郵便を差出すには、内部物品の破損せざる様よく包み、三ヶ所以上の封印をし、表に小包郵便と記し、局又は取扱所へ持参する事。

郵便税又は手数料は、送票を申し受け、右一切手を貼附し差出す事。

小包郵便物を、取扱所なき地へ送る時は、最寄取扱所へ留置として差出すことを得、留置期限は、其局に着せし日より

はれず、さて登り果て、いみじうけはしき坂なり、さて下る道はなだらかなれ

十五日以内とす。小包郵便物は配達証明又は別配達を爲すべし。

小包郵便料

量	二百	四百	六百	八百	一貫	一貫二百五十	一貫五百
目迄	迄	迄	迄	迄	迄	迄	迄

十	五	七	九	十	十	十	十
里	迄	迄	迄	迄	迄	迄	迄

百	八	十	十	二	二	二	三
里	迄	迄	迄	迄	迄	迄	迄

百	十	二	三	四	四	五	六
里	六	四	十	十	十	十	十
以外	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

ど、足疲れたるけにや猶いとくるしく、茶屋のある處に暫しとて休む、こゝにて鹿鹽神社の御事を尋ねたれば、そは榎尾西河大瀧と三村の神にて西河と榎尾とのあはひなる山中に、今は大藏明神と申しておはするよし語る、此道よりは程

但し郵便局市外に送達する分は、左の殘金を納むる事。
一個目方六百目迄 三錢
全 一貫目迄 四錢
全 一貫五百目迄 六錢
小包郵便物の目方、寸法の制限は左の如し。

遊しと聞けば、得詣でず、猶坂路を下り行く程に、右の方を見下せば、山の腰を廻りて吉野川流れたり、國栖夏見なんとも川邊に沿ひて、こゝよりは近く見ゆ、さて下り果てたる處の里を桶口といひ、その向ひの山本なる里は宮灘にて、吉野の川は此二里の間をなん流れたる、西河より此處までは、一里あまりもありぬべし、彼國栖夏見なんとは此少し川上なり、下は上市へも程近しとぞ、此わたりは古へ御假宮有りて、おはしましつゝ、道遙し給ひし處なるべし、宮瀧と云ふ里の名も、さるはしにやあらん、此處の川邊のいはほ、又いと怪しく珍らかなり、かの大瀧のあたりなるはなべて稜なくならかなるを、こゝのはかどありて皆するどきびた續きに續きて、大かた川原は岩の限りなり、此岩どもに就きても例の義經が古事とて何くれと得も云はぬこといもを語りなせともうるさくて、聞きも留めず、此わたり川の様、さるいはほの間

目方は一個 一貫五百目迄
長サ曲尺 二尺迄
巾曲尺 二尺迄
厚サ曲尺 二尺迄
但し巾及び厚さ各五寸以内の物は、長さ三尺を限り差出すとを得。
○第七電信要覽

- 郵便は始終取扱ひつけて居れば、こゝに其規則の要を摘ざるも可なれど電信は、旅行中随分入用の事ありて、而して郵便と違ひ、其規則も不心得勝のものなれば、老婆心切として、左に其概要を摘録す。
- 一 電信料は、全國一般、和文片假名十字(一音信)金十五錢にして、十字以内を加ふ毎に、金十錢増し。但し住所姓名は無賃なり。
- 一 歐文は、五語(一音信)金二十五錢にして、以下一語を加ふる毎に五錢増し。
- 一 市内は、和文片假名十字一音信金五錢にして、十字以内を加ふる毎に三錢増し。
- 一 市内は、歐文五語(一音信)を金十錢にして、以下一語毎に二錢増し。

に迫りて水はいと深かれど、長閑やかに流れて、早瀬にはあらず、さて岩より岩へ渡せる橋、三丈ばかりもあらんか、宮瀬の柴橋と云ひて、柴にてあみたる、渡ればゆるぎて、習はぬ心地には危し、又こゝにもかの岩飛びする者ありて、暗らひ来て飛ばす、飛ぶ處はやがて此橋の下なるこなたかなた岸は皆岩にて、屏風なんどを立てたらんやうにて、水ぎはより二丈四五尺ばかりの高なるをかなたの岩岸の上より飛ぶをこなたの岸より見るなりけり、其男先づ着物を皆ぬぎて裸になりて、手をば垂れて、ひしとわきにつけて、目を塞ぎ、うるはしく立ちたる儘にて、水の中へつぷりと飛び入る様、珍らしきものからいと恐ろしくて、先づ見る人の心ぞ消え入りぬべき、此頃は水高ければ深さも二丈五尺ばかり有りとなん、暫しありて、やゝ下へ浮び出で、岸の岩に取懸りて、上り来て、苦しげなる氣色もなく、猶飛びてんやといへど、恐ろし

旅行案内

- 一 至急官報は、通常電報料の二倍。
- 一 至急私報は通常電報料の三倍。
- 一 追尾電報料(受信人の轉居先き、又は旅行先まで傳送するもの)は、通常電報の半額を増す、但し追尾一回毎に。
- 一 同文電報料(着信局を同じふする處、同文の電報を送るもの)は、原信料を除くの外、一通に付和文五錢歐文十五錢なり。
- 一 照校電報料(發信人電文の誤りを防ぐ爲め、特に電信局の注意を要するもの)は、原信料の半額増し。
- 一 受信電報料(受信人へ、電報が正に達せしと云ふ報知をするもの)は、和文、歐文とも、原信料の半額増し。
- 一 別配達料は、着局より九町迄金三錢、以上九町毎に金三錢。
- 一 解船への配達料は一通に付金二十錢。
- 一 電報料は、凡て郵便切手を以て納むる事。
- 一 和文の濁り字は、二字に計算す、略符號は、和文は二字、歐文は一語とす。
- 一 電報を依託する時刻は、午前六時より午後十時迄とす。
- 一 發信人は、電報一通毎に三名まで、連署するも差支なし。

さに又は飛ばせもせで止みぬ、さるは始めの如くして、後さまに向きて、頭を下にさかまきにも、すべて三度まで飛ぶなりとぞ、大かた此業は、こゝらの年を経て、習ひ得る事にて、ちぼろげならねば、一里の中にも、僅に二三人ならでは仕得るものなしとぞ、此男は言ひける、是より歸るさの道の程は一里に足らずと云ふなれど、日も山の端近くなりぬれば、今はとて宿りに赴く、川邊を離れて左の谷陰に入り、四五町も行き、道の邊に櫻木の宮と申すあり、御前なる谷川の橋を渡りて詣つ、さて川邊を登り、佐喜谷村といふを過ぎて、山路にかゝる、少し登りて高瀬といふ瀧あり、宜しき程の瀧なるを、一續きにはあり、つぎにきざまれ落つるさま、又いと面白し、象の小川といふは此瀧の流れにて、今過ぎ來し道より、かの櫻木の宮の前を経て、大川に落つる川なり、象山と云ふも此わたりの事なるべし、櫻いと多かる、

旅行案内

- 一 受信人の都合に依り、電報を電信分局に預け置かんとする時は、其局宛として發するもよろし。
- 一 郵便にて、電報を局へ依託する時は、電信文と郵便切手を添へ差出すべし。
- 一 電信分局より、一里以内の地に配達する電信は、手数料を要せず。
- 一 受信人電報の字句に疑惑ありて、尋問を要るときは、其電報を受取る時より二十四時以内に請求すべし。但し其料金を假納すべし。
- 一 發信人は、電報の字句に改正を要するときは、其電報を依託したる時より七十二時以内に請求すべし。但し發信人たる證據を差出すべし。
- 一 電報の符合は、左の如し。

至急官報(ウナ)	追尾電報(チラ)	改正電報(ナチ)
同文電報(ヨム)	照校電報(ムニ)	受信電報(ニナ)
電信料前納(ナツ)	局符(ヤム)	親展(ニカ)
郵便配達(ツツ)	書留配達(カナ)	別使配達(マツ)
解船配達(ハホ)		

わさめあれど、ありたちて己が世のたつ
きとするものは少し、耳なれぬ魚の名と
も、うづは、はまち、そうたなど、後に
は自ら覺えて昔云ふ、山田色づく頃に
て、鹿退ふ小屋に引板引鳴すなど、珍ら
しう哀れなり、鹿の聲は夜もすがら聞え
て、夕霧の巻など讀む心地す、

夜は湯にぬれさす袖を鹿の聲
月は殊に海より出で、山に入る、雲々の
ながめえならず、浪寄する浦の景色、我
宿の東面よりもくまなく見えわたれば、
明暮欄干にうちもたれて、烏帽子着たら
ましかば、我を屏風の番に描くべきを
笑ふ、

ほし輝のこれにも月やぬれ浴衣
尾花散る方へはひけりうらの波
打ちまてて浪にまけたる砦かな
釣舟や案山子乗り行く波の上
主人の子彦助と云ふ、年十四ばかり、常
に來なれて蟹の囀りきて、所の事など聞
き覺えて語る、彼に案内させてあたりの

を除き、其餘の鐵道は、大抵下等賃金の二倍が中等にして、下等の
三倍が上等なり。

小兒四歳未満は、無賃にして、四歳以上十二歳未満は、半賃金なり。

●日本鐵道會社の乗車賃金下等は、百哩まで一哩に付、凡そ金
一錢二厘。百二哩以上二百二十哩までは、凡そ金一錢、二百二
十一哩以上は、凡そ八厘の割にて、中等は下等の五割増。上等
は下等の二倍半とす。

●高濱外側平井河原間の涼車は、一、二、三、十、十一、十二、六ヶ月
間は終列車の一回を減じ。四、五、六、七、八、九、六ヶ月間は、平
常の通りなり、而して下等乗客にして、一ヶ月十日以上の定期
乗車を豫約するものは、(高濱外側間)往復四錢。(外側平井河原
間)往復八錢の割合を以て、定期乗車券を發行す。

●丸龜琴平間の乗車賃金は、上等は、下等の二倍。中等は、下等
の一倍半なり。

○第十汽車にて貨物運送の手續概要

こゝに掲ぐる事柄は、専ら商用等にて旅行する人の心得になる規則
の概要なり。讀者之れを諒せよ。

●鐵道にて貨物を運送せんとするものに、貨物の等級に依りて、
運賃の相違あること、又貨物を澤山送るには、貨切車といふ
ものがありて、極めて運賃の安きことを知らざるべからず。

●貨物の等級は、一級より五級までありて、これに級外品を加ふる
ときは以上六級ある勘定なり、併て其一級品は何々、二級品は
何々、細かに記すことは、到底此紙上に盡し難ければ、こゝ
には其概略を記す、委しきことは、鐵道各驛の貨物掛に就て聞
くべし。

- 一級品(穀物、紙、瓦、其他のもの)の運賃は、目方百斤に付、
一哩金貳厘の割。
- 二級品(乾魚、鹽魚、蠟、其他のもの)の運賃は、目方百斤に付、
一哩金三厘の割。
- 三級品(絲、古着、油、其他のもの)の運賃は、目方百斤に付、
一哩金四厘の割。
- 四級品(衣服、刀物、籠、其他のもの)の運賃は、目方百斤に
付、一哩金五厘の割。
- 五級品(彫刻物、備箱物、其他のもの)の運賃は、目方百斤に
付、一哩金六厘の割。

宮寺など見廻り、漁家に茶を乞ひ、樵夫
に煙草の火かりて、吟歩機を忘るゝ程言
ひすてたる句ども、例の知る人のもとへ
書付けて遣はす、登歩一里ばかり日金山
に登れば地蔵堂あり、駁豆の海山眼下に
連り、景色言ふばかりなし、富士は西に
限なく、異山の秋に別れて雪白き姿、衣
錦御綱どかいへる、この山の鶴に比すべ
きにぞ、

四方山の錦や富士にはづかしき
都松といへるは、染殿の後の跡のしるし
なりと、野老の言傳へたりと語る、何れ
の時にか、柿本紀僧正染殿の后と密通
の事ありとて、さらぬ疑の科にて、此
處に洗されて後失せ給ふ、后は八幡と齋
ひ、紀僧正も宮と祀りしが、其仇名の憂
きを厭ひて、二つの祠昔は互に相背き
てありし、今は八幡は外に遷して其所開
も残り侍らず、常に後の都を戀ひ給ひし
か、跡のしるしの松も、都の方へ枝葉さ
し向ひければ、之を都松と云ひける、僧

正の社の側に大きな櫻のありし、中頃此の後に御殿作りけるが、障りなりとて此木を伐りしかば、彼の松も程なく枯れにけりとぞ、其木の共に枯れたる契ならば濡衣の名も如何なりけんと覺束なし松枯れてどの木へ蕪や所がへ僧正の社は、殊に大きな椎の木の本のはさまにあり

御所の色にこりてや椎が本湯前權現に我病を祈る

新蕎麥や疝氣に利生見せ給

伊豆權現奉納

海と山兩部に月のくまもなし業平井ば里中にあり、此處の男女の、常に水汲み影うつして、自から妹脊の煤ともなれば、言ひならはしたりとぞ、豆ひきの影や井筒に豆男

平左衛門湯といふあり、平左衛門かひなしとよばれば湧出づるとて、里の子供の呼びて、旅客に錢などもらふ、子どもいさ呼ばれ紅葉に立田姫

重陽に逢ふ

えり出して菊をいはん草枕

後の月

山の湯も温鈍にわくか後の月

木の宮

木の宮も草からさきへ秋くれぬ

暮秋

行く秋の干魚に残るなるこかな

天神

飛石や梅にまけじともいの花

眞鶴ヶ崎

まなづるも短き冬の日脚かな

大島は遠くかすかなり

大しまや片目しぐる、遠目鏡

初島はちひさき島の、向うに近く浮べり、

沖の小島は是なりといふ、又大島をいへりとも、里人の傳もまち／＼なり、

木がらしや片手になづる島一つ

十月十三日熱海を立たせ給ひて、江府へ歸らせ給ふ、道すがら鎌倉に三夜ばかり御座して、寺社古跡をも御覽す、從ひ奉

●級外品（襦籠、車、金銀器物、其他のもの）の運賃は、品物に依て異なれば、よく開合すべし。

右の如くにして、其貨車借切、并に貨物割引賃金は、左の如し。

●三級品以下の貨物一品（同種類の貨物は、數品なるも、尙一品と見做して、取扱ふことあり）にして、一車以上の貨切は、區間に依り、一哩一噸に付、金貳錢の割合なり。

●米穀、鹽、肥料、石炭等の粗雜なる貨物は、區間に依り、貨切一車一哩一噸に付、金一錢五厘まで、賃金を減額することあり。

●三級品以下の貨物混積にして、一車以上の貨切は、區間に依り、一哩一噸に付金三錢の割合なり。

●四級品以上の貨物と雖も其品質と區間の實況とに依り、特に三級品以下のものと同一の取扱をなすことあり。

●同數なる往復貨車の貨切は、區間に依り、往復賃金額を、四分の一以内減ずることあり。

●長距離に涉り、十輛以上の貨切は、特別に其賃金の減額をなす。

●貨切車に、哩程二十哩未滿は、二十哩の賃金にして、貨物一車未滿は、一車分の賃金なり。

●貨切車の貨物は、其積卸は、貨主の負擔なり。

●一個人若くは一會社にして、一ヶ月に、金五千圓以上の貨物運賃を納むるものは、其割引左の如し。

●但し直江津輕井澤線路に係るものは、他の各線に係るものと通算せず。各別に計算す。

●金五千圓以上八千圓未滿は、百分の三。金八千圓以上壹萬圓未滿は、百分の四。金壹萬圓以上は、百分の五なり。

●米穀の如きは、貨切貨車にて運送するときは、五十哩以上一哩一噸金壹錢五厘。百哩以上同じく壹錢三厘。二百哩以上同じく壹錢貳厘三百哩以上同じく壹錢の割引にして、木材食鹽の如き、物品も、右と同じ割引なり。

●特約運送は、貨主より、期限、數量、及び區間を定め、鐵道廳へ、運賃の割引を請求するものにして、鐵道廳にて承諾の上は、貨主は、其期限間に、約束の數量を送り出すの責任あり。

●三級品以下、一品積の時、同種類の貨物は、數品なるも、一品と見做すと云ふは、米、粕、干鰯、油粕を、肥料として、一品と見做し。米、麥、豆、粟を、穀物として、一品の賃金にて運送するの類なり。

●四級品以上の貨物を、三級品以下同様の取扱となすとは、金巾

りて見廻る程、句など言ふべき處も多かりけれど、事に紛れて皆洩らしつ、道をまよりの神に申す、

守りたまへ神もまたびの道すがら櫻の島

此神の御手にや句ふひはの花
白菊か淵

十月やげに白菊の名もむかし
龍穴

此の洞を思へば神も冬ごもり
鎌倉にて

鎌倉のかまの名さびて枯野哉
何がしの寺にて重衡の盃を見る

杯に銚子もそへずさむさかな
盛久が首の座

盛久が命やはまのかへり花
鶴が岡八幡

御供して鶴も留守なり神の松
十九日、金澤の方にははらせ給ふ、能見

堂といへるより八景を見わたす、奇絶の
勝景言葉にのべ難し、折からうちしくれ

しに、
八景のうち二つ三つしぐれけり

二十一日、武府へ歸らせ給ふ。
○富士賦

不二日本の蓬萊山なり、むかし孝靈五年はじめて現す、徐福も此山に登りて仙薬を求め、かくや姫も神と化してこゝに盤をどいむ、峰は八葉に分れて、根は四州に跨る、道路は三口より登りて千筋に分れ、裾野は東西に長うして百里にのなる、形けつりたるが如く、高きこと北斗に近し、夜陰に旭をかいやかし、夏に雪をいたく、山間に海をたえ、山上は眞砂を踏づ、和國異朝類するものなく、三國名山と稱して、義楚六帖に甚だほめたり、日本武尊は東夷を平らげて草薙の名をあらため、右大將額朝はものふをあつめて牧狩をする、鳴澤の池は俊成の仇名をとり、人穴の奥は仁田が無分別さうなり、十郎の宮、五郎の社、西行

交織の如き四級品を、三級品なる綿布と積合すの類なり。

● 巨大の物品二車或は二車以上を要するものは、一哩一噸金四銭なり。

● 量目五噸以上にして、十噸積車一車に積み得べきものは一哩一噸金三銭五厘。量目四噸以上にして、五噸積車一車に積得べきものは、一哩一噸金二銭五厘なり。

● 引越荷物を、貸切車にて運送する時は、一哩一噸金三銭なり。

● 生絲平絹は五級品なるも、三百哩以上運送する物は四級品賃金なり。

● 石油摺附木は、一車以上貸切五噸積は、三級品以下一品の賃金なり。

● 藪は、貸切車にて運送の時、一哩一噸に付金三銭なり。

● 牛一頭一哩金三銭、三頭以下は三頭分の賃金なり。但し長距離多数の運送は、一車貸切一哩金拾銭又は八銭までの割引あり。

● 馬一頭一哩金拾銭なれども、貸切車なれば、一車一哩金拾五銭なり。

● 尙備考の爲め、左に、鐵道用度量表を示す。

○ 一哩(八十鎰)は、凡そ十四町四十五間にして、即ち一里は、凡そ二哩半に當る。

○ 一鎰(百鎰)は凡そ十一間三尺八寸なり。

○ 一輪(七吋九分)は、凡そ六寸九分八厘なり。

○ 一呎(十二吋)は、凡そ一尺〇〇五八厘なり。

○ 一噸(二千二百四十英斤)は、即ち二百六十八貫八百目、即ち千六百八十斤にして、升目にすれば、六石七斗二升、即ち百石目は、凡そ十五噸に當る。

以上の運賃は、主として官設鐵道にのみ通用すべきものなれども、私設鐵道の運賃は、右の割合より、幾分か安しと知るべし。

○ 第十一鐵道線路案内概略

諸國の風景風土の有様を叙述するに先立ち、旅客の爲め、こゝに其線路の案内を容記せん、讀者請ふ、後に記す各道の案内と参照せられよ。

● 新橋停車場 此所よりは、鐵道馬車にて、上野停車場へ連絡するを得べく、旅客東京見物せんとすれば、下車して、勝手氣儘に遊ぶべし。

は五文字をすへかね、探幽は墨色にあぐむ、煙は古今の序に、二流によまれ、雲は廻船に怖れて一尺八寸の號をどいむ、禪定の人には寶冠に頭をつみ、下向道は小袖の砂をふるふ、絶頂の鯨半腹の雀、巢鷹は小心にして伊豫の松山におとし、水鳥の羽音には臆病になつて都の方にぐる、ふし海苔不盡灰富士甘草ふし黄芪、栗柿松檜の木のためひ、往還は竹の下越根原越、關は足柄の關横ばしりの關、あら井の渡口、佐夜山の越、海を隔て峰を重ぬ、三保清見寺の見越、宮根鎌倉の姿、日本兩國の橋上には、馬上の人の首をめぐらし、赤坂駿河臺には乗物の窓に眸をさく、遠くは朝熊山を限り、近くは原よし原のあたりなるべし、諏訪の海には倒の影を没し、甲州の府には三峰に見えて、扇の繪はこゝなるべし、昔より詩歌連俳の句敷、あはせてこれをつまは、大かた此山の高さは比せむ、されど古今の間、たゞ一首秀でたるものは、赤人

- 品川停車場 には、赤羽線に續く支線あり、此處は東京の南の端にして、昔より繁昌なる土地なり。停車場から北へ五六町にして、義士で名高き泉岳寺あり、其他御殿山、東海寺、海晏寺などの名所あり。
- 大森 では、本門寺、新田神社などへ參詣するも宜しかるべし。
- 八景園、池上の温泉などもあり。
- 川崎停車場 から東の方二十町ばかりに、名高き川崎大師あり。
- 神奈川 は、横濱を距ること一里ばかり、本覺寺、飯坂権現などあり、此處で泊れば、宿屋は、奈古屋、田中屋等が好いと申す。
- 横濱 は、日本第一等の貿易場、なか／＼に繁昌なるは、言ふまでもなし、此處からは、船に乗りて、日本各地は勿論、唐天津へでも往れるなり、宿屋などは、頗る多し、中に就て、津久井屋富貴樓など上等なり。
- 程ヶ谷 から四里ばかり往けば、金澤八景といふ名所あり、一寸下車して一覽するも宜しからん。
- 戸塚 東海道より、鎌倉へ赴く通路あり。宿屋は、鎌倉屋、伊勢屋など云へるが重立たるものなり。
- 大船停車場 は、横須賀線の分るところなれば、鎌倉運子へ行

の白妙なるべし、其餘は此山に對して芳が一にも及ばず、わが翁富士吉野の句一生なしとかや、東路に赴く人は、かく成りがたきふじの詠に心力を勞し、又東路に赴かぬ人は、かくあり難き富士を見ずして、一生を終るも、ともに残り多きことなるべし。

○東海道

淺井了意

水口より石部まで三里半、宿の入口になりぬれば、何とは知らず、女の聲にてわやくいふを、あれは何事やらんと問へば、旅人をどいむる女房どもの聲なりと云ふ、男聞きて、かの業平の水の下にて諸聲にとよみける歌を思ひて、

水口に我やどひらんをなごさへ
軒の下にて諸聲に呼ぶ、
とよみけり、樂阿彌云ふやう、いごやこ
こに泊り侍らんといふ、男も草臥たり、
日は暮方なりければ、然るべしと云ふ所

- くものは、乗換ふべし、油断すべからず。
- 藤澤 は、なか／＼繁昌の地なり江の島は鶴沼の見物人は、此處にて下車すべし。又此處には、遊行寺といふ大寺あり。
- 平塚 では、四里ばかりも往けば、大山雨降神社あり。宿屋には、朝田屋笹屋などあり。
- 大磯 には、海水浴場あり、夏時の遊びどころなり。宿屋には、禰龍館、招仙閣、松林館など立派なものあり。高麗山脈を見上れば、貴顯紳士の別荘ならび建ち、名所探らんとせば、秋の夕暮に名高き鴨立禪あり、曾我兄弟の舊蹟もあり。旅客此處にて下車し、西行法師、虎御前、雅でも、粹でも、其跡を尋ねて、昔しを忍ぶが好し。
- 國府津 旅客箱根へ往んとせば、此處にて下車すべし。此處から、小田原へ一里半ばかり、温本へ三里ばかり、何れも鐵道馬車の便あり、宿屋には、松濤園、國府津館、葛屋などが宜しとの事なり。
- 松田 此處より、線路急勾配になり居る。下車して何處か遊ばんとせば、道了權現へ二里八町ばかり、大山雨降神社まで三里餘りなるが、路はなか／＼難儀なり。
- 御殿場 の近傍に、御厨町あり、山中ながら小さき市を成して、

に、女房ども町中へ走り出で、むなぐら
 を捕へ、手取り足取りしける程に、是は
 如何に、先づ物を言はせよといへども、
 女房は耳にも聞き入れず、無理に家の中
 に引込む、樂阿彌も引つりやんぎやうに
 あひて迷惑する、ひらに泊らせられい、
 鱈汁をいたさうと云ふ、此宿は三百六十
 日旅人に鱈汁の旅籠をする所なりと申し
 傳へたり、牛の皮を切りて馬糞をかきま
 ぜ、水に浸して日を重ねれば香醗になる
 と、人の言ひ傳へし、斯かる悪口を聞く
 事のきたなさと云へば、此處は四方皆
 川多く田地大なれば、鱈を取りて賣り來
 れるよしを語る、樂阿彌聞きて、古今集
 藤原の敏行朝臣が歌を思ひて、
 幾ばくの田をすくへばか鱈をば旅
 籠の汁に朝な夕なする、
 とよみけるを、遂に内へ引き入れぬ、賊
 に此宿は道中一番の人とめどころにて、
 紙子など着たる人は通る事ならずと、衆
 ねて聞きしは偽りならずとや、旅籠の亭

富士登山者の支度する所となり居る、富士屋、近江屋などいふ宿
 屋あり、此處は、東海道中の一番高いところ。
 ●佐野 此處には、佐野深園と呼べる遊樂場あり、園内に、五龍館
 といふ宿屋あり、夏時の旅行に、一寸道寄するも可ならん。
 ●沼津 には、我入道、牛臥、戸田などの海水浴場あり。宿屋には、
 杉本屋が名高し。
 ●鈴川 の海岸には、田子浦あり、打出で、白妙の富士見るも好ら
 ん。
 ●岩淵 富士川の西岸に當る、此處から北へ十里ばかりも往ば、甲
 州の身延山に登ることを得、宿屋には、萬屋谷屋など好し。
 ●奥津 此處には、名高き清見寺あり三保の松原を脚下に暇留する
 ことを得、是非下車して、一遊を試みれば叶はぬとするるべし
 ●一碧樓、海水樓など、名さへ涼しき宿屋あり。
 ●江尻 此處より南へ十五町ばかりも行けば、駿州第一の港なる清
 水港へ着す、久能山は、西南二里半、上原より左に折れて、一里
 ばかりの所に在り。
 ●静岡は、駿州第一の都會、淺間神社は、此處より十五町ばかりあ
 り、遊覽の場所なか／＼多し。宿屋は、停車場前にて、大東館、機

主は年頃の翁にて、古き物語しける中に、
 此宿の中程に道筋二つに分れ、右の方に
 行けば觀音堂あり、大岡寺と名づく、古
 へ當國江州の甲賀村に、甲賀の太郎二郎
 三郎とて兄弟三人あり、常に山に廻り鹿
 を殺して世を渡る、其兄弟或時打ちつれ
 て、若狭の國高懸山に分け入りけるに、
 此山の神大蛇の形にて顯れ出でたり、兄
 二人は恐れて逃げたりしを、三郎踏みど
 どまり、神と戦ふて遂に其神を斬り殺し
 ぬ、兄二人鹿を取るに妨ありと怒りて、
 三郎を捕へて谷底に押し落して殺す、然
 れども三郎死せずして忽ち大蛇とな
 る、其住む所に穴出で来て、信濃の國小
 葱の松原に抜け通る、爰に三郎が妻子は、
 三郎既に山中にして大蛇のために殺され
 たりと聞き悲み歎き、やがて此觀音堂
 を造りて深く跡を弔ひしに、三十三年に
 當る日、かの大蛇故郷をゆかしく思ひ、
 小葱の松原よりはい出で、家に歸りたれ
 ば、里人恐れ惑ひて逃げ走る、妻子も、

陽館、清水館、見晴、靜榮館、清鶴樓など名高く、傳馬町へ往け
 ば、宿屋多く藤屋、上藤屋など其重るものなり。
 ●焼津 草薙の寶剣を振ふて、日本武尊の賊難を免れ給ひしところ
 は此處なり。海水浴場に、秋月樓といふがあり。
 ●金谷 の近傍には、和歌に名高き小夜の中山あり、五和村の鑛泉
 は此處より二十五町ばかり北に在り、宿屋を、潮月館とは云ふ、
 風流人は、下車して歌でも詠むが好し。
 ●濱松 此町の北には、濱松の城跡あり、其他參詣すべきところ
 は、五社神社、半僧坊等の出張所なり。宿屋には、大米屋、春屋
 等が名高し。
 ●豊橋 此處より豊川稻荷へ參詣せんとせば、東北二里ばかり往く
 べし。停車場前の宿屋には、小島屋、壺屋など宜し。
 ●蒲郡 から四五町行けば、海月館、健碧館などの海水浴の宿屋あ
 り。
 ●岡崎 は徳川氏の起りける名高き地なり、其城跡今は公園となり
 居れり、此處より北へ二十町ばかりも行かば大樹寺に到ることを
 得。宿屋には、丸藤、鍵屋山田屋桔梗屋などあり。
 ●大府 の停車場は武豊線路の分るところなり。龜崎、半田、武豊

古への三郎なりと名乗れどもあらぬ姿なりければ、恐れて近づかず、三郎は大蛇になりたりとも覺えず、こゝにして我形のあさましく變化したる事をさとり、甚だ恥ぢ悲み、観音堂の椽の下にはひ入り、蟻まりて南無観世音大菩薩と唱へんとするに、舌こはくして唱へられず、唯南々どばかり言ひける所に、観音眉間より光を放つて、大蛇を照し給へば、舌柔になりて、南無観世音大菩薩と唱へたり、其聲の下に、かの大蛇たちまちにもぬけて、元の三郎と爲りたり、夫より家に歸りけれども、妻子は怪しみ恐れてありしかども、さすがに恩愛の情忘れがたく、後には其かみの如く夫婦親子の契淺からず、かゝりしかば、太郎も次郎も恐れて自害しけり、三郎遂にして甲賀の押領使になりて、家榮へ侍りし、斯くて三郎は又信濃の國に飛び去りけり、諏訪の明神の化身にて有りけりと、人の夢には告げ侍りと語る、此宿には、ついで、こ

等へ行くには下車すべし。
 ●大高 から鳴海驛へは、十町ばかりも行かざるべからず。其昔し信長が山を張て大當りを取りたる桶狭間の古戦場を訪んとせば、一里半餘りも行かざるべからず。
 ●熱田 は、海路四日市に通ず、船に乗りて四日市へ往くを得べし。此處には名高き魚市あり、熱田神社、白鳥の御陵などは、案内せずとも、人の知るところなり。宿屋には、岡田屋、紀伊國屋、伊勢屋など名高し。
 ●名古屋 は、三都に亞ぐ繁昌なところ、金の饒に名高き城、牧山の公園、豊國神社など、遊覽すべき場所多し。宿屋には秋琴樓、山田屋、品忠、丸文などよろし、其處で、此處から、東海道筋を行き、又は伊勢参宮せんと思ふ人は、一たび下車して、關西鐵道の電車に乗るべし。
 ●岐阜 には、金華山、養老神社などの遊覽所あり。長良川の鵜飼は、昔より世に知られたもの、旅客一覽するも可なり。併て此市は、去る二十四年の大害に、全く變形したるが、宿屋にて、目下宜しきところは、天駒屋、玉井屋、津國屋などなり。
 ●大垣 停車場から、孝子で名高き養老の瀧へ行くには、西南三里

り、釜敷などあみて賣る、美濃街道には近江路に入りて、高宮の邑にもあり、水口煙管も名物なり、町はづれ右の方の松林の内には、八幡の宮あり、折節林の内に郭公鳴きければ、樂阿彌
 八幡のあたりで鳴くも郭公
 左の方に御茶屋あり、馬場崎、小脇村、いづみ村、
 横田川、土橋あり、洪水には舟渡しなり、田川、茶屋あり、みくも村、よしな村、なつみ村、はり村、いら松村、かうじ袋村、
 石部あり草津迄二里十二町、
 ふるき發句に
 甲賀にや續く石部のはこ柳
 馬方共の語りしは、近江の國は昔より相模を取る者多くて、石部草津の兩の宿より出で合ひて相模を取るに、草津方には鏡、武佐、守山より集まり、石部方には甲賀、横田、かうじ袋のあたりより集ま

ばかりあり、宿屋は、玉屋、安田屋など好し。
 ●關ヶ原 は、有名な古戦場、豊臣徳川が、天下分目の戦争した所なれば、旅客下車して、兵共の夢の跡訪ふも一興ならん。此原より北へ二里ばかりの所に、伊吹山あり、寐物語の里は、原より西へ一里半ばかりなり。
 ●米原 は、琵琶湖に沿ひし小さき市にして、東海道線より、金崎線の分るるところ。
 ●彦根 は、井伊氏の舊城趾にて、今は公園となり居れり。多賀神社は、此處より二里ばかり隔たりし所に在り。
 ●草津 は、東海、中仙兩道の分るる所、又本線より、關西鐵道線と接続する地なり、旅客心得置くべし、宿屋は、大藤館、藤屋等あり。
 ●馬場 は、大津町に近し、近江八景を見物せんと欲せば、此停車場にて下車すべし。膳所は、僅かに三町餘りの北に在り、木曾義仲の舊跡、芭蕉翁の墳墓など、訪ふべき所多し。其處ら見れば、湖上を往來する船舶賑はしく、風景も面白く、宿屋には、大津の小林亭、松坂屋などありて、旅客は、是非一遊せねば叶はぬ所なり。

互に齒がみをして取る程に、石部方取り勝つ事もあり、草津方取り勝つ事もあり、大名方に聞き及び給ひては、相撲の衆とし召しか、給ひし、今は天下此事すたれたるに似たり、日本に相撲の始まりしは神代の古へも有りたる事とは申せども、正しく人皇の世になりて其名高く聞えしは、垂仁天皇の御宇に當りて、當麻の暲速、野見宿禰と云ひけるものぞ、相撲をば取りける、然るに暲速は野見宿禰に殺されぬ、其後は惟喬惟仁の親王の御位争ひの時に、紀名虎と善雄の少將と相撲を取りて、名虎負けにけり、又其後には侯野河津か相撲を取りし、此等は天下に隠れなく、書典に載せられて今に傳はる、されば禁中には年の始めに、相撲の節會とて行はれけるとかや、語りてはる、此に慰みて行く程に、山越離れよ此敵の峰見えそめけり、

宿の町はづれより右の方一里ばかりに三上山見ゆ、世に之を百足山と云ふ、其山の形はうつくしうして小なき富士の山なり、跡に、昔富士権現近江の地を掘りて富士を造りたまひしに、一夜の中につき給へり、夜既に明けは、霞かたをこゝに捨て給ふ、是れ三上山なりと云ふ、さもこそ有るらめ、古へ孝靈天皇の御時に、此近江の海水一夜の中に出で来て、其夜に富士山湧き出でたり、其時しも三上山も出で来てけり、一夜の内に山の出で來、淵の出で來、又山は移りてよそに行き事、物知れる人々は、深き道理の有る事なり、故なきにあらざと申されし、昔此三上山を七卷半とひて住みける百足あり、勢田の橋の下に住みける龍神をあびやかして殺さんとしけるを、俵藤太秀郷只二矢にて百足を殺したり、其報恩に、米の俵一つ、扇一匹、笠一つ、鐘一つを與へたり、秀郷を俵藤太と云へるは此故なるべし、彼の俵は米を取れど、米つきず、絹は裁ち切りつゝ使へども使へども昔にならず、笠は新なしに物を入

旅行案内

●大谷の近邊には、逢坂の關、蟬丸社、關寺、小町の舊跡などあり、下車して、昔しを忍ぶも可なり。

●稻荷の停車場より、南へ二十町餘りも行けば、伏見町へ到るところを得、京都に次での繁昌なるところ、名所舊跡等も多し。東南二里あまりの所に、宇治村あり。

●京都の停車場は七條烏丸通に在り。日本國の公園地とも稱せらるゝところ、悉しきことは、後の案内に記す。

●山崎 此處は、明智光秀滅亡の古戰場、蕭條たる野原、懷古の感深かるべし。

●大坂の停車場は、西成郡曾根崎村の梅田に在り。日本第一の商業地なれば、其繁華は、言ふまでもなし、悉しきことは、後の案内に記す。

●神崎は、南は尼ヶ崎、北は池田伊丹に通ずる攝津鐵道あり、旅客心得置くべし。

●西の宮は、舊跡多し。神功皇后御出産の地と稱する打出の濱は、此近邊の海。猿丸大夫の墓、業平の屋敷跡なども、近邊に在り。

●住吉 停車場の傍に、住吉神社あり、岡本梅林は、東北半里ばかり隔たり、有馬の温泉は、北三里十町ばかりの所に在り、其温泉宿には、奥の坊、二階坊などを重として、其外十數軒の宿屋あり。旅客一遊するも可なり。

●三の宮の近傍には、生田神社、布引の瀧等の遊覽所あり、此處より、神戸までは真に僅かの道なれば、此停車場にて下車し、其處ら見物しつゝ、往も可ならん。

●神戸の停車場は、神戸市東川崎町に在り、此處は、繁昌なる港にして居留地の光景、湊川神社、諏訪山温泉等の遊覽所多し、瀧車は、山陽鐵道線路に連絡し、瀧船は、何處の港へも發す。宿屋には、自由亭、常磐樓、音羽、花壇などを重として、二十軒ばかりもあるべし。

大船横須賀間の案内

●大船は、新橋神戸間の案内に記せり。

●鎌倉は、其昔し頼朝が幕府を開きしより以來、二百年間繁昌せしところとて、名所古蹟の多きこと他に類少なし。鶴ヶ岡の八幡宮、鎌倉宮、萬原岡神社、建長寺、長谷観音、大佛等を始めとして、數百の遊覽所、行くところとして散在せざるはなし。宿屋は雪の下に、丸屋、對鶴樓、三ッ橋の支店、長谷村に三ッ橋樓、由井

るれば煮えたりとかや、鏡は三井寺に奉りて今にあり、藤太やうく有徳になりぬ、相馬の將門を討ちてより、天下に隠れなき兵と名を顯しけり、されば今も此山には大なる百足あるよし聞き傳へたり、千載集に藤原季經朝臣の歌、常磐なる三上の山の杉むらや八百萬世のしるし成るらん、

此山には榊梅をもよめり、又玉葉集讀人不知の歌

志賀の浦や時雨てわたる浮雲に三上の山ぞなかは隠るゝ、

たか野村、尾の村、茶屋あり、手はら村を打ち過ぐる、草津の辰馬に大坂男を乗せて行く、馬方申しけるは、こを手はらと申すことは、もとの名をば手孕と文字にも書きけるよし、古へ此村の某他國に行くとして、其妻の年未だ若く形うつかりければ、友達に預けて三年まで歸らず、友達之を預り我許に置きたりしに、人の盗み侍らんことを恐れて、

夜は女の腹の上に手を置きて守りしに、女孕みて十月と云ふに手一つうみけり、夫より此村を手はらみと云ひけるを、略して手はらと云ふと語りぬ、左の方に笠松あり、木の下に稻荷明神の社あり、勾の村、川づら村、此村の出はなれに川類の池あり、今は沼なり、右の方なる山の麓より湖海見ゆ、もとふくろ村、めかは村、岡村、新屋敷村、草津川左にあり、橋あり長三十六間、常はなし

草津より大津へ三里半六丁、春元が道中發句に 作り木やりくつ草津の宿の梅

知貞が發句に 豆腐よりや草津の焼餅つじ

又或人の發句に 行きやらでつむは道草芽花なか 宿の入口に札の辻あり、右の方に道あり、美濃街道守山に行く、

ヶ濱に、海濱院あり。

●運子 は、海水浴の流行してより、名高き所とはなりぬ。宿屋に、養神亭、日影茶屋等あり。

●横須賀 は、日本第一の軍港にして、鎮守府を置く、巨大なる造船所あり、随分繁昌なところなり。宿屋は、海岸に、大津館あり、其他三富屋三浦屋など數軒あり。

大府武豊間の案内

●大府 は、新橋神戸間の案内にあれば記さず。

●龜崎 には、宿屋は、中口屋を始めとして、其他數軒あり。

●半田 は、一箇の港にして、横濱と來往する定期航海船あり、宿屋には、瀧利、新文亭などあり、又對岸の海濱には、大野海水浴場あり、海濱館、恩波樓などを始めとし、數軒の宿屋あれば、旅客此處に一遊するも可なり。

●武豊 屹立する鳳翔山と言へるは、去る二十年のことなりき、陸海軍大演習の行はれしときに、天皇陛下が天覽遊ばされし所なり、山上に養生館と云へる小亭あり。又近くに、師崎豊濱の海水浴場あり。

米原金ヶ崎支線間の案内 (此線路は米原より東海道に分る)

●長濱 の停車場前に、樹屋と云へる宿屋ありて、これを第一とす。湖上漁船の發着する港にして、大津町と連絡せり。旅客船に乗らば、直ちに大津へ到ることを得。

●敦賀 には、三十餘戸の人家あり、東北には、福井市を控へ、又金ヶ崎に接近して、なかく繁榮の地なり。

●金ヶ崎 は、近海中最良の港にして、大黒屋、米市屋など言ふ漁船問屋あり、嘗て新田義貞が據りかゝりしと云ふ歴史つきの愛宕山は、此停車場の近傍に在り、山上より、全市の景を眺望するを得べし。

大坂奈良及び櫻井間の案内

●港町 の停車場は、心齋橋戎橋などに近く、千日前の諸見物には、是非此處より行くべし。

●天王寺 から、清水及び一心寺などは、僅かに三四町の道なり、生國魂神社、高津神社等へは、これも僅かに十町ばかり、旅客下車して見物するも可なり。

●平野 から、融通念佛派の本山大念佛寺までは、僅かに一町の道なり、御信心の方は、下車せらるべし。

●八尾 から、信貴山、毘沙門天、瓢箪山、稻荷等へ行くには、此

明神右にあり、やくら退分是なり、右の方に往けば矢橋の浦に行く、こゝよりは船に乗つて、横わたりしに大津に行く、直ち歩を行けば勢田の橋に出づる、樂阿彌申すやう、矢橋に出で、船に乗れば道の程二里ばかり近けれど、西風にはわろし、唯今日は歩いてよしとて勢田へ廻る、退分の北南の兩家の家は、是れ隠れなき草津の姥が餅屋なり、樂阿彌、顔つきは理屈草津の姥が餅孫がため、に味をちざれり、野路の里、此前に條原の里の跡あり、男云ふやう、昔し兵衛佐藤朝伊豆の國姪が小島を出で、旗をあげたまふ所に、佐々木四郎高綱、其頃は都の東山の麓岡崎と云ふ所に、養はれてありけるか、此事を聞き及びて、岡崎を忍び出で、關東に下りしに、條原のあたりにて足疲れ果てければ、此にては中々關東までは下り着く事かなふべからず、いかかすべきと思

處にて下車せざるべからず。
● 相原 から、道明寺、天満宮、玉手山、安福寺、札所觀音葛井寺等へ近し。
● 王寺 達摩寺、信貴山などの參詣、龍田川唐紅の水くゝる紅葉見物には、此處にて下車するを好しとす。
● 法隆寺 停車場から、法隆寺へは十町ばかり、廣瀬神社へは十五町ばかりなり。
● 郡山 にて下車せば、矢田寺、西松尾寺、藥師寺、唐根提寺、西大寺、菅原神社等、遊覽すべき所なかく多し。
● 奈良 は、昔しの都、春日の神社、東大寺、白藤の滝、笠置山などを始めとし、名所舊蹟頗る澤山、旅客は、是非とも下車して一遊せざるべからず、宿屋は、明秀館、角定、武藏野等を重とし、其他にも随分好い宿屋あり。
● 下田驛 から、彼の中將姫の古跡なる當麻寺、志津美神社等へ近し。
● 高田 から、役行者の舊蹟鯨の浦に近し、一遊すべし。
● 畝傍 には、神武天皇の御陵を始めとし、榎原神社、壹阪觀音、久米寺、吉野寺遊覽所頗る多し、下車して此處ら探勝すべきなり。

ひ煩ひける所に、馬を引きて來るものあり、高綱近づき寄りて侍るに、此馬は何方へつれて行き給ふと云へば、守山の市に行くなりと云ふ、さてそなたの名をば何と申すぞ、紀之介と申すと答へたり、高綱云ふやう、いかに紀之介殿、某は都の者にてまだ初旅なれば、足もはや疲侍り、その上斯かる寒天の折柄、野洲の川わたり兼ね侍らんに、川向ひ迄其馬に乗せて渡してたび給へかし、御恩をば報ひ奉らんとし、紀之介さらば川向ひ迄借し申すべし、川を渡り給はば下り給へると、馬を借したり、高綱最早此馬我物なりと嬉しく思ひ、打ち乗りて川を渡り、半丁餘り行けども下りず、最早下り給へ川はたまでとこそ約束はいたしけるに、て、跡につきて來る、高綱は鞭を上げ逸足を出だしてかければ、紀之介腹を立て、あれ、馬盗人よと追ひかくる、既に條原堤にして、跡先は朝霧ふかくて人影も見えず、こゝに下り立ちて紀之介

● 櫻井 から、安倍の文珠、初瀬觀音、多武峰、大野彌勒寺等へ近く、此外にも、大和神社、三輪神社、寶生寺など、遊覽すべき箇所も少なからず。
● 龜山津間の案内
● 一身田 には、眞宗高田派の總本山なる専修寺あり、御信心の方は參詣せらるべし、此處で、宿屋は、辰巳屋、圓城などが好いの事。
● 津 は、藤堂家の舊城下にして、津城趾の公園招魂社、四天王寺、結城神社などを始めとし、其他にも、遊覽すべき箇所頗る多し。
● 宿屋は、鵜瀬館、林屋、大觀音、國分屋などより、其外十數軒あり。
● 宮川津間の案内
● 宮川 は、山田町のあるところ。旅客は、先づ内宮外宮を參拜し、其外數百の神社に參詣し、序に農業館を一覽し、而して東の方二里往きて、二見ヶ津の芽出たい景色を賞し、近所の海水浴清瀟亭にて、遊浴するもよろし、草臥たらば、山田へ歸つて、油屋、藤屋、十文字屋など、名高き宿屋へ投宿するが好し。
● 松阪 此處は、紀州家の城番地なりしところ、松阪城趾、本居神

殿に馬返さんとして、立ち寄り引き寄せて、さし殺して其馬に打ち乗り、關東に下り、遂に頼朝天下を取り兵どもに勳功を賜るときに、佐々木四郎高綱は近江の國を望みて申し受け、やがて紀之介が爲めに寺を建て、不斷念佛を初め、寺領數多付け跡を深く吊らはれしと申すは、この事など尋ねたり、樂阿彌申すやう、加賀にも篠原あり、夫は齋藤別當實盛が討死しける所なり、又かの紀之介を殺しけるところは、野洲の川より東なれば、是よりは遙に道遠し、其處を篠原堤と申す、こゝは篠原と申すなり、街道より左の方に池あり、月輪の池と名づく、昔し此池に月の落ち給へりとしし傳ふ、おぼつかなし、池水すみみれば月さやかにうつり給ふ事所々に名所あり、此池も月の水底にうつり給ふを落ちたりと言ひ傳へしにや、若し李太白の酒に酔うて月水中に落ちたりといひて、取らんとして死せる類歟、

野路の玉水は上にあり、十せんじは下にあり、みな古所なり、左の方に茶やあり、おふかいの茶屋と云ふ、大志村、勢田村、勢田の大橋九十六間に小橋の長さ三十六間なり、昔し孝謙天皇の御時に、惠美の押勝むほんを起して軍に打ち負け、こゝまで落ちけれども、橋絶えて渡ること能はず、高島にて自害せらる、又天智天皇の皇子大友は、淨見原の天皇を殺し奉つらんとしたまふ處に、淨見原は和州芳野の宮におはしましけるが、密かに忍び出で伊賀伊勢を廻りたまひ、東國の兵を催し、美濃の國不破の關にて軍ありしに、大友打ち負けて勢田まで落させたまふ、淨見原の兵の勝に乗りて追いかけて責めつけ奉りしかば、皇子の兵皆落ち失せたり、皇子力なく竹林の内に入り給ひて、自から縊れ給ひぬ、其時皇子の陣の跡竹林の所は、久しき事にて知る事なくなりたり、古へより東國の軍兵の都に攻め

社など遊覽所多し、宿屋には、西條屋、棒屋など好し。阿漕 には、阿漕神社、又芭蕉翁の句牌などあり。辛洲浦なる海水浴湯は、此處から近く、其處には、松阪屋と云へる宿屋あり、旅客遊浴するに宜し。

名古屋前々須桑名草津間の案内

- 名古屋 は、新橋神戸間の案内に記したれば省く。
- 蟹江 は、農商家の金持が多く居るところ、船の便あり、百貨輻湊して、頗る盛んなる所なり。
- 桑名 には、桑名城趾、春日神社等の遊覽所あり、宿屋は、京屋、船津屋などいふものあり。
- 四日市 は、伊勢國第一等の港にして、横濱との間に、定期航海船あり、其上尾張の熱田と海路連絡なし、船舶の往來日夜に絶えず、旅客は何處へでも、好きな所へ赴くを得べし。宿屋は、濱田屋、吉高屋、京屋など好く、料理屋兼業の宿屋には、吾妻樓、松茂樓など名高し。又此處より東南五里ばかりの菟野村といふに鑛泉ありて、旭亭、壽亭、三杉等の温泉宿あり、旅客遊浴するが好し。
- 神戸町 は、本多家の舊城下にして、其處には、飯戸神社、龍光寺などの遊覽所あり。宿屋は、桐屋、道具屋などいす。
- 白子町 には、子安の觀音あり、不斷樓と云へる名木もあれば、御信心の方は、下車して參詣せらるべし。宿屋には、紺屋、野島屋などいふ家好し。
- 高宮 から、石薬師へは二十町あり、此處には、蒲冠者源の絶類の古蹟ある西福寺ありて、蒲櫻と稱する樹あり。
- 龜山 は、石川家の城趾にして、城趾及び、能褒野神社等の遊覽所あり、宿屋には、伊勢屋、魚屋、柏屋などあり。これより線路分れて、津を過ぎ、宮川驛に達す、旅客心得置くべし。
- 關 世に名高き關の地蔵は、驛内新所村にあれば、參詣したい方は下車せらるべし。笠捨山は、此處より、西北一里ばかりの所。其處で、宿屋は、會津屋、大津屋、山石などいす。
- 柘植 から、藤堂家の舊城下、上野町へ、三里十八町ばかりあり。宿屋には、尾張屋其他數軒あり。
- 石部 の出刃屋、は最早あるまいが、宿屋には、扇屋、八幡屋などよろし、東寺、西寺の古寺あれば、一遊するも可ならん。
- 草津 から、東海道と連絡す。案内は、先きに記せり。

神戸廣島間の案内

上るを防ぐには、必ず宇治と勢田との橋を引きて相待つとは申せど、先陣して渡しける事も度々なりとかや、大橋の上より左の方に石山寺の塔見ゆ、此寺は東大寺の真辨僧都の草創なり、其かみ聖武天皇東大寺の大佛殿を御建立ありけるに、金銅十六丈の盧遮那佛を鑄たまひ、其箔の料にて黄金を求め給ふ、真辨は舟に乗りて湖海に浮びて、こゝかしこを廻りたまふ所に、一人の翁ありて、岩に尻懸りて魚を釣る、真辨に語りけるは、此の山はこれ観音の靈地として金あり、こゝに留まりて持念したまへとて、かき消すやうに失せにけり、翁は比良の明神なりき、真辨こゝにして持念したまふに、此山の金は観音借み給ふゆゑに取るべからずと、其間に始めて奥洲より金を奉る、此に依りて大佛皆管をなし奉りたまふとなり、是れ偏に此観音の御力なりとて、石山寺を草創し給へり、又上東門院の女房紫式部は、石山に籠

●神戸は、先きに案内したるが、此處を起りとして西へ行く、此線路に沿ふて西すれば、清盛の塔、湊川温泉、長田神社等ありて、須磨に至るを得べし。旅客其處らの景色を遊覽せんとせば、瀛車に乗らずに歩行すべし。

●須磨と明石とは、土佐繪で熟して居る名地、須磨寺に、一の谷古蹟、敦盛塚さへありて、坐ろ平家の昔を忍ぶべく、海水の温泉は、須磨保養院、境川、海月館等あり、宿屋をも兼ね居れば、是非とも下車せし叶はぬところ。

●舞子 名さへ優しき舞子の濱、昔しから名高き名勝の地なり。宿屋には、其縁滴る松林の中に、龜屋、菊屋などいふ好い家あり、此處でも、是非下車せねばなるまじ。

●明石 はのゝと明石の浦の美景の中に人丸神社建ち、宿屋には、恵比須屋、橋本屋などよく明石海水浴には、湯衝館と集賢閣とあり、此處でも下車が必用らし。

●加古川 には、尾上の松、高砂の松、曾根の松、手枕の松、石寶殿などいふ名物あり、此名物を遊覽せんとせば、此處で下車せざるべからず、斯く下車なし續けて居れば、此線路は素通り出来ぬところ、どうやら瀛車が邪魔らしく。其處で、宿屋は、加古川に

り観音に祈をかけ奉り、八月十五夜の月湖水にうつりたるを見て水想觀を成就し、自然智を得て源氏物語を作り、須磨明石の巻よりも書き出し侍りとかや、かは真辨の事に付きては哀れなる物語りあり、小橋より右に向ひ北の方を見れば、湖水の西方幸崎の松に續きて、片田の浦浮御堂も曲かに思ひやる、彼の浮御堂は恵心僧都の造たまふ一干體の彌陀佛なり、中頃皆散りくりに取り行きて返轉に及びしを、或聖來りて江州を勤めて再興し侍り、かの恵心の御作の彌陀は、片田千體とて尊みもてはやすとかや、片田の末は白鬚比良小松なり、又幽かに沖中へ突き出でたる尾崎は、大瀧と云ふ所なり、今津海津は遙なれば見えず、湖水の東右の方に押し入りたるは、長面寺の觀音なり、音根の觀音は澤山の中にあり、沖に見ゆるは是沖の島なり、其あなたに竹生島あり、此島は古へ皇行天皇

て井田屋、高砂にて志方屋なり。

●姫路 は、名高き市なり、姫路の城、書寫山、梅林寺遊覽地頗る多し。宿屋には、米瀨、清水紺庄、金五、龍萬等宜しとす。

●那波 から、西南へ二里半ばかりも往かば、赤穂市へ到る、其處には、忠臣蔵で御存じの四十七義士の墳墓、大石内蔵介の屋敷跡などあり、其高義の著しきを忍ぶも好し。宿屋には、瓢箪屋、山野屋など宜しとす。

●有年 こゝは、昔し南朝北朝の戦ひに、赤松の據りかゝりたる白旗山の古城趾に近し、下車して懐古の詩歌でも作るべし。

●岡山 は、本線路中にて、なか／＼盛んなる町なり。遊覽すべきところは、日本三大公園の一ツなる後樂園を始めとし、其外にも借樂園あり。備前備中の吉備津神社、高松城水攻の跡なども、往きて見るべし。宿屋には、三好野花壇、自由舎、常磐屋など重なるものなり。

●福山 福山の舊城は、現今公園となれり。鞆の津へ行くには、南へ三里ばかりなり。宿屋は吉野、栗定、名波梅などを好しとす。

●尾の道 には、西國寺、千光寺、淨土寺等の三大寺あり、此れ等の寺内に、鳥帽子岩、千疊敷、峰の薬師などもあれば、下車して一

の御時に水の表に浮び出でたり、島の中に辨才天おはします、行基ぼさつの御作なり、島は是れ水精輪、緑の木末枝垂れて、水にうつろふ景しげく、鱗峰に集まれば、魚木に登る心地せり、墨らぬ空や久方の、月海中に浮んで、兎も波を走るとかや、誠に類なき名所なり、

○辛崎

藤原道綱母

あやしき置き處なきを、いかで涼しき方もやあると、心ものかかて、浪路の方々に、祓へもせんと思ひて、辛崎へともす、寅の時ばかりに出で立つに、月いどあかし、我同じやうなる人、また供に人ひとりばかりぞ有れば、唯三人乗て、馬に乗りたる男子ども七八人ばかりぞ有る、加茂川の程にてほのく、と明く、うち過ぎて山路になりて、京にたがひたる様を見るにも、此頃の心地なればにやあらん、いとあはれなり、いはんや關に至りて暫し車どどめて、牛かへなとするに、

空車ひき續けて、あやしき木こりあろして、いと小暗き中より來るも、心地ひきかへたるやうにおぼへて、いとあかし、關の道あはれくとおぼえて行く先を見やりたれば、行方も知らず見え渡りて、鳥の二つ三つ居たるを見ゆるものを、しひて思へば釣舟なるべし、そこにぞ得涙はとめすなりぬる、いふかひなき心だにかく思へば、ましてこと人はあはれと泣くなり、はしたなきままでおぼゆれば、目も見合せられず、行先おぼゆるに、大津のいともむつかしき屋どもの中に引き入りにけり、それもめづらかなる心地にして行き過ぐれば、はるく、と濱に出でぬ、來し方を見れば、海づらにならひてあつまりたる屋どもの前に、船どもを岸にならべよせつゝあるぞ、いとをかしき、漕ぎ行きちがふ船どもあり、いきもて行く程に巳の時はてになりけり、暫し馬ども息めんとして、清水と云ふところもかれと見やられたるほどに、大

旅行案内

覽するも可ならん。宿屋は、鶴水館、白雲館、濱吉など好し。
●三原 三原城の趾、長井の浦等遊覽するも可ならん、宿屋には、金丸、綾平、山平などあり。
●廣島 は、蕨州第一の都會。廣島城、廣島の公園などを始めとし、其外遊覽所頗る多し。宿屋には、長沼、三好、吉川、神保、溝口中野など、十數軒あり。廣島市の西南、海上五里ばかりにして、彼の日本三景の一ツなる嚴島へ到ることを得、日々通航の船あれば、旅客は、自由に遊ばるべし、其處で、該島の宿屋は、紅葉谷の岩總といふを重とし、料理屋を兼ね居る岩村、松岡、梅林等あり。

門司熊本松橋及び小倉行事鳥栖武雄間の案内

- 門司 は、九州の要地にして、海上僅かに二十町ばかりを隔て、赤間關と相對す。和布刈神社、甲宗八幡宮、清瀧の公園などを始めとし、此外遊覽すべき所多し。宿屋には、八坂、川卯、石田、松延、古賀文等あり。
- 小倉 は、小笠原家の舊城下なり。九州本山と俗に呼ぶ永照寺は寺町に在り、宿屋の重なるものは、廣田、錢屋、藤井などなり。
- 折尾 此處は、筑豊興業鐵道と交叉する所なり、若松、或は直方

へ行く旅客は、此處にて乗換へるべし。

●福岡 の停車場から、宮地嶽神社へ參詣するには、北へ十八町行くべし。

●香椎 香椎の宮は、神功皇后を祭るところ、帆柱の化石は、十八町ばかり行きたる名島の海濱に在り、一覽するも可なり。

●箱崎 停車場の西隣に、箱崎神社あり、箱崎松原、千代の松原など、風景極めて好し、下車して一服するも宜しからん。

●博多 は、黒田家の舊城下なり、遊覽すべきところは、櫛田神社、聖福寺、承天寺、元寇の戦ひの遺跡なる石城、蒙古の首塚等なり。宿屋には、石田屋、松島屋、京屋、榮屋等あり。

●二日市 停車場の近傍に、大宰府天滿宮、觀音寺、都府樓及び水城の古跡などあり、下車して、昔しを忍ぶも好し。

●鳥栖 此處は、佐賀縣の分るゝ所なり、佐賀、長崎等へ行く旅客は其乗換を忘るべからず。

●久留米 は、有馬家の舊城下なり、篠神社、水天宮、梅林寺等あり、又勤王の奇士高山彦九郎の墳墓あり。宿屋は、柳屋、鹽屋などよろし。

●大牟田 から、三池町へ到るには、一里ばかりあり。

きなる標の木た一つ立てる陰に、車かきあろして、馬ども浦に引きあろして、冷かしなどして、こゝにて御わりご待ちつけん、幸崎はまだいと遠かんめりといふほどに、幼き人一人つかれたる顔にてふりみれば、あぶくろなる物取り出でて、食ひなどするほどに、わりごもて来ぬれば、さまざまあがちなどして、かたへは是より歸りて、清水につきつるまで、おこなひやりなすなり、さて車かけてそのさきにさし居たり、車ひきかへて後へしに行くまゝに見れば、風うち吹きつ波高くなる、行きかふ船ども帆を引き上げつゝ、浪づらに男ども集まり居て、歌つかうまつりてまかれといへば、いふかひなき聲ひき出で、うたひて行く、祓への程にぞ懈怠になりぬべき波かくる、いと程狭き崎にて、下の方は水際車立てたり、皆あろしたれば、しき波によせて、なごりにはなしといひふるたる、貝もありけり、しりなる人々は、天

- 木葉 からは、西南役の激戦地なる田原坂へ近し。
- 熊本 は、細川家の舊城下にして、其城趾には、第六師團あり、本妙寺、出水神社、錦山神社等遊覽すべし。重なる宿屋は、研屋越後屋、綿屋などなり。
- 佐賀 は、鍋島家の舊城下にして、神野の御茶屋、松原神社等、風景なか／＼宜し。宿屋は、一ツ屋、榮徳屋、堺屋など宜しとす。
- 丸龜 琴平間の案内
- 琴平 は、名高き琴平神社の在るところにして、象頭山の風景もよろしく、宿屋も多くあり。
- 善通寺 の停車場より八町ばかりの西に、善通寺あり、七十五番の札所にして、弘法大師の誕生地なれば、旅客は、下車して、其遺趾を訪ふべし。
- 多度津 は、當鐵道會社の在るところ、大阪川口より、海上五十里、漁船の出入頻繁にして、なか／＼盛んなるところなり、宿屋も、随分好い家あり。
- 丸龜 の舊城は、當時廣島鎮臺の營所となり居れり、此處にも好い宿屋あり。

本所佐倉間の案内

下に見えぬ物どもとりあげさせて騒ぐあり、若き男もほどさしはなれて、並み居て、さゝ波や志賀の幸崎など、例の神聲ふり出したるも、いとあかしう聞えたり、風はいみじう吹けども、木蔭なればいと暑し、いつしか清水にと思ふ、未の終りばかりに果てぬれば、ふりがたくあはれと見つゝ、行き過ぎて、山口に至りかれば、申のはてばかりになりけり、朝さかりと鳴き満ちたり、聞けばかくぞあぼえける、

鳴きかへる聲ぞきほひて聞ゆなる待ちやしつらん關のひぐらし、

どのみいへるに、人にはいはず、走井には此彼馬うちひやして、先だつもありて、至り着きたれば、先だちし人々いよくみ息涼みて、心地よげにて、車かきあろす處により来たれば、しりなる人、うらやまし駒のあしとく走井のといひたれば

清水に影はよむものかは

- 本所 には、龜井戸天神、向島の梅、墨提の櫻、堀切の菖蒲など其近傍を探らば、遊覽すべきところ少からず。
- 市川 には、鴻の臺、弘法寺、總持寺、柴又の帝釋天を始めとし、星降の松、真間の橋等、遊覽すべき直打あり。
- 船橋 には、意富比神社あり、宿屋には、津田屋、佐藤屋其外數軒あり。
- 千葉 には、羽衣松、君待橋、猪鼻臺などの古蹟あり、下車して訪ふべし。宿屋は、加納屋、かめ屋、梅松屋などを始めとし、此外にも好い家數軒あり。
- 佐倉 から、一里ばかりにして、酒々井村に出づ、酒々井村より八町ばかりにして、中川に至る、中川から右へ行くときは、道程二里ばかりにして成田山へ着し。左へ行けば、彼の民權家の宗吾神社へ廻りて成田山へ着す、道程は、僅か半里ばかり遠し。半里ばかりは我慢して、是非宗吾神社へ參詣すべし。
- 飯田町 八王寺間の案内
- 飯田町 は、麴町區に屬するところ。九段の招魂社其近傍に在り此處より目鏡橋へ往くも程遠からず。
- 牛込 の區内に、神樂坂あり、區内に於て最も賑やかなるところ

近く車よせてあでなる方に、暮など引き
 ちろして皆下りぬ、手足もひたしたれば、
 心地、物思ひ、はるけるやうにぞおぼゆ
 る、石どもにおしかりて、水やりたる
 樋の上に、折敷もすゑて、もの喰ひて、
 手づから水宴などする心地、いと立ちう
 きまであれど、日暮れぬなどそのか
 す、かゝる處にては物など思ふ人もあら
 じかしと思へども、日の暮なればわりな
 くて立ちぬ、いきもて行けば、山と云ふ
 處にぞ、涼より松栗田もちて人來る

○石山

同人

石山に十日ばかりと思ひ立つ、忍びてど
 思へばはらからどいふばかりの人にも知
 らせず、心一つに思ひ立ちて、明けぬら
 んと思ふほどに出で走りて、加茂川のほ
 どばかりなどにぞ、いかで聞きあへつら
 ん、あひてものしたる人もあり、有りあ
 けの月はいとあかけれど、逢ふ人もなし、
 河原には死人も伏せりと見聞けど、恐る

しくもあらず。粟田山といふほどに行き
 さりて、いと苦しきまうちやすめば、と
 もかくも思ひわかれず、唯涙ぞこぼる、
 人や見ると涙はつれなしづくりて、た
 走りて行きもて行く、山科にて明けはな
 るにぞ、いとせうなる心地すれば、
 あれか人かにおぼゆる、人は皆あくらか
 し先だてなどして、かすかにて歩みいけ
 ば、逢ふ者見る人あやしげに思ひて、さ
 さめき騒ぐぞいとわびしき、からうじて
 いき過ぎて、走井にてわりごなどものす
 とて、幕引きまはしてかかするほどに、
 いみじくのしるもの來、いかにせん誰
 ならん、供なる人見知るべき物にもこそ
 あれ、あなみみじと思ふほどに、馬に乗
 りたる者あまた、車二つ三つひき續けて
 のしりてく、若狭守の車なりけりとい
 ふ、立ちも止まらで行き過ぐれば、思ふ
 ことなげにても行くかな、さるは明暮ひ
 さまづきありく物として行くこそはあめ
 と思ふにも、胸さくる心地す、下衆ども

なり、警打で名高き高田の馬場へも程遠からず。

●市ヶ谷の、士官學校、幼年學校、成城學校、などのある所、赴
 々たる武夫の、此處より産出す。

●四ッ谷 今は阿岩の化も出ねば、肥すべきこともなし。

●信濃町 遊覽すべき所チヨイ／＼あり。

●新宿 鈴木主水の新内で名高き内藤新宿なり。此處は、甲州街道
 の重なる驛にて、日本鐵道の新橋赤羽線は、當驛にて、甲武鐵道
 の線に横又す。近傍に、大久保村の躑躅園あり、當時は、見物の
 人も多し。

●中野 から、南の方十五六町も往けば、法華宗の本山あり、本尊
 は、厄除の御祖師とて、信者は有難がり居れり、北の方五六町も
 往けば、新井の藥師あり、御信心の方は、下車して、何れへでも
 參詣せらるべし。

●萩窪 は、極めて閑靜なるところ。

●境 より、二十町ばかり東に、井の頭の辨天あり、十四町ばかり
 北には、田無町あり、小金井の櫻見んとするものは、大抵此處よ
 り下車す、境村より小川村まで五十七町の間、兩岸の長堤、一萬
 の櫻樹、満目只花ばかり、これはくと計りに呆れるの外はな

し。

●國分寺 には、遊覽所多し、國分寺、山口觀音、所澤、貫井辨天
 府中町、將軍塚、向ヶ岡、百艸園等、總て此近傍に在り。川越鐵
 道は、此處より起りて、當驛と聯絡せり。

●立川 青梅鐵道は、此處より起りて、當驛と聯絡す。西南の方四
 里ばかり行けば、網代鐵泉あり。

●多摩川 東京上水の水源たる多摩川なり、鮎獲によろしきとこ
 ろ。

●日野 は、甲州街道中屈指のところなり。

●八王寺 は、昔しより、織物の産地を以て名高し、市街は、チラ
 く繁昌にして、甲州街道中第一の都會なり。遊覽すべきところ
 は、子安明神、散田、眞寛寺、高尾山、御殿崎等なり。

●國分寺 は、既に記したれば省く。

●所澤 は、秩父街道に當りて、一ツの市なり、綿布の製造なかな
 が盛んなり。新光寺、藥王寺などは、共に古き寺。二十五六町行
 けば、山口觀音堂へ到ることを得。

●川越町 は、埼玉縣中、第一の都會にて名高し、近來は、養蠶業

車のくちにつけるもさあらぬも、此幕近く立ちよりつゝ、とめ見さわぐ、ふるまひのなめうちぼゆる事物にも似ず、我供の人わづかに有る。立ちのきてなどいふめれば、例も往來の人よる處をはしり給はぬか、とがめ給ふはなどいふを見る心は、いかにはある遣り過して今は立ちて行けば、關うち越えて打出の濱に死にかへりて至りければ、先立ちたりし人、船に菰屋形引きて設けたり、物もあはせずはひ乗りたれば、はるくどさし出だして行くほど、心地いどわびしくも苦しうも、いみじう物悲しう思ふことたぐひなし、申の終りばかりにて、寺の中につきぬ、齋屋に物など敷きたりければいきて伏しぬ、心地せん方知らず苦しきまゝ、ふしまるびてぞ泣く、夜になりて湯など物して、御堂にのぼる、身のあるやうを佛に申すにも、涙にむせぶ、とかくいひもやられず、夜うちふけて、外の方を見出だしたれば、堂は高くて下は谷と見え

盛んに起りて、これが爲め桑園は、到るところに在り。此町内遊覽の場所は、舊城内の三芳野神社を初めとして、喜多院、東照宮、養壽院、成田不動尊の出張所等あり。又水川神社は、當地の總鎮守、淨土宗十八檀林の一ツなる蓮馨寺は、去る二十六年の大火に焼けて、今は假本堂のみとなり居るは残念なり。又近村に、堀兼の井、小手指ヶ原などの舊蹟あり、訪ふべし。皆て宿屋は、今福屋、井上、鏡打屋、松村屋、山中等名ある家なり。

立川 立川は、既に記したれば省く。此鐵道は、甲武鐵道の立川驛と青梅町までの輕便鐵道なり。

羽村 羽村は、玉川上水の堰のあるところなり。

青梅 青梅は、甲州路の裏街道にして、道中第一の都會なり、盛んに木綿絲を製造し、綿は、青梅綿とて、誰れ知らぬものなき名高きものなり。停車場より三町ばかりの處に、住吉神社あり、又八町ばかりの處に、青梅山金剛寺あり、此寺の老梅其實いつ迄も青しとて、青梅の名起れりと云ふ。停車場の前に金刀比羅山と云へる山あるが、此處へ登りて四方を見渡せば、海を隔て、遙かに安房上總の諸山を見、近くに箱根、大山、御嶽、大嶽の諸山を見、其

たり、高き軒に木ども生ひこりていと木關かりける、廿日月夜更けていとあかるければ、木蔭にもりて、どころく、に來し方ぞ見えわたりたる、見あるしたれば、麓にある泉は鏡のごとく見えたり、高欄におしかかりてとばかりまもりゐたれば、片岸に草の中にそよ／＼鳴らしたるもの、あやしき聲するを、何ぞと問ひたれば、鹿といふなりと云ふ、なか例の聲に鳴かざらんと思ふほどに、さうはなれたる谷の方より、いとうらわかき聲に遙かにも鳴きたんなり、聞く心地そらなりといへばあろかななり、思ひ入りて行ふ心地、物もぼえて猶あれば、見やりたる山のあなたばかりに、田守の物もひたる聲、いふかひなく情なげにうち呼ばひたり、斯うしも取り集めて、肝をくだく事多からんと思ふに、はてはあきれてぞ居たる、さて後夜もこなひつれて下りぬ、身よわければ齋屋にあり、夜の明るまゝに見やりたれば、東の風はいとの

間に、富士山の挺然として雲表に聳ゆるを望む、而して下を眺めば、玉川の清流屈曲して面白く、實に風景絶佳なり。此處から、御嶽山へは四里ばかり、大嶽山へは五里ばかり、鶴の温泉へは七里ばかり、甲府へは二十四里ばかりなり。宿屋は、若狹屋、坂上など名高し。

東京青森間の案内

上野 上野は、日本鐵道會社の起點にして、上野公園の麓に在り、近傍遊覽の場所は、上野公園は云ふまでもなく、神田明神、根岸の里、二錢の馬車賃を散財すれば、淺草の公園へも往れるべく、さすがに東京の大公園近傍、便利は十分なり。皆て奥羽地方へ旅行する人は、此處より上車すべく、馬車鐵道に乗て新橋へ達せば、直ちに東海道鐵道に連絡す。

王子 王子には、飛鳥山、王子権現、王子稻荷、瀧の川など、遊覽する處なかく多し。海老屋、扇屋等甘いもの喰せる處あり。

赤羽 赤羽は、東海道線、又甲武鐵道線と乗り換へるところ、旅客油断すべからず。

大宮 大宮は、盛の名所、大宮公園は、名高き遊覽地なり。此處より僅かに十一町ばかり行けば、芳松樓、藤の戸、松左館などの宿屋

どかにて、霧立ちわたり、川のかたに
番に書きたるやうに見えたり、川づらに
放ち馬どものあさりありくも、遙かに見
えたる、いとあはれなり、

○姨捨山賦

柳

良

更科の月明らかなる八月八日の夜、姨捨
山に登れば、鏡曇山は冠が岳のむかふ
にたてり、筑摩川花やかに流るるをめぐり、
雲井の橋は名のみして水上の月をやど
す、田毎の水の音は、ひとへに山の松風
にしらべあへり、寶が池蛙が池、更科近
く流れ、稻荷山八幡の里、川中島は白雲
のたち居に見え隠る、吹く風精神をせめ
て直しく、見るもの目に動きてあはれな
り、粥をすゝり香を炊してしばらく石上
に心をすすす、

○武藏古戦場記

洪

園

武を崇め嶽の高きに藏して、神威を承平
の和にしめし、文を黎民の際にやわらげ、

徳を國家の仁政にしきぬる、むさしの國
御嶽の山は、叔倉子義を遠へに標有梅の
青梅の里まで、江戸を去ること十有三里
にして、行程に山河橋陵なし、青梅村中
金剛精舎、古樹の梅あり、四時實を結び、
熟すれども緑の色をかへざるが故に青梅
の名あり、連山西北をめぐりて、さなが
ら絶壁に似たり、閻君を過ぐることも十町
ばかり、猪澤を下れば溪路斜にして、機
あり、村落に流を入れたり、ひなたの和
田といふ、朝日にむかふ名なるべし、一
顧すれば多摩川の流を隔て、山々水に
そばだち、石にむせぶ流の音谷にひいき
て、人のあらしひかたるが如し、山河す
べて繁峙して、數里の間に屈曲し、峯に
かくれ谷にあらはれ、さらす調布さらさ
らにと詠じたる、昔の歌の姿なり、山登
えては頂に露臺のあとをといめ、岸崩
れては石に楯澤の名を残し、往古に戦場
の樞要たるも、陰鬱たる遊澤となりて、
僅に山がつの樵路をわかち、霧深くして

あり、料理屋兼業にて、頗る便利。

●栗橋 源九郎の思ひもの、昔しの慈教靜御前の墓と云へるもの、
西南數十歩のところ伊阪村に在り、旅客下車して、一本の線香を
奢るも可ならん。

●古河 宇治の合戦に打負け、扇の芝で座を組むた源三位頼政の墓
と云へるもの、近傍土井氏舊城内に在り。

●小金井 何やらで名高き弓削の道鏡の左遷せられた源三郎頼政の墓
停車場から東の方三十町ばかりの所に在り。下車して、訪ふとも
どうともなされ。

●宇都宮 の釣天井は、俗説に名高く、二荒神社、鐵の碑、蒲生君
平の墓など、下車して一覽すべき所多し。宿屋は、白木屋、手塚
屋など好し。チャット其處で、旅客の注意すべきは、此處が日光線
路の分るるところ。

●西那須野 から、鹽原温泉へ行くとせば、西北へ六里ばかり行く
べし。満數屋、松屋など多くの好い宿あり。夏日の一浴によろし
とす。

●黒磯 那須の七場へ行くには、此處で下車すべし。温泉神社へ參
詣し、殺生石を見て、玉藻前の昔しを怕れるとも戀しがるとも、

旅客の勝手なり。宿屋には、河内屋、小松屋などあり。

●白川 戊辰戦亂の跡、往時を追憶するも好し。白川の關、感忠の
銘、甲子の温泉など、訪ふべき所多かり。宿屋は、内池屋、柳屋
など名あり。

●二本松 これも戊辰の戦地なり。今は一ツ家もあるまじきが、開
くさへ怖ろしい安達ヶ原へ近し。宿屋は、きくの屋、大和屋等よ
ろし。

●福島 は、板倉家の番城下にして、今は縣廳の在るところ。信夫
文字摺の石、北富明家の古蹟など、訪ふべき所多し。宿屋は、太
田屋、上安、松島屋など宜し。

●白石 から、青根、鎌先等の温泉に近く、栗面石、古將堂などの
古跡もあり。宿屋は、阿子島が一番なり。

●大河原 の近傍に、泰衡の古戦場、國衡の塚あり。此處から遠刈
田の温泉に近く、同所には、佐藤、吾妻などいふチヨイとした温
泉宿あり。

●増田 から、西の方一里計り行けば、實方中將の墓あり、下車し
て訪ふも可なり。

●仙臺 は、其昔し伊達家の城ありしが、其城跡今に存して、町の

草薙の礎を埋め、月さびしうして尾花白刃のひかりをまじへ、旌旗風にひるがへりて松に白鷺を宿し、翠桃枝をたれて丘に弓絃の糸をたち、利鏃いたづらに田園にくじけ、寶刀むなしく城の中にうづめり、花鳥に時を感ずれば、歌舞の榮華もまのあたりにして、月にむかしをのべるときは、錦繡にほこれる盛衰も、紅葉の色のうつらふに見えたり、殺氣なく昇平の日影に消えて、戦塵に似し雲もなく、人家軒をならべて、路に窺のなきはひをつらぬ、ゆくかた／＼に踏み分けし、數多の道も街となり、ありといふなる逃水も、倭成卿の比興とはなりぬ、

○岐蘇川を下る記

天保丁酉の四月、余役を竣へ、兩藩士と俱に江戸より還る、路を東山に取り、輿を捨て、歩行し、旁ら名勝を探る、五月四日、十三嶺を下り、晩に伏見驛に宿る、通日崎嶇、山間を經涉し頗る疲れたり、

奴輩槍を把り鎧を荷ふものに至つては、或は痲痺起つ能はず、且つ水路の勝を聞くと熱せり、因つて謀つて舟を賃して岐蘇川を下り、桑名に至るまで、殆んど二十里、一日ならずして達す、乃ち舟人を召して之を戒め、翌日夙に起きて、水濱に趨き舟を求む、舟人の家は前岸の樹林中に在り、戸を閉ぢて未だ起きず、阻するに灘聲の喧嘩を以てし、累呼すれども達せず、唇焦がれ舌燥き、久しうして乃ち應ず、其兒と舟を饋して來り迎ふ、日已に辰に加はる、乃ち發す、舟は狭く長く、薄板もて之を爲り呼んで顛倒となす、見織に十三歳のみ、父は船にあり兒は船にあり、あの一／＼船を持ち操縦甚だ習へり、灘急にして舟走り、兩岸の樹木一時に皆搖く、前に當りて見ゆる所倏ち後に在り、唯岸往き山走るを見て、舟の移るを覺えず、山皆石身にして土を載せ、松之が髪をなす、而して紅杜鵑其間に粧點す、腥血滴るが如く、又處々に水簾あ

西なる廣瀬川の側に在り。此町は、日本東北の都會にして、なか／＼繁昌なところなり。遊覽すべきところは、彌岡が岡、經ヶ峰の靈廟、青葉神社、櫻岡公園、林子平の墓など頗る多し、迎も一日や二日では見盡されず、其處で、ゆる／＼逗留せんとすれば宿屋は、國分町に多くて、大泉、安藤、針生、齋藤などを重とし、其外數軒あり、皆停車場前に支店を設け居れば、勝手に投宿すべし。

●岩切 は、松島、鹽竈等へ通ずる要地にして、古い石碑で名高き多賀城趾、野田の玉川など、頗る寂た遊覽地あり。

●鹽竈 は、日本三景の一ツなる松島に臨み、一名手賀の浦とは云ふ。旅客、此處では、是非下車せではなるまじ、松島の景色賞するはいふまでもなく、停車場の西の方五町ばかりの處に、鹽竈神社あり、音に名高き金華山は、此處より二十餘里ばかりの海上に見ゆ。宿屋は、海老屋、太田屋などが名高し、宿屋に言へば、松島見物の案内をなす。

●一の關 義經の末路で知らる、衣川の館、關山、中尊寺、酢川温泉などの遊覽所少なからず。

●水澤 鎮守府のありし舊跡は、此處より一里半ばかりもあるべし。

●盛岡 は、南部家の城下なりしところ。遊覽すべきところは、其昔し安倍貞任が居城とせし厨河の棚、見馴の松、網張の温泉等あり。宿屋は、清風館、村田、陸奥館等好く、其他にも數件あり。

●尻内 の八戸町は、南部家の舊城趾にして、小南部といふ。其城趾に接して、長者山あり、義經の遺跡もあり。

●野邊地 から、北の方十八九町のところ、馬門といふところあり、此處は、戊辰の役に、津輕兵と南部兵とが戦ひし地なり。

●青森 は、日本鐵道の終るところ。津輕の海峡を隔て、北海道函館に對し、定期航海の船ありて、横濱、函館などへ往來す。善知鳥神社、外ヶ濱等の遊覽地もあり、繁華なところなり。宿屋は田澤、中村、中島など重なるもの、其他にも多くあり。

●結城 は、水野家の城下にして、此處から、人のよく知る結城紬が出る。

●下館 から、東南三里ばかり行けば、椎尾山あり、瀑布あり、夏時の避暑によろし。

●岩瀬 から、二十五六町の東北に當りて、櫻川あり、櫻花頗る好

りて懸り、緩々澗々潭石の上に落つ、石皆奇状、兩岸に羅列す、或は特立して柱の如く、或は折裂して門の如く、或は渦の淵に飲むが如く、或は臥牛の道に横はるが如し、五色陸離として相間はる、大概大小斧劈を作り、間を荷葉披麻を作るものあり、波浪に瀧がれて以て出づ、交替去來應接に暇あらず、蓋し譎詭變幻の中に清秀深穩の態を帯ぶるもの、荆關の筆、倪黃の筆にあらざれば状する能はざるなり、僕蕭巖山水の趣を解せざる者、唯も、普通に奇を呼んで聲を絶たす、忽ち一大岩の水中に屹立せるに遇ふ、舟殆んど之に觸れ、少しく誤らば塵粉たらん、衆懼れて黙す、舟人笑ふて舵を振りて之を避け、瞬ち岩角を掠めて過ぐ、此の如き者數處、未だ嘗て絲毫を違へず、唯岩際を経るごとに、波激し舟舞ひ、飛沫入を撲ち、衣袂悉く濡ふ、僕從を回視すれば、各兩把の汗を握り、殆んど人色なし、舟人甚だ閑暇從容、煙を吹いて

し、國內に、紀の貫之の歌碑あり、筑波山も遊覽するところ多ければ、下車して一遊するも可ならん。
 ●水戸 は、徳川家の城下にして、茨城縣下第一等の繁昌なる地なり、水戸の舊城、常磐公園、第二公園など遊覽すべく、疲れたらば、麴屋、鈴木屋など其他にも好い宿屋數軒あり、遠慮なく投宿すべし。此處から餘り遠からぬところに、大洗の海水浴場ありて金波樓、魚來庵など呼べる料理屋兼帯の宿屋あり、又此處から南九里を隔つて、霞ヶ浦あり、一遊すべし。
 ●小山 には、小山小四郎の城趾あり、宿屋は、角屋、伊豆倉など好し。
 ●栃木 は、菅川秀光の居城なりしところ。櫻岡、室の八島、錦着山、大平山等の勝地あれば、下車して、一遊すべし、宿屋は、金半、笹屋などが好し。
 ●佐野 鉢の木の謠で名高き佐野源左衛門の出でしところ、且つ此處は、俵藤太秀郷の居城なりしといふ、何れにしても由緒ある土地、下車するも好からん。宿屋は、高砂屋、齋藤などが好し。
 ●足利 は、彼の足利尊氏の起りしところ、小野の臺が建てし足利學校の舊跡、孔子の廟さへあり、好古の人は、下車して、遊覽すべし。尙此處には、栃木縣工業學校、織物市等あり。上等の宿屋は、巴屋、こく屋、初谷等あり。
 ●相生 で宿らんとせば、宿屋には、金木屋、角屋などが好いといふ。
 ●大間々 には、なかくに勝地多く、長岡温泉、藪塚温泉などもあり、下車して、遊ぶによろしきところなり。宿屋は、豊田屋、つるや等よろし。
 ●國定 講釋師の張扇で叩き出される國定忠次は、實に此地に生る俠客崇拝の信者は、下車して、此遺跡でも探るべし、素より御勝手ながら。
 ●伊勢崎 には、藥師の温泉あり、一浴の價あり、錢屋 新井屋、などの宿屋、客を待てり。
 ●前橋 は、兩毛鐵道に連絡するところ。岩神、敷島河原、利根橋龍海院等、見物すべき場所隨分之れあり。宿屋には、松坂屋、油屋、鐵線亭、住吉屋等、其他にも多く之れあり。此處から、伊香保の温泉までは、五里二十八町にして、仁泉亭、樂山館、挹翠樓、聚遠館などを重として、數軒の湯宿あり。

坐し、上流する船の力を併せて挽き上すを視る、難易懸絶、已にして而して映を離るれば漸く平遠なり、犬山城は翠微の上に露はる、粉壁鮮明、衆望み見て歎然たり、城下に至る比、又暗礁あり、船を嚙み、徒然裂けんと欲す、衆又相顧みて愕然たり、此を過ぎて以て往、漁舟相望み、歌唱互に答ふ、衆心始めて降る、蓋し始め發して此に抵るまで陸行半日の程たるに、一餉時ならずして至る、其快知るべし、嘗て盛廣之圃道元の記する所を讀みしに、江水迅急の狀を誇稱せしが、唐の李白に至り其意を述べて云ふ、千里江陵一日還と、平生竊かに疑ひて以て文人の虚談となす、今此際を過ぎ、始めて其趣ひざるを知れり、但だ舟行甚だ迅かにて、深く峽中の勝を玩ぶ能はざりしを恨むべしと爲すのみ、又三里にして笠松に至る、鳴鐘方に已を報ず、登つて岸上の店に憩ふ、目猶眩す、仰いで屋檐を見れば動搖して定まらず、瞑坐良久しうし

し、國內に、紀の貫之の歌碑あり、筑波山も遊覽するところ多ければ、下車して一遊するも可ならん。
 ●水戸 は、徳川家の城下にして、茨城縣下第一等の繁昌なる地なり、水戸の舊城、常磐公園、第二公園など遊覽すべく、疲れたらば、麴屋、鈴木屋など其他にも好い宿屋數軒あり、遠慮なく投宿すべし。此處から餘り遠からぬところに、大洗の海水浴場ありて金波樓、魚來庵など呼べる料理屋兼帯の宿屋あり、又此處から南九里を隔つて、霞ヶ浦あり、一遊すべし。
 ●小山 には、小山小四郎の城趾あり、宿屋は、角屋、伊豆倉など好し。
 ●栃木 は、菅川秀光の居城なりしところ。櫻岡、室の八島、錦着山、大平山等の勝地あれば、下車して、一遊すべし、宿屋は、金半、笹屋などが好し。
 ●佐野 鉢の木の謠で名高き佐野源左衛門の出でしところ、且つ此處は、俵藤太秀郷の居城なりしといふ、何れにしても由緒ある土地、下車するも好からん。宿屋は、高砂屋、齋藤などが好し。
 ●足利 は、彼の足利尊氏の起りしところ、小野の臺が建てし足利學校の舊跡、孔子の廟さへあり、好古の人は、下車して、遊覽すべし。尙此處には、栃木縣工業學校、織物市等あり。上等の宿屋は、巴屋、こく屋、初谷等あり。
 ●相生 で宿らんとせば、宿屋には、金木屋、角屋などが好いといふ。
 ●大間々 には、なかくに勝地多く、長岡温泉、藪塚温泉などもあり、下車して、遊ぶによろしきところなり。宿屋は、豊田屋、つるや等よろし。
 ●國定 講釋師の張扇で叩き出される國定忠次は、實に此地に生る俠客崇拝の信者は、下車して、此遺跡でも探るべし、素より御勝手ながら。
 ●伊勢崎 には、藥師の温泉あり、一浴の價あり、錢屋 新井屋、などの宿屋、客を待てり。
 ●前橋 は、兩毛鐵道に連絡するところ。岩神、敷島河原、利根橋龍海院等、見物すべき場所隨分之れあり。宿屋には、松坂屋、油屋、鐵線亭、住吉屋等、其他にも多く之れあり。此處から、伊香保の温泉までは、五里二十八町にして、仁泉亭、樂山館、挹翠樓、聚遠館などを重として、數軒の湯宿あり。

て乃ち止む、鰯を進む、脆美口に媚ふ、此行山谷を跋渉し、蔬食旬を彌る、之を獲て以て菜を解く、飯已り復た舟に入る、岸愈濶く水愈緩なり、險阻已に遠し、復た觀るべきなし、枕藉して臥す、風方に逆らふ、舟人力を用ひ、拵々甚だ勞す、船聲喧聒、人をして煩冤せしむ、午下、稍風便を得、帆を上げて復た走る、衆乃ち熟睡す、醒むる比桑名に達す、日尙高し、舟人を謝し遣し、陸に登つて往き、四日市に至つて宿す、伏見より此に至る殆んど二日半の路程たり、道上行く家々に菖蒲を挿み、彩旗翩然風に翻るを見る、衆行旅にありて倥偬日を涉り、殆ど月日を忘れたり、是に至りて乃ち端午の節に屬するを知る、圖らざりき、今日舟行吊屈の擧をなさんとば、斯れも亦奇なり、且舟危険を凌ぎ、布帆恙なく、汨羅の鬼となるを免る、亦厚幸ならずや、蓋し天下の至奇至美なる者は、毎に艱難危険の地に在り、獨り山水の勝のみならず

●宇都宮 日光宇津宮間の案内
より、東北幹線に分れ、先づ砥上に移るなり。
●鹿沼 は、日光線路中最も繁榮の地なり、此處の西に、鹿沼入道の古跡あり。
●文敷 の近くに、小代温泉あり、一浴するも可ならん。西見野村に到れば、長善寺ありて、其傍に、藤房卿の遺跡あり。
●今市 には、藤原温泉、川治温泉、瀧の温泉などあり、何れも一浴するの價あり、東北には、籠目岩あれど、一覽するも可ならん。
●日光 は、古來の勝地、其委きことは、後の案内に記すとして、東照宮の壯觀、三代將軍の靈屋、二荒山神社、華嚴の瀧、裏見の瀧、霧降の瀧などの見物は、蓋し人生の快事。宿屋には、日光ホテル、金谷ホテル。新井ホテル、神山、小西屋、金津屋、紙半など、なか／＼立派のものあり。中禪寺湖は、山中の勝地、湖畔に、泉屋、萬屋、米屋などの宿屋あり、それより更に湯本に至れば、吉見屋、板屋、山田屋等數軒の湯宿あり。
●新橋 又は上野より乗車するも、何れも直江津へ達すべし。上野

ざるなり、之を求むる者は、虎穴に入り龍領を探るに比す、危くして而して後に獲る所あり、余是に於て感ずる所あり、未だ以て千金の子に賭るべからざるなり、姑く之を記して、以て苦學勵行の人に示す、

○駿河路

香川 景樹

十一日、吉原を出づ、河原宿よりかへり見れば、富士の嶺曇りなし、すべて山足東西に踏み開き、うち靡きたる裾野まで、端山繁山さほりなく残るくまなく見えわたれるは、此わたりより中郷までの間なるべし、さてうるひ川原とくるほど、又立ちかくしたり、

大方は雪と雲とにうづもれぬあまりに高き富士の山かな、人もかくこそあらめ、吹上にくれば田子の浦見えわたる、坂中の榜木に、今朝散りし甲斐の落葉や田子の浦、といへる芭蕉の句を書きつけたり、其落葉とも見る

線に屬する部分は、既に記しければ、之れを省き、今新橋よりの沿道に案内す。
●目黒 には、目黒の不動へ參詣すべく、權八小察の比翼塚を訪ふて、鮫福を祈るとも、どうとも勝手にすべし、宿らんとせば、橋和屋、内田屋、其他にも數軒の茶店兼宿屋あり、旅客下車するも可ならん。
●新橋 は、前既に記しぬ、此處は、赤羽線と甲武鐵道と連絡するところなるを忘るべからず。
●板橋 の平塚山には、義經の鎧塚といふものあり、一覽するも可ならん。
●熊谷 には、熊谷直真の古蹟、蓮生山、熊谷寺などあり。又秩父山の麓に、畠山重忠の城趾あり、好古の旅客は、一遊すること可なり。宿屋は、小松屋、清水屋など名あり。
●深谷 から、二十四五町隔たりしところに、岡部村ありて、其處に、岡部六彌水の舊跡あり。
●新町 には、猪田日向は鹽平等の鐵泉、平井の城趾、鬼石の氣景など、一遊すべき所あり、宿屋は、埼玉屋、三ッ俣屋等なり。
●高崎 には、高崎城趾、佐野舟橋の古蹟上和田、鹽川等の温泉あり

ばかり、數の釣舟ちり亂れたる、いはん方なし、蒲原を過ぎて由比にさまる、さて此家の庭さきなる、汀の松などよくよく見れば、くだりつる時、あまり磯ぎはの波騒がしめてやどりあへず、立ち出でし宿なり、さるはかたはらいたく面ぶせなる心地すれど、かれは得見知らず契をや由比の濱松かへり來て立ちよる蔭の波を見るかな、

はたして今宵寝られねば、ひる見れど飽かぬ田子の浦、といひし古人の心をも思ひ出でられて、やをら起き出でも見るに、月はいづくよりさすらん、波の上どころく、おぼろに白く、見なれぬけしきめづらしき物から、いとすき心地すれば、引きたて、入りぬ、いよ／＼目も合はず、

あらためていかに枕を由比の濱春より高き波の音かな、

十二日、朝とく出で、由比川をわたり、寺尾の松原を過ぎて薩摩山にかゝる、伊

り、一遊すべし。宿屋は、高崎館、壽美與志、堺屋、信濃屋等あり。

●安中 には、猪谷津の鑛泉あり、一浴すべく、里見、鷹の巢山の城趾あり、一遊すべし。

●磯部 から、二里ばかりのところに、風來館、對岱樓などの温泉宿あり、停車場の前に支店を設け居れり、以て投宿すべし。此近傍に、佐々木盛綱の舊跡あれば、以て一遊すべし。

●松井田 には、妙義山、圓山坂、射抜岩などの遊覽所あり、又御原、八咫等の温泉あり。宿屋は、館屋、土屋などなり。

●横川 より、輕井澤まで、線路急峻になり、『フント』式鐵道を以て上下することゝなる、二十六道の隧道あり。此處より西北二里餘のところ、碓氷峠の山上に、霧積の温泉あり、宿屋は、長生館、錦楓閣寺なれば、一浴するも可ならん。

●輕井澤 は、碓氷峠の山腹にあり。此處より線路は、下行して御代田に至るなり。

●御代田 には、名高き諏訪湖の勝景あり。此湖水の沿岸に、遊覽所なかく多し。

●上田 には、松平神社、諏訪神社などあり、西方の市はづれに、

豆の海はるかに日影にはひわたれり、弓手の方を見れば、磯山陰の上より、

さやかにあらはれせし富士の嶺にさしむかひたる朝づく日かな、

あのを麓を臨みていはく、關の昔もなつかしきに、いざ彼見ゆる磯邊にありて、

岩根づたひの古道を行かんはいかに、荷負へる男がいはく、さらばあとなる倉澤よりこそあり給ふべけれ、目の下にこそ見え侍れ、此時よりくだる事は、いと難かなるわざにて、もとよりさる道も侍らず、よしやあり立ち給ふども、親知らずのあたりは此ほどこえ入り侍りて、つたひ行くこといとからく侍りなん、あのをいはく、さてこそは關もる波のかひはありけれ、いざやまづ分け試みんとて、荷など物せさせて、孝一をば先へ遣はし、節、親民二人をひきゐて、たうち踏みくだる、小松高がや、限りもなく茂りなだりて、更に道なきものから、けはしくもけはしければ、さるしげみにさはりつ

上田城趾あり。偕て淺間の温泉は、此處より十四里ばかり隔たり居る。

●阪城 姨捨山を遊覽せんと思はれ、此處より下車せざるべからず、田毎の月も、此山に屬する景色なれば、雅客は、どうでも下車せざるべからず。

●長野 は、信州第一等の都會なり、善光寺へ參詣せんとする客はいふ迄もなく、其處らに散在する神社佛閣、御信心の人も、此處にて下車すべし。宿屋の長野ホテル、對旭館、藤屋などは、停車場前に支店を設けて客を待てり、其外多くの宿屋あり、汽車の窓から、川中島の古戰場、錦繪で馴染なる信玄謙信一騎塚の古跡を望むことを得べし。

●豊野 には、琵琶の池、佐久間象山の碑、和合橋など遊覽すべきところ多く、又温泉もあり。

●田口 には、赤倉の温泉あり。宿屋は、村越屋、香嶽樓等よろし。

●關山 から、關山温泉、松山温泉等に近し。旅客志あらば、下車して、一浴すべし。

●高田 の壽永寺には、謙信の軍扇といふものあり、好古の人は、一覽するも可ならん。宿屋は、枋木、三館、坪屋等好しといふ。

つも、一人ですべり行く、手も顔もかきさきて、いとたへがたき中に、うめき出でたる、

岩木山まどへるかづらとりすがり苦しき目にもかゝる富士の嶽、また取りたる力草のさとかをれるを見れば、藤袴なり、

藤袴たれぬぎすてくたりけん我のみと思ふ山のとかけに、

くだるまに、何にやらん、針ある木のしもと原にして、あらゆる葛はひまどひ、しがらみかくる小男鹿の、胸わけするに似たり、節さきにすゝみて刀もて切り拂ふ、もとより踏みし跡もなければ、あのがむきくありわかれて、をりく互に呼びかはすめり、其聲も聞えずなれば、もし麓の崖路を踏みあとして、波にもやあほれつらん、など思ひすぐすに、いと恐ろしきまでなりぬれば、さて止まんやとは、猶すゝみくだる麓より、節呼ばひて、むげにけはしく侍れば、わ

づかにしてありさる事かない侍らすといふ聲、波と共に響きたり、飛び下りんはいかに、いなやわづかといへど、猶一二丈も侍るべし、太刀佩きながらは、きはめてあやまち侍らんと云ふ、あなねたしや、何かは来りけん、

磯ぎはにありたちかねて白波のかへるぞ田子のうらみなりける、

さらばとて踏みかへすも猶やすからず、今は草鞋の底もこどくくぬけて、いと踏みしめがたきを、ねんじつと道ひのぼるに、岡めく處あり、皆そこにつどひふして息つぎあへり、此日頃わがよむ歌を聞きのまに、音いつけたりしを、今のさわざに落しけん見えすなりぬとて、もすそのたをり、まて拂ひさがして、節、をしきかな山邊海邊によみためし數も白玉たれか拾はん、

あなねたしといへどもかひなし、さてまみれたる血をふき、汗かきのごひ、あゆひ引きしめて、やうくもとの道にのび

●直江津 此處より三十里ばかりの北方に新潟あり、なか／＼繁昌のどころなり、春日山の城趾、國分寺等遊覽すべし。宿屋は、古川屋松葉館など好し。

手宮室蘭間の案内

●手宮 北海道へ赴くの旅客は、大抵函館に著して、而して函館より室蘭へ航し、又は小樽に航す。函館より室蘭へは、六十九海里、小樽へは、二百四海里なり。小樽港住吉停車場より、此手宮停車場まで、一哩と五十七チェインなり。併て此手宮驛は、後志國高嶋郡手宮町に在り、北海道炭礦鐵道の起點にして、此處には、手宮工場、及び貯炭所などあり。

●住吉 の停車場は、小樽港に在り。此小樽は、北海道中函館に次での繁昌なる港にして、戸數は、六千の上に出で、人口は、實に三万有餘あり、船舶輻湊し、水利の便甚はだよろしきところ。

●錢函 と輕川との間に、『オクナルナイ』と呼べる川あり、之を後志石狩の國界となす。

●札幌 は、北海道廳の在るところ、土地廣く、市區正しく、さながら基盤の目の如くなり居り、戸數は、五千以上、人口は、殆んど三萬にも達せんとす。官衙には、北海道廳を始めとして、屯田

兵司令部、札幌地方裁判所、御料局支廳等、學校には、札幌農學校、北海道師範學校、北島學校を始めとして、公私立にて十餘校あり。會社には、北海道炭礦鐵道會社、北海道製麻會社、札幌製糖會社等。其他、札幌病院、中島遊園、借樂園等、共に名高し。其處で、宿屋は、豐平館を始めとして、好い家數十軒あり。

●江別 は、千歳川の、右狩川に注ぐところにして、江別川は、空知と札幌との郡界に在り、江別の鐵橋を過ぎて、左の方に、大いなる川を見るは、是れ石狩川と知るべし。

●岩見澤 は、去る七十八の兩年間に、鳥取、山口あたりの士族が移住せし所なり。然るに鐵道の便開けしより、電驛は、砂川と幌内太と兩支線の起點となり、歌志内、空知太、幌内、幾春別等よりの集合點となりて、旅客も、貨物も、此處へ輻湊し、今はなかくに繁昌なる土地とはなれり。

●幌内太 此處も、岩見澤と同じく鐵道三叉をなし、一は、幌内炭山に通じ、一は幾春別炭山に通ず。

●砂川 も、鐵道三叉をなし、一は、歌志内に、一は、空知太に通ず。追分 は、夕張支線の分るゝところなり、斯く此邊の線路は、

りくれば、時は午のさがりなり、わづかの
 上り下りにあたら時をも過しにけり
 な、いとぞかかりしわざかな、孝一やい
 かに待ちわびん、いざ急ぎ下りて、奥
 津川を渡りくれば、秀一待ちつけて、や
 がてこなる茶店に入りて、昼飯なども
 す、南面うちひらけて、三保の松原前
 につらなり、磯の巖に鶴の翅はせるな
 ど、わざとならず面白きわたりなり、庵
 崎のこぬみの浪とよめりしも此ほとりな
 るべし、此家は春も休みし處にて、をり
 ふし彌生三月の潮干にあひて、和布刈り
 貝拾ふなど見ゆ、酒くみしも今の心
 地ぞす、

沖津島鶴のゑるばかり残りけり潮干
 に見えし磯の岩が根、
 懸けたる一軸を見れば、誠拙大徳の筆な
 り、誠やこたひは世に忍ぶ立ちの急ぎに、
 かゝるあたりへはなべて暇申さうりしこ
 どの、誓しはほどながらいと心苦しきを、
 今こゝに微風吹、幽松と書かれたる一く

夕張は、煤田の在るところなり。
 ●苦小牧は、札幌と室蘭との中央に位し、道は、此處にて三ツに分る、北は、札幌へ十七里ばかり、東は、根室まで百二十九里ばかり、西は室蘭を経て函館に通ずるなり。
 ●室蘭の港は、海軍各港の一ツなり。西南に、繪鞆崎、北に、輪
 西山あり、斯く障蔽物あれば、いつも風波の患なし、港の口に、
 大黒島あり、燈臺を置いて、船舶の出入に便す。此港は、渡島國茅
 部郡森村と相對し、日々漁船の往復あり、其距離は、二十二海里、
 凡そ三時間にて、到着すべし。又青森港との間にも、定期船の往
 復あるなり。

●標茶跡佐登間の案内
 釧路鐵道は、釧路川の中流なる標茶より起りて、其上流の右手なる
 硫黄山の東の麓、跡佐登に終るものなり。其線路の長さは、僅かに
 二十五哩七十八チエインなりとす、日本本土の連絡は、青森より函
 館まで定期の漁船あれば、これにて渡り、函館より釧路灣までは、
 便船にて着き釧路よりは、安田硫黄山事務所の小蒸氣船に乗りて湧
 比別に着きそれより三里にて、標茶に達すべきなり。

だりを見るにも、ひそかに心ばかりはそ
 なたの空になん、また普門律師もいかに
 思ひこし給ふらん、
 我を君まつは遙かにへたつれど吹き
 こそ通へ三保の浦風、
 など、ひとりこたる、今日は思ひかけさ
 る薩煙の山ぶみに、おの／＼つかれ困じ
 たれば、まだ早けれど江尻にやどる、

○足柄と富士
 菅原孝標女
 足柄山といふは、四五日かねて恐ろしげ
 に暗がり渡れり、やう／＼入り立つ麓の
 ほどだに、空の景色はか／＼しくも見え
 ず、得も言はず茂り渡りていと恐ろしげ
 なり、麓にやどりたるに月もなく、暗き
 夜の闇に感ふやうなるに、遊び三人、何
 くよりともなく出できたり、五十ばかり
 なる一人、二十ばかりなる一人、十四五
 なるどどあり、菴の前に傘さして居る
 たり、男ども火を燈して見れば、昔こは
 たと云ひけんが孫といふ、髪いと長く額

標茶は、右に云へる如く、釧路鐵道の起點にして、此處には、
 安田硫黄山事務所と硫黄製煉場などあり、此處より厚曇へ通ずる
 道あれば、旅客は、心得置くべし。
 ●跡佐登は、釧路鐵道の終るところ。此處にも、安田硫黄山事務
 所あり、それより少し隔たりて、硫黄山、硫黄山の温泉あり、斯
 るところで一浴するも妙ならん。皆て釧路と網走の間、及び網走
 と厚曇の間、四十餘里の道程には、乗馬もあり、荷馬もあり、少
 し尻の痛き辛抱さへすれば、旅客の不便更になし。凡そ北見地方
 へ旅行せんとするものは、前に記せし道筋を経て、此跡佐登にて
 下車し、それより三里二十八九町行き、野川といふ所にて一宿す
 れば、翌日は、一日にて、網走へでも、斜里へでも、其思ふとこ
 ろへ行くを得べし、それゆゑ函館出立の日より、大抵四日位にて
 北見地方へ到ることの出来る勘定なり。又網走及び斜里より函館
 へ行く人は、漁船の間に合ふやうに、朝早く出立して、此跡佐登
 に来り、それより漁船にて標茶へ着き、標茶にて一宿し、翌朝湧
 比別に至り、小蒸氣船に乗込めば、同日の午前、釧路へ着船す、
 釧路より函館へは、時々便船あれば、北見出立より、四五日にて
 函館へ到着出来ることと知るべし。尤も何處でも、相當の宿屋あ

いとよくかゝりて、色白くきたなげなく
 て、さても有りぬべき下仕などにも有
 りぬべしなど、人々哀れがるに、聲すべ
 て似るものもなく空に澄み澄みめでた
 く歌をうたふ、人々いみじう哀れがりて、
 け近くて人々もて興するに、西國の遊び
 はかゝらじなど云ふを聞き、難波わ
 たりにくらぶればと、めでたく歌ひたり、
 見る目のいときたなげなきに聲さへ似る
 ものなくて歌ひて、さばかり恐ろしげな
 る山中に立ちて行くを、人々飽かず思ひ
 て曾泣くを、幼き心地にはまして、此宿
 を立たんことさへ飽かず憂ゆ、又曉よ
 り足柄を越ゆ、まいて山の中の恐ろしげ
 なる事云はん方なし、壁は足の下に踏ま
 る、山のなからばかりの木の下のあづか
 なるに、葵の唯三筋ばかりあるを、世ば
 なれてかゝる山中にしも生ひけんよと、
 人々哀れがる、水は其山に三所に流れた
 り、辛うじて越え出で、關山にまゐりぬ、
 是よりは駿河なり、横走りの關の傍に

り。
 右は、目下通じ居る瀛船にて旅行する人の爲めに、其客停車場の案
 内をなせしものなり、臺灣にも瀛船あれど、斯は未だ案内する場合
 に至らず、他日増補の時を俟ん。

○第十二 瀛船航路案内概略

瀛船にて、瀬戸内を航する人々の爲めに、左の航路案内をなす、船
 客幸ひに参考すべし。

高松は、讃岐の國第一の都會にして、松平家の舊藩地なりしなり。
 女木、男木、眞島などの諸島其前にならび、港の内は、其水淺けれ
 ども、瀛船帆船等の寄泊するもの多く、其の處らは浪と山と翠碧
 相映じ、風景頗る佳なり、其上一都會なれば、宿屋も好いところあ
 り、極めて便利なり。大坂商船會社の船に乘て行けば、其大坂よ
 りの海路は七十五海里、大凡七時間餘りにして達する勘定なり。

高松の城

高松の城は、一名玉藻の城と云ふ。天正年間生駒雅樂頭近矩の築く
 ところにして、松平氏は、其まゝに之を居城となし、今に現存す

るなり。これを海上より望見すれば、白き壁は、緑の浪に映じて、
 なか／＼に美しくし。

栗林公園

栗林の公園は、高松の城を南二十四五町も行きし勅使村といふとこ
 ろに在り、其廣さは、四方八千坪餘もありて、いかにも立派なもの
 なり。これは松平氏が、幕府の吹上園に擬して造りたる別荘にして、
 菊月亭と稱するものなり、山を背に、池を腹に、其池は、琵琶湖を
 模し、岸に五十三驛を寫す、花樹を雜へ植ゑ、奇石怪巖を配置し、
 頗る面白く造り設けたり、旅客は、上陸して、是非一遊すべきな
 り。

屋島

高松の東北三十町ばかりの八栗山の西麓に在り、庵治村と相對する
 もの、之れを屋島となす、其間を、埴の浦と云ひ、其岬角を、長崎
 といふ。此地の名高き古戰場たることは、今更案内するにも及ばざ
 るべし、元暦元年のことなりき、平の宗盛が、安徳帝を守護し奉り、
 行宮を經營したる其跡尙存し、坐るに平家滅亡の昔しを追懐せし
 む。其海上には、大島、鯉島、兜島などありて、名さへ懐古の種と
 はなる。此處ら航海するときこそ、旅魂轉々凄然などいふ形容字も

岩壺といふ所あり、得もいはず大なる石
 の、四方なる中に、穴の明きたる中より
 出づる水の、きよくつめたき事限りなし、
 富士の山は此國なり、我生ひ出でし國に
 ては西面に見えし山なり、其山の嶽いと
 世に見えぬ様なり、様異なる山の姿の紺
 青塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世も
 なく積りたれば、色濃き絹に白き袖きた
 るやうに見えて、山の嶺のすこし平き
 たるより、煙は立ち登る、夕暮は火の燃
 え立つも見ゆ、富士川といふは富士の山
 より落ちくる水なり、其國の人の出で、
 歸るやう、いとせ頃、物にまかりたりし
 に、いと暑かりしかば、此木の面に休み
 つゝ見れば、川上のかたより黄なるもの
 流れ来て、物につきとまりたるを見れ
 ば反古なり、取りあげて見れば、黄なる
 紙にして濃くうるはしく書かれたり、怪
 しく見れば、來年なるべき國ともを、
 除目のこと皆書きて、此國來年あくべき
 に守なくて、又添へて二人をましたり、

怪しあさましと思ひて、取り上げて乾かして收めたりしを、歸る年の司召に、此文に書かれたりし一つ違はず、此國の守とありしまゝなるを、三日の中になくならりて、又なり代りたるも、此傍に書きつけられし人なり、かゝる事なんありし、來年の司召などは、今年此山にそこばくの神々集りて、ない給ふなりけりと見給へし、めづらかなることにはさぶらふと語る、清見が關は、片つ方は海あるに、關宿とも數多ありて、海まで釘をきしたり、煙りあふにやあらん、清見が關の浪も高くなりぬべし、面白き事限りなし、田子の浦は浪高くて船にて漕ぎめぐる、沼尻といふ所もする／＼と過ぎて、大井川と云ふ渡あり、水の世の常ならず、すりこなどを漕いで流したらんやうに、白き水早く流れたり、いみじくわづらひ出で、遠江にかゝる、小夜の中山など越えけん程も覺えず、いみじく苦しければ、そこで日頃過ぐる程にぞ、やう／＼とこた

る、冬深くなりたれば、河風烈しく吹き上げつゝ、堪えがたく覺えけり、其渡りしつゝ、漢名の橋に着いたり、漢名の橋、下りし時は黒木を渡したりし、此度は跡だに見えねば船にて渡る、入江に渡せし橋なり、外の海はいみじく荒く浪高くて、入江のいたづらなる洲どもにこそものもなく、松原の茂れる中より浪の寄せかへるも、いろ／＼の玉のやうに見え、實に松の末より浪は越ゆるやうに見えて、いみじく面白し、それより上は井の鼻といふ坂の、得もいはずわびしきを登りぬれば、三河の國の高師の濱といふ、八橋は名のみして橋のかたもなく、何の見所もなし、二村山の中に泊りたる夜、大なる柿の木の下に菴を作りたれば、一夜菴の上に柿の落ちかゝりたるを、人拾ひなぞす、宮路の山といふ所越ゆるほど、十月晦日なるに、紅葉して盛なり、嵐こそ吹きこざりけり宮路山までもみぢ葉の散らでのこれる、

入用ならん。

多度津は、讃岐の國多度郡に在り、琴平神社へ參詣せんと欲するものは、此處より上陸し、而して瀛車にて行くべし。此地は、瀛船の出入絶間なく、なか／＼に繁華なる港なれば、宿屋も、自由に求めらるべし。見物すべきところは、硯岡といふ丘あり、之れに登れば、眼下に、筆の海と云へる景色面白く、鹽飽の群島點々散在して、風景頗る妙。大阪から此處へは、九十四海里、先づ十時間にして達すべし。

普通寺

普通寺に、多度津の南の方一里二十町ばかりのところを在り、弘法大師の遺跡ある寺にて、其伽藍には、天竺八塔の土を敷て建立したりと傳ふ。五層の高塔音く鐘を、古雅清淨一遊の價あり。

琴平宮

琴平宮は、讃岐の國那珂郡象頭山の山腹に在り、多度津を距る三里餘、氣車にて來往すべし。其參詣人の多きは、誰れも知るところ。従つて、琴平町の繁華なる、宿屋にも、なか／＼好いところあり。

朝津

朝津は、備後の國沼隈郡の東南端に在り。嘗て神功皇后征韓の御歸途、朝津を此邊に納め給ひしより、斯る稱號出せしやう、聊か猛者引の口上めくが、旅客心得置くべし。併て此地は、海波甚だ静かにして、船舶の寄泊するもの多く、前には、三津島、津輕島、狐崎、東には、辨天島、仙醉島、西には、阿武菟岬。さながら故意と造りし如くに甘くならび、其風景の美なるには、只々アツと感するばかり、詩も歌も、遠慮して出ぬところ。大崎から海路百十四海里、凡そ十時間餘りにして達せらるべし。

仙醉島

仙醉島は、朝津港の對岸に在りて、松樹繁茂し、滴る緑は、碎くる白波に洗はれ、其美言はん方なし、其傍の小島を、辨天島といふ、辨天を祀れる小祠ありて、何れも風景なかく妙。

沼名前神社

沼名前神社は、朝津の北の方に在りて、素盞鳴尊を祭る。其緣起は、此に説す、御信心の方は、參詣せらるべし。

福禪寺

福禪寺は、朝津の東岸に在り、天慶年中空也上人の開基せし寺にして、千手觀音を安置す。正徳年間の事なりとか、韓人李邦彦といふ

三河と尾張となるしかすがの渡、實に思ひ煩ひぬべくをかし、尾張の國鳴海の浦を過ぐるに、夕汐たゞ満ちに満ちて、今宵宿からんもちうげんに、汐満ち來なばこゝをも過ぎじと、ある限り走り感ひ過ぎぬ、美濃の國なる境に洲股といふ渡りして、野上といふ所に着きぬ、そこに遊びども出で来て、夜一夜歌うたふに、足柄なりし思ひ出でられて、哀れに戀ひしきこと限りなし、雪ふり荒れ感ふに、物の興もなく、不破の關あつみの山など越えて、近江の國沖中といふ人の家に宿りて、四五日あり、みづさか山の麓に、夜登時雨霰降りみだれて日の光もさやかならず、いみじうものむつかし、そこを立ちて犬上、神崎、やす、くるもと、などいふ所に何となく過ぎぬ、湖の面はるくとして、なで島、竹生島などいふ所々の見えたる、いと面白し、瀬田の橋皆崩れて渡り煩ふ、粟津にとまりて、十二月の二日京に入る、暗く行き着くべ

もの、其眺望の妙を賞美し、日東第一形勝と書したりしが、其後寛延中の事なりき、同じ韓人の洪景といふもの又對潮樓と題し、今にそれを額として掲げり、此對潮樓に登りて、仙醉島、辨天島などを望めば、翠樹、白浪相映射し、其風景の妍秀美麗なる、いかにも比類なし、旅客は、是非とも一遊を試みざるべからず。

阿武菟岬
阿武菟岬は、兩津の西一里ばかりのところに在り。元龜年間、毛利氏、此に一字を建立せしが、寛文年間に至り、水野氏、丈夫な石臺を築き觀音堂を建たり。石段を登り、堂に至り見れば、斷崖數尋の下、海潮洶湧、白浪碎け飛び、其壯觀奇景言ふばかりなし、夏時涼を納るなどは、至極妙なり、一遊すべし。

尾の道
尾の道は、備後の國御抽郡の東南なる海岸に在るところにして、繁華の市なり。大寶、愛宕などの山を負ひ、向島を前に抱へ、港内波浪穏かにして、船舶の出入繁く、宿屋などは言ふまでもなく、總て便利なり、山腹には、社寺連なり立ち、何れからも、眺望よろし。大阪より此處までは百二十七海里、凡そ三時間にして達すべし。

千光寺
千光寺は、尾の道での大寺なり。尾の道町の西北三丁ばかりを登りし所に在り、此寺は、古く大同年間の開基に係り、今の堂宇は、貞享年間に建つと云ふ、寺内に大石あり、形の似たるを以て、烏帽子岩と呼べり、此岩いかにも美麗光玉の如し、依て此地を玉の浦と名づくとか、或ひは云ふ、昔し岩の上に寶珠あり、常に海面を照せしを以て、斯く名づくるとか、色々の縁起あり、見渡せば、市街、港口、島など、眼中に集り來り、其風景實に畫圖の物たり。

しと、申の時ばかりに立ちて行けば、關近くなりて山づらに、かりそめなるきりかけと云ふ物したる上より、才六の佛の、未だ荒作りにはおはすが、顔ばかり見やられたり、哀れに人はなれて、いづくともなくおはする佛かなど、打見やりて過ぎぬ、こゝらの國々を過ぎぬるに、駿河の清見の關と逢阪の關とはなかりけり、いと暗くなりて三條の宮の西なる所に着きぬ、

○佐渡わたり

わが旅行のときはいつにても五戒を立てて、道中記の初に大に書き付けて、毎日之を見て堅く慎む事なり、其五戒といふは、渡海、馮河、夜行、異食、賤妓なり、是旅行の人の最も身をあやまち病を得るの本なり、志ある人は、懼るべきことは深く懼れ、身を全くして長生を得てこそ、藝術をも成就して、人を救ひ後世を恵む事は有るべし、此五戒の事も、常

竹原は、安藝國加茂郡の東南に當る成井川の海口に在りて、東は阿波を望み、南は生野島に對す、此地は、彼の日本外史の著者として名高き頼山陽の郷里なり、海邊の景色なかくよろし。大阪から百四十三海里、凡そ十五時間にして、到着すべきなり。

瀬戸
瀬戸は、安藝の國安藝郡に在りて、警固屋村と相對せり、其間僅かに五十間ばかり、所謂瀬戸の瀬戸といふは是れなり。傳ふるところに據れば、此地昔は地形なりしを、平清盛安藝に守たりしとき、之れを開通して船の通ふやうになしたるなりと、此處は潮流急にして、浪奔雷の如く鳴てすさまじく、帆前船は、岸に沿ふて、潮の様子を

々はよく心得て犯すまじと思へども、其時に臨み、足疲れ天氣静なれば、船に乗るべき心も起り、川越しに無理の賃金をむさばらるゝときは、是ばかりの川、何程の事かあらんとも思ひ、途の繰合せに依りては、日暮れても宿を取りかね、人の馳走の志を無下にせんことを氣の毒に思ひては、食ひなれぬ異物をも箸を下すなど、是皆其時に當りては、兼て心の外になりて、跡にては大なる災を得ることなり、此故に毎日目にふるゝ道中記に書き付けて、かりそめにも犯さじと慎む事なりしが、今町の旅館松屋といへるに入りぬれば、越中にて親しく交りし松軒といふ人、此間より此松屋に逗留して居られれば、旅中の邂逅心なぐさみて打ち語らふに、松軒云ふは、今宵此町より佐渡に渡る船あり、能き便船なれば自からは渡るなり、そこにも佐渡が島一見し給ひなんや、よき道づれなれば、共に彼島の名所探らんとすゝむるにぞ、

候ひ、潮合の好き時を見て、偕て待合し居る多くの船一齊に越し行く、其状亦なかくに観物なり、海中に、清盛の塚あり、一勝地となす、旅客之れを訪ふも可なり。大坂より此處まで百六十三海里、凡そ十七時間にして達すべし。

吳は、安藝郡に在りて、昔しは、南の端なる数ヶ村の總稱なりしが、去る十九年に軍港となりしより、俄かに名高き所となり、戸口に日に増加し、愈々益々盛んならんとす、前は、鳥小島を控へ、西は、江田島、南は、倉橋島と相對し、一ツの大灣を成す。江田島は、人の知る如く、海軍兵學校の在るところにして、北の方は、遙かに廣島を相望む、其間に、似の島あり、其形富士に似る、安藝の小富士といふは是れなり、旅客一覽して可なり、大坂より此處まで百六十六海里、凡そ十七時間ばかりにして達すべし。

宇品は、廣島市の南京橋川の海口に在り、昔しは、洲渚泥深く、船舶の碇泊などに、頗る不便なりしも、今は築港の業竣り、棧橋も出來て、全く面目を一新し、宿屋も多く、車馬の往來も頻繁にて、なかくに盛んなる土地とはなれり。特に二十七年以來征清役に要用

天氣は晴れたり、風は静なり、又かくよき便船もあるまじければ、今宵出づることならば、いさや彼地に三五日逗留して、風土をも見んものを、例の不了簡出で、何心なく暮過ぐる頃より船に乗りぬ、わづかに水手四人乗れり、客といふは、松軒主従、余師弟のみなり、其外に荷物少々積み入れていと少なき船なり、殊に北海は冬より春に至り浪風荒れて、海上に船の往來なく、やうく四月初頃になり船を出だす事なり、此頃は天氣打ち續き長閑なればとて、未だ三月の上旬なるに、初めて佐渡に渡らんとする船なり、是は諸方とも未だ佐渡に渡りし船なき折なれば、其内に荷物を積み渡れば、格別の利をも得る故に、危きをして渡れる船なり、さて初更過ぐる頃湊を出でしに年老ひし船頭一人送り來て、船中の水主どもに云ふ様は、北の空に雲少し見ゆ、又月の色も勝れぬは、如何に此程天氣よければとて油断はならず、佐渡に渡

なる港として用ひられ、宇品と言へば、誰れ知らぬものもなきに至れり。此港の南に、宇品島あり、青松繁茂浪に映じていと美しく。大坂より此處まで百七十六海里、凡そ十八時間にして達すべし。

巖島は、安藝國佐伯郡の海中に在りて、其周囲は七里餘、市杵島、伊都伎島又宮島と稱し、辨天を祭り、日本三景の一ツなることは、世人のよく知るところ。北は、廣島を距ること五里あまり、西は大野村最も近くして僅かに一里に過ぎず、南は、遙かに周防伊豫等の諸山を望み、東は江田其他の島々を見、何處を見ても、其景色の美ならざるはなし、神社は、三笠濱の下に在りて、其昔し平清盛の再建したるところ、崖に倚り、水に浮び、左右に長き廊架を廻らし、潮満ち來れば、總て水上に在り、其結構の宏壯美麗なる、其風景の秀美なる、只々驚嘆の外はなし、全島名所古跡多くして、迎もこには述べべからず。旅客たるものはどうでも一度は見に行さるべからず。大坂より此處まで百八十六海里、凡そ十九時間にして達すべし。

岩國は、周防國玖珂郡に在りて、吉川家の舊藩地なり。人家も多くなかく繁華の地なり、大坂から此處まで百九十五海里、凡そ二十

るは大事の海なり、北に見ゆる雲動きな
 ば、中途より何方へも船を着くべし、佐
 渡に山近くなりても、風起れば佐渡に取
 り付く事難うして、北濱に吹き放たる、
 なり若き者元氣にはやりて過すな、と
 練りかへし戒めて歸りぬ、氣味わるき事
 をも云ふものかなと思ひながら、帆にま
 かせて北海四五里が程出づる所に、北の
 方の雲と天と接せし所いと黒くなり、上
 弦の月入る程に、其色ますますくあやしく
 て、風やも變れば、川主ども氣遣ひて、
 夜明くる頃には西風や落ちん、東風はや
 變らんと、口々に評議す、之を聞く彌々
 懼ろしく、又晝の程北海を見しに、是れ
 より水氣の揚りし事など思ひ合せて海中
 は必ず明日は雨風や起らんと思ひめぐら
 すに、安き心もなし、其内に風やも起り
 来て波逆立ち、船のゆる事笑をひるが如
 し、岸遠く離れたり、殊に夜更けぬる事
 なれば、四方皆渺茫としてたよるべき所
 見えず、船頭に何方にもせよ船を陸に着

時間にして達すべし。
 錦帯橋は、一名算盤橋ともいふ。岩國の西北なる錦川の流れにかゝり、五橋連りて成れり、長さ百二十五間あり、名高き橋なれば、一見するも可ならん。
 大畑の瀬戸
 大畑の瀬戸は、周防國玖珂郡と大島郡との間に在りて、潮流急にして激しく、碧波緑樹、相映じて飛奔するの勢ひ頗る妙なり、夏時の旅には、是非一覽すべし。
 柳井津
 柳井津は、周防の國玖珂郡に在り、前は笠佐島を控へ、東は大畑の瀬戸に臨み、風景頗る好し、此處は周防東南部の要港にして、山口縣下屈指の商業地なり、人家も多く、總て便利の均なれば、船に倦みたる旅客は、一遊するも可なり。
 徳山
 徳山は、周防國都濃郡に在りて、毛利氏の城下なりしところ。市街は、國道に沿ひ、西北より斜めに東南に延び居れり、海陸の運漕頗る便利の所にして、船舶常に寄泊し、風景も亦好し。大坂から此處

けよと云ふに、此あたりには着くべき所
 なしといひて、船頭さへ船をあやどり乗
 ねて見ゆれば、今にもあれ、雨降り來り
 風いよ／＼荒れ來らば、此船忽に覆へ
 らんものと思へば、心の内やるかたな
 く、立ちても安からず、居りても安から
 ず、此時に日頃の五戒思ひ出で、今日
 は如何なれば此船に乗りて、かゝる灘海
 に浮み出でし事ぞや、日頃書き付けし五
 戒は、如何にして忘れぬる事ぞやと、我
 なから悔ひ怪みて、何卒して一刻も早く
 恙なくて本の湊へ戻れかしと、心中に祈
 念し、是より以後は此事心肝に刻みぬれ
 ば、如何なることありとも海の船には乗
 るまじと、獨り心に誓ひ居たり、されど
 も波静まらず、西にゆられ東に漂ひする
 程に、心神惱亂して賊に誘はれ、三年
 の壽命も促まりし事を覺えたり、然るに
 天の冥助ありて、風また東北より吹き出
 で、五更の頃、不思議にもその直江津
 の湊に入りぬ、其時のうれしさ、賊に蘇

まで二百五十二海里、凡そ二十六七時間にして達するを得べし。
 三田尻
 三田尻は、周防國佐波郡に在りて、港内水深からざるも、山口へ最も近き要港なれば、船舶の寄泊するもの常に絶えず、風景も頗る好きところ。
 松崎神社
 松崎神社は、三田尻の北十八町ばかりのところ、宮市驛酒垂山といふ所に在りて、菅公を祭る神社なり。旅客此社に參詣せば、其山の白砂にして清き、觀望するところ、三田尻江泊の勝景を自睦の裡に收め、遠く二疊諸山の青一髪を髣髴すべく、確かに一遊の價あり。
 門司
 門司は、九州東北の隅なる豊前國全救郡に在りて、長門の赤間が關とは、僅かに一章帯水を隔つるのみなり。高麗濱、新羅濱、文字關など云ひしは、總て此地のことにて、昔は、なか／＼に盛んなるところなりしも、一時は、蕭條たる一漁村となり居りしに、近頃に至り、九州鐵道貫通し、こゝに築港の業成るに及び、再び盛んなる港とはなりけり、土地は狭けれど、海水は深く、船舶の碇泊すること常に絶えず、實に西海道の咽喉にして、極めて繁榮の地なり。大坂

生の心地ぞせる、急ぎ松屋にあり、夜もすがらの心勞に身もいたく勞れぬれば、其翌日は終日寝て休息す、賊に此直江津よりは佐渡の國まで三十五里の海上なるに、かゝる小舟に乗り、また春淺きに限り知られぬ北海に浮み、此天氣に逢ひしに、恙なくして元の波に歸り着きぬるは、不思議の事とも云ふべし、すべての常なみの佐渡わたりの湊口は、出雲崎といふ所を第一とす、出雲崎は佐渡の渡り口の町なれば繁華の地なり、海上も程近く僅かに十八里を隔てたり、又出雲崎より四里東北に、寺泊りといふ所あり、此所も頗る繁華の地なり、此寺泊りは佐渡へ第一に近き地にて、十六里の海上なり、此所昔は佐渡の渡り口の湊此寺泊りなりき、昔し爲衆大納言佐渡國へ配流の時、此寺泊りの驛にて、數日風を見合せて逗留し給ひける時、此里の遊女初君といふを相知りたりしに、初君別れを惜しみて、和歌をよむ、其和歌今に町の中程の南側

から此處まで二百九十二海里、凡そ三十時間にして達すべし。
 清瀧公園は、門司港から南の方五六町の山腹に在りて、處々に亭を設く、眺望するところ、北は對岸なる馬關の繁華、西は玄洋の島々、東は茫茫たる周防洋の風光、總て指顧の裡に在り、風光の雄麗なる、坐るに身體の大きくなりたるが如き心地す、旅客は是非一遊すべし。
 速戸神社
 速戸神社は、これも亦門司港の東北に當れる海峡速戸崎に在り、西は長門の瀧の浦に對し、其間僅かに八町餘りなれども、舟行頗る危険と言へば、うづかり舟にて行くべからず。此地の磯石隠見して多くならび、碧浪に洗はれ、濺がれ其狀なか／＼に面白し。
 赤間關
 赤間關は、下の關又は馬關と稱し、長門の國の西南端に在り、豊前の門司港と相對せり、此地は、實に日本西方の咽喉にして、東は、早瀬の瀬戸を以て、暴風を凌ぎ、西は彦島に依て、玄洋の荒波を防ぎ、丘陵を負ひ、硯の海を抱き、港内水深くして、大船巨船も碇泊せらるべく、船舶の往來間斷なし、詩人が、嘗て山陽の小浪華と詠

に石碑に彫り付けて残り、碑面を見れば、物思ひ越路の末の白波も立歸る日ありとこそ聞け、遊女初君とあり、是は爲衆の心をなぐさめてよめりとぞ、賤しき身にも限りなくやさしき事なればとて、後に玉葉集にも入れられたり、又日蓮上人佐渡が島配流の時、此寺泊りにて七日間風を待ち給ひけるとて、其舊跡の寺も残り、賊に越後國すら昔より鬼住む國と云ひ習はし、我等如き萍水の身だにも、住み果つべき國とは思ひも寄らざるに、高貴の身として越後國をたに海を隔てたる佐渡が島に左遷し給はん心の内、如何あらん、初君が歌を見るに付けても、其時の事思ひやりて、そらろに旅の袂をぬらしつ、

○成田詣

高田興清 傳四郎
 二十六日今日も天氣よし、文泊、傳四郎など別れを告げて、馬を成田まで進む、林兵衛、由右衛門はなほ阪東道二十

せし如く、なか／＼に盛んなる港なり。大阪から此處まで二百九十二海里、凡そ三十時間にして達すべし。
 龜山神社
 龜山神社は、赤間關の外濱町と神宮司町との間に在る丘の上に在りて、應神天皇を祭れるなり。境内は、老樹鬱茂し、幽靜なるところにして、硯の海の風光を望み得べく、頗る眺望よろし。旅客參詣して可なり。
 赤間宮
 赤間の宮は、赤間關阿彌陀寺町に在り、安徳天皇を祭れるゆゑを以て、俗に之れを天皇の社と云ふ。後は丘、前は早瀬の瀬戸に對す、此處も亦なか／＼勝景の地なり、旅客參詣すべし。
 壇の浦
 壇の浦は、阿彌陀寺の東に沿ひて、壇の浦町あり、此處より東の方數町のところは、其昔し源平が一盛一衰せし古蹟なり、人も知るなる壇の浦、今は蕭條として、唯其名の存せるのみ、旅客此處に遊んで、靜かに源平盛衰の昔しと思はれ、坐るに感涙の滂沱たるあらん。
 右は極めて概略なれど、其細かな記事は、後の案内記に譲るとして

里ばかり送り來つ、酒詰村にて水戸路を横濱に經て、用水に沿ひて下る、馬手の方の見やりなる山は、相馬郡小文間の第六天山といふ、こゝに昔は盗人の數多籠り居て、往來の人を引き刺さなどせしに、今はあまねきおはん恩みによりて、さる煩ひもなしと云へり、取手の宿も遠からぬほどなれば、吾友澤近嶺が家をとぶらはやと思ひしかど、急ぐ道なればさて止みぬ、近嶺は口面白き歌人にて、消息の度ごとに便りうれしく眼の拭はるるを、訪はでしも過ぎぬるは本意なきわざなり、彼聞かば怨むべし、我もいと悔し、戸田井のわたりにて、方文が送りの人も馬も歸し遣りつ、舟の設まで兼ねて文伯があきてせしかば、たひらかに布佐の津にはてぬ、布川の里は東北の岸に見ゆ、此頃は順行、傳四郎、文伯などがまめしきあるじまうけの心ばへは、詞にも筆にも述べ盡し難し、戸田井は小文間の内なれど、堤を隔て、子飼川の河邊に住

借て左に、諸港の宿屋賃を掲げ出して、旅客の便に供せん。

諸港宿泊料

- 多度津港 にては、最上等が、五十錢より壹圓位まで。上等は三拾錢より四十五錢位まで。中等は、貳拾錢より二十七八錢まで。下等は、十五錢位より十八錢位までなり。但し晝飯は、此外と知るべし。
- 潮津港 にては、上等四十錢位。中等三十拾錢位。下等二十五錢位。但し晝飯も共なり、随分安し。
- 竹原港 にては、上等宿泊料三兩とも上等六拾錢。中等五十錢。下等四十錢との事なり。而して並等宿料三兩とも上等四十錢。中等三十五錢。下等二十五錢との事なり。
- 吳港 にては、特別上等七拾五錢。上等五十錢。中等四十錢。下等三十錢位。
- 嚴島 にては、第一號取扱旅館一泊二飯膳料上等壹圓五十錢。中等壹圓。下等六十錢。同じく一泊一飯膳料上等壹圓。中等七拾錢。下等四十錢。同じく一飯膳料上等五十錢。中等三十五錢。下等二十五錢。而して第二號取扱旅館一泊二飯膳料一等三十五錢。二等三十錢。三等二十五錢。四等二十錢。五等十四錢。同じく一

む田居なれば、外田居といへるにや、子飼川と刀禰河との落合にて、此所を塞ぎ止めたらんには、相馬は昔の淡海の中島ともなりぬべきありさまなり、享保十三年と云ふ年に、わが遠つちの友清の翁、功しき心を起し、千万の金を捨て、堤を築きなされしが故に、二万石あまりの新田開けしといふ相馬郡の手賀沼も、遠からぬ所に在り、其堤を今も高田堤と呼べりとなん。

つきなせし手賀沼堤つゝむとも功高田の名やはかくるゝ、印旛郡竹袋など云ふ里を過ぎて、植生郡の安食川を渡る、此川は印旛沼の流れなり、安食の里より道を右に取りて、印旛沼の邊を行く、道與准后の稻穂の海と書かれし所なるべし、今は渚の方、田とされるが多かり、むべしこそ稻穂の海とほせけれ田となる岸に滿てる富草、松崎村といふ所より九折坂を登るに、駒

- 泊一飯膳料一等二十二錢。二等十八錢。三等十五錢。四等十二錢。五等八錢。同じく一飯膳料一等十五錢。二等十二錢。三等十錢。四等八錢。五等六錢なり。さすが名所だけに、高いのもあり、安いのもあり、旅客は、其勝手に任せ置べし。
 - 徳山港 にては、上等二十五錢。中等二十錢。下等十八錢。一泊二飯膳料一等壹圓。二等七十五錢。三等五十錢。四等四十錢。五等三十錢。晝飯一度膳料一等五十錢。二等三十五錢。三等二十五錢。四等二十錢。五等十五錢と色々あり、これも其勝手に任せ置べし。
 - 門司港 にては、一泊二飯膳料一等壹圓。二等七十五錢。三等五十錢。四等四十錢。五等三十錢。晝飯一度膳料一等五十錢。二等三十五錢。三等二十五錢。四等二十錢。五等十五錢等なり。
 - 赤間ヶ關 にては、二食付上等の上壹圓。上等の中七十五錢。上等的下五十錢。並上等五十錢。並中等三十錢。並下等二十二錢なり。
- 右に準じて、其他の寄泊所などの相場を見積らば、決して大差なかるべし。

と行きなづみ、鞍の上平かならずして、
 とむつがし、此近きほどなる天竺山龍角
 寺に龍神の社あり、月毎の朔日十五日廿
 八日には、印旛の海の真中なる百丈穴
 と云ふより、龍燈飛び揚りて、此社の御
 前にかゝれるとぞ、又大なる洞穴三つあ
 りて、中に石燈を敷き設け、昔は人住み
 けん跡とおぼしきに、隠れ座頭といふ妖
 怪住りりとなん、其洞穴の上に、國內第
 一の大なる松の樹の、根は一つにて七本
 に分れたるがさし掩へりどぞ、行きく
 て谷に下れば千把池とて水多くもなきが
 あり、野となれるところに松一本立てり、
 こは或る都づ女が、此池の邊みへ一日に
 千把の苗を植ゑんとかせぎけるに、疲れ
 困じて死にけるを、埋みしるしの松に
 て、千把が池と云ふも、それより負へる
 名なりといへり、郷部村に植生大明神の
 社ありて、高居に當國三宮といふ額を懸
 く、此は神明眼には見えぬ神なり、やう
 く、日も傾き行けば、心急ぎせられて、

はしりうちも爲まほしけれど、あやふげ
 なる坂道なればいかはせん、駒の歩み
 に任せつゝ、とかくして成田の里の不動
 尊の御あらかに詣で着く、昔見しには様
 變り、棟を並べ、薨をかかえて堂塔の装
 嚴たぐひなき靈場のありさまなり、別當
 を成田山新勝寺といふ、眞言宗の大寺な
 り、縁起のことばをよむに、此不動尊の
 木像は、弘法大師刻み奉らして、高雄
 の神護寺の護摩堂に年久しくたゞせたま
 ひしを、平將門が騒ぎの時、勅を奉は
 りて、數多の驗者たち、賊徒降伏の祈禱
 をせられしに、廣澤の寛朝僧正は、此
 靈僧を請じ、難波より南の城を舟にて送
 りまゐらせ、此里に居え奉りて丹誠を
 凝らされけるが、其驗ありて、將門途に
 貞盛秀郷が爲めに首を獲られぬ、又下總
 國生實郷の大嚴寺の開祖道譽上人が奇瑞
 を蒙られし事など、其外靈驗いちじるし
 きためし、擧げて敷ふべからず、抑も阪
 東に不動明王の古靈場三所あり、相模國

○第十三大阪商船會社乗客賃金表

和歌山まで	上 等	五十四錢	中 等	三十六錢	下 等	二十四錢
○大坂より	上 等	二十七錢	中 等	十八錢	下 等	十二錢
兵 庫まで	上 等	四十五錢	中 等	二十五錢	下 等	十八錢
假 屋まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
志 築まで	上 等	五十錢	中 等	三十五錢	下 等	二十二錢
洲 本まで	上 等	二十七錢	中 等	十八錢	下 等	十二錢
○大坂より	上 等	二十七錢	中 等	十八錢	下 等	十二錢
神 戶まで	上 等	四十五錢	中 等	二十五錢	下 等	十八錢
多 摩津まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
今 治まで	上 等	四十五錢	中 等	三十五錢	下 等	二十二錢
三津濱まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
島田門司迄	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
伊 豆まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
呼 子まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
伊 萬里まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢

○大坂より	上 等	二十七錢	中 等	十八錢	下 等	十二錢
兵 庫まで	上 等	四十五錢	中 等	二十五錢	下 等	十八錢
明 石まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
長 砂まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
飾 磨まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
網 干まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
室 津まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
阪 越まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
○大坂より	上 等	二十七錢	中 等	十八錢	下 等	十二錢
神 戶まで	上 等	四十五錢	中 等	二十五錢	下 等	十八錢
岡 山まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
小豆島まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
高 松まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
多度津まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
玉 島まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢
○大坂より	上 等	二十七錢	中 等	十八錢	下 等	十二錢
徳島まで	上 等	四十五錢	中 等	三十錢	下 等	二十錢

旅行案内

大住郡の大山寺と、武藏國多摩郡の高旗寺と、この新勝寺なりと、大山寺は吾妻鏡に出で、世人あまれく知れり、高旗寺は鎌倉大草子に見え、また寺に傳はれる文永十年の金鼓の銘、唐永元年に修理しまわれしに、後醍醐天皇の記文、應永二十年の勅進状などに委しく縁由をしるして、鎌倉公方家の崇敬ならびなかりし御佛なり、今三所の中によなう参詣に人多かり、此成田の靈場なり、今日も稞詣、断食籠など云ふ恐ろしき行を勤めて、いりもみ奉る輩さへ少なからず、暮れはてし御前の町家に宿りしに隣に集れる男女ども、騒がしう物言ひ打ちさるがむて、うまひもせず、夜廻の馬の鈴の音耳近く聞え、くちどりらが丑のくびぞなと言ひ過ぐるは、いたう更けぬるなるべし。

○天龍峽の記

阪谷朝庵
余師訪湖の明秀を愛し、天龍河の南に沿

ふて下る、兩山崖の如く、崖然天を摩し、中間は阻夷にして、邑居田圃高底相接す、心甚だ其形勢を異とす、既に飯田に入る、故人丸山仲熊の家に住る、席間傍近の山水を叩く、仲熊曰く、子何ぞ一勞を憚つて佳山水に負くに忍びんやと、乃ち勉めて其勝を探る、行くこと二里ばかり、郷醫關島氏を訪ふ、主人與率喜ぶべし、導いて峽口に至る、百丈の斷崖折裂して斧劈の如し、平遠の水、此に至り、順に巖の爲めに窄めらる、舊橋薄状、鋭鋒向ふ所石皆辟易す、惱怒りに勝へざれば往々に倒に流る、主人延いて大石上に踞す、須臾にして童兒四五輩、喧吼して去る、瓢を負ふものあり、壺を提ぐる者あり、釣具を持つる者あり、火を扇ぎ水を汲み、茶酒興を助く、余試に綸を垂る、底深くして流急なり、釣を受けず、遂に竿を投じ、濺撥して進む、崖益高く岩益偉なり、勢又益逼仄し、緑樹横に生じ維ふるに松竹を以て

○大阪神戶より	上等	四圓〇五錢	馬關まで
	中等	二圓七十五錢	釜山まで
	下等	一圓八十錢	仁川まで
		九圓	
		十八圓	
○馬關門司より	上等	六十八錢	
	中等	四十五錢	
	下等	三十五錢	
中津まで			
宇ノ島まで			
長洲まで			
大阪より	下等	十二錢	神戶まで
神戶まで			
高松まで			
多度津まで			

新津まで	九十五錢	博多まで	二圓	新居濱まで	一圓十五錢
尾ノ道まで	九十五錢	長崎まで	三圓五十錢	今治まで	一圓十五錢
竹原まで	一圓二十錢	三角まで	四圓	三ツ濱まで	一圓三十錢
音戸まで	一圓廿五錢	百貫まで	四圓	長濱まで	一圓四十錢
吳まで	一圓三十錢	島原まで	四圓	杵江まで	一圓六十錢
廣島まで	一圓三十錢	若津まで	四圓	日出まで	一圓六十錢
宮崎まで	一圓卅五錢			別府まで	一圓六十錢
岩國まで	一圓四十錢			大分まで	一圓六十錢
柳井まで	一圓五十錢			佐賀關まで	一圓六十五錢
錦山まで	一圓七十錢			白杵まで	一圓七十錢
三田尻まで	一圓七十錢			佐伯まで	一圓八十錢
馬關司	一圓八十錢			土々呂まで	一圓八十五錢
				細島まで	二圓十五錢

す、懸瀑として影を水中に倒す、水受け
て之を蕩かし、潭となり潮と爲り、懸瀑
と敷奏す、水碧に岸碧に、草樹皆碧なり、
仰いで頭上を望めば、天亦婉婉として一
碧流となる、時に瀾瀾花盛に開く、瀾
峽亂點、濃朱を著くるが如し、景一も蓄
くべからざるなく、而して蓄も亦及ばざ
るものあり、會々老翁あり岩下に漁す、
班白僂僂、亦畫圖中の物なり、呼んで籃
を覗へば小魚僅に二三尾、乞へば輒ち之
を與ふ、乃ち崖上の最高處を指し、童兒
に命じ、地を掃ひ席を設けしめ、更に榛
莽を開き勝を求む、峽已に幾轉し、巖態
百出、氣象も亦蕭條、前崖の一巨岩潭底
より拔起し、直立數十丈、高く崖上に出
づ、古松を蒙り翠篁を帯び、筋骨倒に
張り、勢雲を穿たんと欲す、我依る所
の岩壁も、亦巖嶒嶒たり、而して目眩の
觀、轉じて全形を窮むる能はず、殊に惜
むべしと爲す、下流を回瞻すれば、峽勢
宛轉、窮つて亦通ず、又奇壺すべからざ

右の如くにして、大坂商船會社乗客の手荷物は、上等船客拾貫目
中等船客八貫目、下等船客六貫目までは、無賃なりと知るべし。

○第十四汽船小荷物賃金

汽船にて旅行する人は、宜しく汽船小荷物の賃金を知り置くべし。
即ち汽船にも、涼車と同じく、小包早速便あり、其運送と配達の方
は、鐵道早速便と少しも替りたることなし、尤も其場所によりて、
涼船の出發前數時間を要するところあり、それゆえ明日正午出帆の涼
船にて小荷物を送らんとするものは、成るべく今日の内に、其手續
をなし置くこと必要なり。

日本郵船會社の東京より各地への小荷物運賃は、左に記せるが如
し。

敦賀まで	三圓二十錢	小樽まで	七圓	萩まで	二圓三十錢
伏木まで	三圓四十錢	函館まで	五圓	江崎まで	二圓十五錢
直江津まで	三圓八十錢	大阪より	下等	波田まで	二圓六十錢
新潟まで	四圓十錢	神戸まで	十二錢	温泉津まで	二圓七十錢
酒田まで	四圓五十錢	多度津まで	九十五錢	堺まで	三圓二十錢
船土川まで	五圓	門司まで	一圓八十錢		

るなり、再び崖上に登れば、童兒待つこ
と久し、魚を炙り杯を傳ふ、且眺め且飲
む、主人日影を顧て歸るを促す、余猶
戀々回顧す、其家に歸れば日は全く没せ
り、夜話峽に及ぶ、主人曰く、地秋葉山
を距る二十餘里、峽勢連亘、其奇往々今
日觀る所の如し、但危険絶特、已むを得
ざるにあらざれば舟楫を通せず、古來數
々鑿開の説あり、而して竟に行ふ能はざ
るなり、是より先き、峽名未だ定まらず、
余以爲く川既に天龍と名づく、盛稱此な
し、別に名を擇ふを用ふず、且峽の魁奇
なる彼が如し、安ぞ川の峽に由つて名を
得、而して其本を失ひしにあらざるを知
らんやと、因つて定めて天龍峽と稱すと
いふ、弘化丁未四月小盃日に遊び、遊後
一日記す、

但し右會社の涼船が、横濱を出帆するの時刻、翌日の正午なれ
ば、東京にては、本日の午後三時までに、同會社の元四日市河
岸支店へ依託すべし。

○東部と呼べる地方へ送る小荷物及び原價取は、左の如し。
萩の濱、石の巻までの小荷物一才以下は二十錢、二才以下、三才
以下も同じく、元價百圓に付ては三十錢なり。

●鹽竈までの小荷物一才以下は同じく二十錢、二才三才以下皆同じ
く、元價百圓に付ても同じく三十錢なり。

●宮古、山田、釜山までの小荷物一才以下は二十五錢、二才以下は
三十錢、三才以下は三十五錢、元價百圓に付六十錢なり。

●八ノ戸までの小荷物一才以下は二十錢、二才以下は二十五錢、三
才以下は三十錢、元價百圓に付四十錢なり。

●函館までの小荷物一才以下は三十錢、二才以下は三十五錢、三才
以下は四十錢、元價百圓に付七十錢なり。

●青森までの小荷物一才以下は三十錢、二才以下は三十五錢、三才
以下は四十錢、元價百圓に付四十錢なり。

●根室、増毛までの小荷物一才以下は五十錢、二才以下は六十五錢
三才以下は八十錢、元價百圓に付壹圓三十錢なり。

○しらぬ火

橘 南 嶽
筑紫の海に出づるしらぬ火は、例年七月
晦日の夜なり、昔より世に名高きものに

て、今も九州の地にては、諸國より此夜は集り來りて見る事なり、京都の人に見ることの少きは、盆後の故なるべし、京より九州に下る人々も多きは皆商人の類なれば、盆前に京都へ歸るやうに上り來り、又下る時も京都にて盆を仕舞ひて後下る故に、八月に入りてやうく九州に下り着く、此故に七月晦日の頃は、上方の人の彼地に止り居る者甚だ少し、予は斯かる奇異の事のみ探らんためばかりに下れる事なれば、盆後早く長崎を立ち出で、雲仙が嶽に登り、夫より島原に出で、城下より舟に乗り、天草に渡り、天草の物象と云へる山の峰にてしらぬ火を見物せり、先づ島原にてしらぬ火見るは何れの地よろしきやと尋ね問ふに、肥後國宇土、八ッ代、松ばせ、の邊の浦々よし、又殊によく見ゆるは天草の島なりと云ふにぞ、然らば天草に渡るべしと、便船尋ねるに、邊土故に便船もなければ、小さき獵船を借りて渡る、此日天氣殊に

- 小樽、釧路までの小荷物一才以下は四十五錢、二才以下は五十錢、三才以下は六十錢。元價百圓に付壹圓十錢なり。
- 土崎、船川、酒田までの小荷物一才以下は三十錢、二才以下は三十五錢、三才以下は四十錢。元價百圓に付八十錢なり。
- 飛島までの小荷物一才以下は三十三錢、二才以下は三十九錢、三才以下は四十四錢。元價百圓に付八十八錢なり。
- 新潟までの小荷物一才以下は二十五錢、二才以下は三十錢、三才以下は三十五錢。元價百圓に付六十錢なり。
- 直江津までの小荷物一才以下は三十錢、二才以下は三十五錢、三才以下は四十錢。元價百圓に付八十錢なり。
- 西部と呼べる地方へ送る小荷物及び元價取は、左の如し。
- 四日市までの小荷物一才以下は十五錢、二才以下は二十錢、三才以下は二十五錢。元價百圓に付二十五錢なり。
- 半田、名護屋までの小荷物は、總て四日市までと同じ。
- 神戸までの小荷物一才以下は二十錢、二才以下は二十五錢、三才以下は三十錢。元價百圓に付三十錢なり。
- 大阪までの小荷物は、總て神戸までと同じ。
- 高知、馬關、尾ノ道までの小荷物一才以下は三十錢、二才以下は

長閑やかにして、海上風靜なれば、四方の詠め殊によし、雲仙が嶽は後ろにあり、向ふ遙に東南に連りて、天草の島青み渡りたり、此海は高山の麓に殊に深く、百五六十尋も立つるとぞ、乗れる船は獵船なれば、斯かる事をよく知り居て語り聞かす、尤も面白かりしは、此船頭今日も鉢といふものを以て魚を取れり、其鉢の形鎗の如く、柄の長さ三間、先は鐵にて作りて三つに割れ、かへり有りて長さ一尺程なり、石突の所に長き綱を付けたり、船頭此鉢を使ふ事妙にして、海上に浮める魚は小さきものといへども、是を突く事鳥さしの鳥をさすが如し、大きな魚の船に遠きは此鉢を投ぐるに、矢を射るよりもたしかなり、今日も鉢をもちて船端に立ち居たりしが、向ふの波間に黒く見ゆるものあるを、やがて件の鉢を投げかけたりしに、其魚高く躍りてのがれ行く、船頭したり顔に、かの綱をたけ長くゆるし還る、船をもあやどりて

- 三十五錢、三才以下は四十錢。元價百圓に付六十錢なり。
- 伏木までの小荷物一才以下は四十錢、二才以下は五十錢、三才以下は六十錢。元價百圓に付八十錢なり。
- 敦賀、釜石までの小荷物は、總て伏見までと同じ。
- 境までの小荷物一才以下は三十六錢、二才以下は四十八錢、三才以下は五十八錢。元價百圓に付七十錢なり。
- 長崎鹿見島までの小荷物一才以下は三十錢、二才以下は四十錢、三才以下は四十五錢。元價百圓に付八十錢なり。
- 大島琉球までの小荷物一才以下は四十錢、二才以下は五十錢、三才以下は六十錢。元價百圓に付壹圓二十錢なり。
- 又郵船會社にて東京市中へ、小荷物を配達する賞錢は左の如し。
- 四才十二貫目未満にて、日本橋區は貳錢。京橋及び神田區は貳錢五厘。麹町、淺草、芝、下谷、深川、本郷區等は四錢。本所、四ッ谷、小石川、赤坂、牛込、麻布區等は五錢五厘。荏原、北豊島、東多摩、南足立、南豊島、葛飾郡等は七錢五厘なり。
- 又郵船會社にて大阪市中へ、小荷物を配達する賞錢は左表の如し。
- 但し表中の、
- 第一區といふは、天満堀川以西堂島及び中之島一圓を指すなり。

其魚に従ひ行き、暫くして静に網を引き寄せたるに、其魚彼鋒のかへりにとどられて、段々船近く寄り来る、船頭鋒の柄を取り上ぐるまゝに、船の中にはね上げたれば、其たけ八九尺餘の魚の、形細くして、口吻恐ろしく、京都にてさよりと云ふ魚に似たり、早魚と云ふものなりとぞ、口吻の長さ二尺六七寸も有らん、末鋭く、鰭の如く、只鰭の角の如く、魚にあるべきものとは見え、かの一角の魚物なりといふも此魚にて信ぜり、餘り珍らしければ、船頭に此口吻ばかり求めたり、肉は油を取るといふ、餘り大魚故に食用には成り難しと云ふ、さて計らざる得物に心慰みて數里の海上も程近きやうに覺えて、はや天草の地方に近づけり、天草の砥石山など云ふ所を右に見なし、三角と云ふ所より山の間に船を入れ行くと、左右七町に過ぎしと見え、水滑く山峙ちて、風景又他に異なり、北へくじけ南へまがりて尋ね入るに、緑に

續く小松の間に藪屋の軒いと静なり、何人の住みけらしとゆかしくも見る、右の方には波打際所廣く、砂子の清き事霜を覆けるが如くなれば、いざや此處にて船暫しと云へば、やがて渚に船さしつけて、磯あらず、船頭云ふは、此濱邊には小さき峭多し、ありたちて取り給へと云ふに、潮は淺し砂は清し、皆々下りて峭見あり、田舎には珍らしからぬ事も、京都に住める身はいと心慰めり、船頭は例の鋒打ちかたげつ、船さし行きしが、程なく二尺に近き鱈一ツ突き得て歸れり、取りあへず料理して煮る、鮮けくして味の美なる事さらにもいはず、や、時移りぬれば船さし出して急ぐに、暮近きに天草の物象と云ふ所に到る、此處は少し民家あり、多くは漁夫なり、此村に上りてしらぬ火見るところの案内を頼みしに、百姓一人よううけがひて、いたく汚れぬ籠一枚携へ、先に立ちて登る、東の海の岸にさし出でたる山あり、高さ七八町もや有

第二區といふは、天満堀川以東、東天満一圓及び東横堀川以西、木更津以東、土佐堀川以南、長堀川以北の一圓を指すなり。
第三區といふは、東横堀川以東上町一圓、木津川以西、本田町南北、安治川の三町目邊、長堀川以南島之内一圓、南北堀江、道頓堀、難波、御藏跡町を指すなり。

區名	十二才以下 廿六才(個)	同上 (個)	八才以下 廿四才(個)	同上 (個)	四才以下 十二才(個)	同上 (個)
第一區	三三	四〇	二五	三〇	一五	二〇
第二區	四〇	四八	三三	三八	三三	二八
第三區	四八	五六	四一	四六	三一	三六

○第十五東海道案内

東海道は、十五國より成る。即ち伊賀、伊勢、志摩、尾張、參河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武蔵、安房、上總、下總、常陸なり。借て本道を通ずる鐵道は、なかく多し、今旅客の便利の爲めに掲ぐれば、即ち東海道鐵道の幹線は、美濃より來つて尾張に入

り、同國に、木曾川、一宮、清洲、名古屋、大高、大府の諸驛あり、參河に、荻谷、安城、岡崎、蒲郡、御油、豊橋の諸驛あり、遠江に、鷲津、舞阪、濱松、中泉、袋井、掛川、堀内、金谷の諸驛あり、駿河に、島田、藤枝、焼津、静岡、江尻、興津、蒲原、岩淵、鈴川、沼津、佐野、御殿場、小山の諸驛あり、相模に、山北、松田、國府津、大磯、平塚、藤澤、大船、戸塚の諸驛あり、武蔵に入つては、程々谷、横濱、神奈川、鶴見、川崎、大森、品川の諸驛ありて、終に新橋に達す。
而して此間に、三條の支線を分ち、第一は、大府武豊間にして、大府より分れ、龜崎、半田を過ぎて武豊に到るもの。第二は、大船横須賀間にして、中間に、鎌倉、逗子の二驛を置くもの。第三は、品川、赤羽間にして、目黒、澁谷、目白、新宿、板橋の五驛あるものなり。
次に東北鐵道は、東京上野より青森に赴くものにして、武蔵に、王子、赤羽、蕨、浦和、大宮の五驛を過ぎ、北へ折れて、又蓮田、久喜、栗橋を経て、下總の一邊に古河驛を設け、終に下野に走る、而して其鐵道を幹線として、分れて支線をなし、本道を経過するもの、大宮、前橋間鐵道あり、其中間に在る停車場中、上尾、桶川、鴻巣、

らん、此あたりにての高山なるが、此峰よろしと筈打ち敷きて座す、真向ふに肥後國ありて、只一望につくす、宇土熊本は少し左に見えたり、右に日奈久、向ふに八代、其間の海上わたり五六里より七八里に過ぎず、南北は入海數十里にして、其限り見えず、案内の人指さして、右なるは鼠島なり、左は大島なり、夫は三つの島、是は幾島と、數々教ゆ、げに海上三里ばかりにいと小さく島々見ゆ、しらぬ火は何れに出づるやと問ふに、島々見ゆるあたりにと云ふ、初の程は八里も遠く、いと物凄き島山なりしが、遅々知らぬ火見物の人々出で来りて、數十人に及ぶ、皆此近國より二日路三日路を來りて見物する人々なり、程なく海の面もや、夕煙引き渡して人顔もさだかならねば、所々松ども明かして、酒など取り出だし、思ひ／＼に小唄浄瑠璃太鼓三味線或は謡狂言など、各藝を盡して戯れ遊ぶ、夜陰の事なれば誰とぞは知れず、

吹上、熊谷、深谷、本庄等の諸驛は、皆武蔵に屬するものなり。水戸鐵道亦東北鐵道の一支線なり、上野の小山驛より分れ、下總の一角を過ぎて、結城驛を置き、直ちに常陸に入りて、川島、下館、岩瀬、福原、笠間、共戸、内原の諸驛を経歴し、水戸に達す。甲武鐵道は、武蔵の新宿驛より發し、八王寺に趣くものにして、中間に、中野、萩窪、境、國分寺、立川、日野等の諸驛ありて、皆武蔵の國內に屬す。關西鐵道は、近江より本道に入りて、伊賀に、和植驛を置き、伊勢關、龜山、川原田驛等を列して其四日市に止まり。龜山より分れるものは、同國に、下ノ庄、一身田等の驛を置き津市に到る。又參宮鐵道は、津市に、關西鐵道の支線と連続して、阿漕、六軒、松坂、田丸等の諸驛を経、宮川の北岸小俣に達するなり。●安房國館山港 一に鏡ヶ浦と云ひ、又菱花灣の雅稱あり、地位を館山灣の東南隅に占め、風靜かに、水深くして、大船巨船をも泊すべく、國內第一の良港たり。館山町は、戸數凡七百、人口四千に餘り、随分盛んなるところ。港上に、二島あり、東に在るものを鷹ノ島と云ひ、西に在るものを沖ノ島と云ふ、兩島の距離凡そ十町ばかり、共に周廻六七町に

殊に諸方より集りたる事なれば遠慮はなし。彼座に登り此處に連なり、隔てなく陸の隔らふ事、有馬但馬など温泉の場、交りの如し、今年は例よりは殘暑強けれど、斯かる海邊の高山に、殊に空はよく晴れたり、小夜風もむろに吹きていと涼しければ、夜の更くるも知らず、はや夜半にもなりしかども知らぬ火の沙汰なし、今年初めて見る人は、今宵は如何なる事ぞ、知らぬ火は出でざるや、但し空言なりやなど、口々に云ふ、予も怪しみに居たりしが、八つ近き頃に、遙か向ふに波を離れて赤色の火一つ見ゆ、暫くして其火左右に別れて三つになるやうに見えしが、夫より追々に出づるほどに、海上わたり四五里ばかりが間に、百千の數を知らず、明らかなるあり幽なるあり、滅ゆるあり燈ゆるあり、高きあり低きあり、誠に其見事にして目を驚かせり、其火の色皆赤くして、提灯の火を遠く望むか如し、たとへば大阪の天神祭を夥し

過ぎず、鷹ノ島の方には、辨天を祀れる社あり、何れも翠松繁茂し、海波に映じて風光頗る好し。此島には、常に蛋婦居り、餘り白からぬ膚ながら、腰もあらはに、ひらりと海波に躍り入り、螺螺、鮑などを捕り來る様、頗る面白し。夏時の一遊、是非とも催さざんばあるべからず、其處で、此處へ到るには、日夜此港より、當國平郡加知山及び相州浦賀等の諸港を経て、東京靈岸島に往復する漁船あり、これに乗りさへすれば、何の造作もなし。●館山公園 は、館山町西南の丘上に在り。南方に、大日岩あり、東邊に、琴平神社あり。大日岩は、其形富士山に似たる巨岩にして、其脚底を穿ちて、大日如來の像に彫りたるを以て名くといふ。參詣人多く、香火絶えず。丘上雜樹の生ひ茂れるまゝにして、天然の風致面白く、眼の下は、萬頃の鏡ヶ浦、いかにも鏡の如く、富士の雪白く、洲の崎の煙淡く、皆眼中に映じ來りて、自ら氣も伸る心地す。●北條町 は、汐入川を隔て、館山町と相接し、亦館山灣に臨む戸數七日餘り、人口五千餘り、なか／＼榮繁なる土地にして、館山灣の海水清潔なれば、夏時の海水浴に適す、海水の靜穩なる爲め、特に婦人には、至極よろし、旅客其細君を伴ふて行くこと可

く集めて見るに異ならず、實に諸國より來り見るもいたづらならず、所の人に問ふに、年によりて多き事も少き事も定まらずとぞ、今年は勝れて多く出でたるも予が幸と云ふべし、廣き海中に出づる事なれば、天草に限らず、肥後地よりも何れの浦にても皆よく見ゆるなり、然れども、如何なる際にも、高山に登る程多く見事に見ゆるとて、此山なども群集せるなり、此夜は此邊の者、海中に龍神の燈明を出だし給ふなりとて、懼れみて、渡海の船を禁ず、獵船といへども此一夜は乗る事なし、過ぎし年肥後の士密に小船に乗りて、彼火の出づる所に到り見るに、只其火前後に遠くありて、我船近くは一つも見えざりしとぞ、予も今宵まのあたり見しかども、如何なる火と云ふ事を知るべからず、昔の人の知らぬ火と名づけ置きしも、尤ものことと覺えし、唐土には桃江の神燈など、是に似たる事もありとぞ、さて夜明くるまで斯くの如

なり。此海水浴者を目的に、近頃立派なる宿屋退々出来る。北條濱通りの木村屋は、海水浴客の便利を謀りて、別亭を濱邊に新築し、先づ一通りの結構を盡せり。此處より田圃道十餘町を過ぎて市街に入れば、吉野庵其他の宿屋數軒ありて、宿賃は、一日上等三十五錢、中二十五錢、並二十錢位なり。北條町には、郡立北條病院并に醫學士の開業せるものもあれば、旅客病氣の時には直ちに診断を受くべき便あり、皆て東京より此地に赴くには、午前十七時靈岸島船松町の河岸より出帆する房州通ひの小蒸氣船に乗らば、其日の正午には、館山に着し、其賃金も四十錢位にてすむ。

●小鷹神社 一名を、下立松原神社と號し、安房郡長尾村大字瀧ノ口西丈ヶ澤に在り、祭神は、天日鷲命にして、神武天皇元年の創建に係ると云ふ、實に古い社なり。社に、願朝寄附の軍刀及び里見義實奉納の軍刀を藏し、又社齋中大鹿の角あり、天日鷲命の孫由布津主命の射給ひしものと云ふ、又同命の所持品なりしと云へる古椀一箇あり、傳説の眞偽は分らねど、好古家は一たび訪ふも可ならん。

●太古の船 安房郡西岬村大字濱田見物の中程に、手斧切船越神社

くにして、旭出づれば火の光漸々に薄く成り行きて、星と共に消滅す、昔し火の前の國火の後の國と名つけられしも故ある事なり、中古の世、火の字をのみて肥前肥後と改められしとぞ、又歌の言葉などにも、知らぬ火の筑紫など書けり、九州に遊ばん人は、必ず此折を考へて行くべき事なり。

○耶馬溪圖卷の記

余嘗て世人の書を読み、其山貌太だ奇峭なるを疑ふ、恐らくは天壤間に在る所に非ずして、番人の一時興到り、其筆墨を鼓舞するのみと、豊の耶馬溪を觀るに及んで、乃ち造物奇怪、畫手も亦寫して到らざる者有るを知れり、歲は戊寅、鎮西に遊び、海を過ぐるに、南彦山を雲際に望み、已に其異なるを覺えたり、既に肥薩隅を經、還つて豊後の隈村に寓す、臘月五日、豊前に入り、一水の北より來るに遇ふ、蓋し源を彦山に發する者、沿ふ

と云へるあり、其社實に、長さ二間餘の木を穿ちて造りたる船あり、其質何の木なるを知らず、蓋し太古の遺物に相違なし、好古家の參考品なり。

●龍伏の松 は、西岬村大字隱見の地角沙見崎の一寒寺の庭前に在り、松の高さは、僅かに八九尺に過ぎざれども、蟠柯偃蹇地上に横臥し、龍蟠虬蟠蒼然として廣がり、殆んど百坪を掩ふ、いかにも怪しき松なり。

●營喜鹽井の鐵泉 館山町大字館山に營喜鐵泉、又豊房村大字神餘に鹽井鐵泉あり、共に慢性消化器病、呼吸機加香兒、腹腔内諸炎骨系諸病、慢性渗出物、水脈腫種其他皮膚の諸病に効ありといふ。

●那古の觀音 は、平郡風原村大字那古の山腹に在り、元正天皇の御宇養老元年の創建にして、行基僧正の開基なりなど、書き掛けては、どうやら縁起説のやうになるが、斯は。坂東三十三所の一に屬するものにして、其構造は、東京淺草觀音の如く、只其規模を小にしたのみ、其經營彫刻等の精緻古雅なるに至つては、一見人をして驚嘆せしむるに足るものあり、加ふるに、西より登る男坂といふ方は、斷崖千尺さながら切り落したるが如く、頂に

て東する數十里、昏黒にして左右の峰巒皆凡にあらざるを覺ゆ、山海相迫る處、山腹を鑿つて道となし、人窓を穿つて明を取る、余炬を買ひ以て入る、闇に遇へば、月の溪水に在り朗然たるを窺ひ見る、民家に宿す、翌大霧なり、霽るを待つて乃ち發す、復た溪に沿ふて東す、愈東すれば愈奇なり、群峰水を挾んで横竦せるは、春筍の矗立するが如く、土の石を載する者、石の土を挾む者、全く石なるもの、全石の破裂して洞穴を成す者、兩石相闕ひ、其一仆れんと欲する者、石數層累なつて夏雲の狀を成す者あり、而して樹は石罅より横生し縱生し倒生して上指し、叢生して石を蔽ひ、石と勢を争ひ、而して之に勝たんと欲するが如し、石又樹中より奮躍して出で、而して石陰皆苔、紫綠相間はる、或は石の半而を没し、或は全面を没す、又樹を掘り石を攻むるが如き者、大抵峰勢石罅、董巨刻意圖の如し、時に窮冬多くは老木

松樹の鬱蒼たるあり、景色なか／＼に好し。
●船形觀音 は、平郡船形村に在り、此處の觀望なか／＼に妙、詩人は遊ばざるべからず。
●高崎鑛泉 は、平郡岩井村大字高崎に屬し、木の根樹の西方山腹より湧出す、皮膚病、痔疾、僂麻質斯等を患ふるもの及び身體薄弱者に特效ありといふ。此地は、所謂高崎灣に瀕し、東京館山間を往復する涼船日々此に寄港するが故に、交通の便最も宜しく、旅舎は、温浴場を以て之れに充るものにして、餘り清潔ではなけれど、其風景の奇絶なる、富士も見ゆれば、天城山も見え、傍ら海水浴も出来る重寶な所なり。
●元名の覇王樹 は、平郡保田村大字元名村に在り、高さ凡一丈有餘、枝莖互に生じて、左右に蔓延ること殆ど一丈に達す、實に珍らしきものなり、旅客一見すべし。
●日本寺 は、鋸山の中腹に在り、山麓の市街保田より登ること凡そ二十町ばかり、此保田は、東京往復の涼船常に碇繋する所に於て、汽船に乗りて此寺へ參らんとするものは、此地より上陸するを便とす。此寺も、行基僧正の創建するところ、何が借て聖武天皇の勅を奉じて造りたる寺のことにて、形勝の奇、觀望の妙、

の葉脱し、槎牙瘦古、倪黃の筆法、而して若枯癭し若渴する者は王叔明なり、古人の筆墨我を欺むかざるなり、柿阪に至り孤店に憩ふ、店は石壁數丈に面し飛泉懸る、仰げば更に高峰あり、是幾十丈なるを知らず、余急に佩ぶる所の酒瓢を釋き、命じて之を煖めしむ、窳突蕭然、會ま、獵師新に豪猪を獲たり、割いて之を煮る、肪脆水の如し、連りに數大白を引き、又往く、溪又數曲、峰勢に隨ふて上下す、或は激雷雪を吹き、或は滄蒼碧を凝らし、峰影之が爲めに、或は碎け或は全し、水山を妬んで其影を亂すが如し、屈智林に至る、溪稍開く、小村あり、一橋を過ぐ、是より溪北を行く、聞く者は益聞く、數十里、古城、正行寺に詣る寺主舎公は余の故人なり、余を待つ事既に久し、余先づ詫げて曰く、君が州の山水大に奇なりと、舎公曰く、更に奇なる者あり、余をして之を目せしめんと、居る事二日、余公と南行す、田腔の間を行

古蹟の多き、進も僅かの文字にては盡されず、今現に公園となり居れば、旅客は、是非遊びに行くべし。
●鴨川町 は、長狭郡に在り、此鴨川町は前原町及び、横渚、貝渚磯の三村を包括したる名なり、戸數千餘、商を爲すもの、漁をなすもの、互に雜居して、市街を造る、此處は、館山町を距ること八里二十四町、鋸山麓の保田村よりは、道を金束に取つて、其間の行程凡そ三里十八町ばかりなり。
●天津町 は、鴨川町を距ること一里二十六町にして、戸數凡そ千二三百、人口五千有餘、夏季は鯉節の製造最も盛んに、秋冬の候は、秋刀魚の漁獲特に多し。
●清澄寺 は、天津町の北方一里二十四町を隔て、清澄山の頂上前額に在り、近頃山腹を開鑿し、迂回の新道を造りたるを以て、若し二三箇所の峻阪を下車せば、天津町より、直ちに腕車を通じ、山門に達すべし、即ち此寺を名づけて、千光山金剛院清澄寺と號す。此寺は、其廣さ一萬五百坪に餘り、松杉鬱蒼として之れを圍み、中にも庭前の巨杉は、周圍四丈八尺に及び、實に見事の物なり、本堂は、銅の瓶、其他宏壯なる堂宇多く、日蓮上人の古蹟もあり、且つ此山は、安房國內第二の高峯にして、其高さ一千二

き仙人殿に至る、嚴石山頂に突立す、舎公指して余に示す、余甚だ賞せず、寺前の逆旅に宿し、燈を挑げて談ず、余曰く、山は水を得ざれば生動せず、石は樹を得ざれば蒼潤ならず、余が馬溪を賞して仙嚴を賞せざる所以、羅漢に至つては人工のみ、然れば馬溪の支裔なり、且馬溪は溪山相迫り、田廬の目を礙ふるなし、而して其路坦夷、真に遊ぶべきなり、然れども二壘の通道となつて過ぐる者慣看す、况んや公等此土に成長す、宜なり其奇を覺えざるや、余は再遊期すべからず、將に復た之を翹り以て之を諦観せんとすと、舎公袂を奮ひ、與に借に早發す、一水を過ぎ北して馬溪の口に出づれば、峰容樹色、忽ち廻り別るゝを覺ゆ、淺より深に入り、平より奇に入る、前數曲の者を折れば、一曲は一曲より奇なり、諸を前遊に比すれば、更に喜ぶべきなり、復た絶壁下の孤店に至る、店主余が面を識り、驚いて曰く、是前に猪を喫うたる

百七十三尺、觀望の好きは言ふまでもなく、鹹に人間以外の仙境の如し、旅客此に登りて、一たび眼眸を放たば姑く浮世の塵事を忘れん。

●誕生寺 是、長狹郡湊村大字小湊の山麓に在り、小湊山誕生寺と號す、日蓮上人誕生の地として世に知られたることは、こゝに説くまでもなし。亦風光明秀の地、天津町より一里九町を隔てり。

●鯛の浦 是、小湊山の東麓に在り、今訛りて、鯛の浦といふ。鯛の浦と訛れるも無理ならず、嘗て日蓮上人、此浦にて漁獵することとを禁じたりとて、土人今に至るまで、固く此禁を守り、曾て漁獵するものなきが、故に近河の鯛多く此に集り來り、天下鯛平など、洒落て遊泳す、されば旅客の之れを觀んと欲し、舟に乗りて其近傍に至るときは、群魚賢くも其機變を聞知り、潑刺唼啣して集り來り、乃ち小魚若しくは鹽魚の類を投じ與ふれば、喜んで争ひ食ふ様、さながら鯉鯉が鯽を争ふ如し、而して其鯛の大なるものに至つては往々四五尺に餘るものありとぞ。

●不動の瀧 是、長狹郡由基村大字下小原に在り、小字を安鞍骨といふ、瀧の高凡そ五丈、幅凡そ四尺、瀧末加茂川に注ぐ。亦是

客なり、何の幹あつてか再び此に來るや、余曰く、山を看んと欲するのみ、曰く、山に何の好看か有る、吾は子の看るを禁ぜざるなりと、遂に溪畔に席して、舎公と瓢を傾け一醉す、山寺に酌す、明くれば雨なり、輻を假り西に還る、山峰雨を得て皆變幻態をなす、或は前に以て一山と爲せるものは、分れて數峰と成り、群仙の肩を駢べて其半身を露はし、萬松の鬣を振ひ雲中に鼓濤するが如し、又二十五菩薩の樂を奏して至るが如し、還つて屈智林に至る、舎公吾が酒の盡くるを慮り、豫め家僮を戒めて、櫛を馬に駄し來らしむ、醉を取り阿保村に宿し、翌寺に歸る、又三日にして辭し去り、海を臨えて東歸し、海雲中より鎮西の山岳を願望すれば、其豊前に屬する者は皆別態あり、彦山は其尤も大なる者、耶馬山脈水理、蓋し皆彦山より發す、故に獨り絶するのみ、余が足跡殆んど海内に半す、弱冠なるとき東遊して妙義山を得、以て無

れ幽閑清涼の地。

●上總國湊町 是、上總の國天羽郡に在りて、人口三千三百餘人あり、一寸盛んなる所なり、金谷を距ること三里。

●金谷神社 是、天羽郡金谷村に在り、鎌尊社とも云ひ俗に釜神とも稱す、祭神は、豐宇氣長賣命にして、日本武尊を配祀し、郷社の一なり。社地海に面し、山を負ひ、風景頗る奇、社背に石窟あり、廣さ大凡一坪ばかり、内に二面の鐵板を藏す、形各々半分の破鏡の如く、相合すれば一圓板となる、通徑五尺、厚さ凡そ四寸傳ふるところに據れば、文明年間海より拾ひ上げしものなりと蓋し古代の鏡か、好古家は一覽すべし。

●田倉の大樟 天羽郡隈村大字田倉は、鹿野山南麓の一村なり、村に一株の老樟あり、其周圍六丈に及ぶ、昔し文祿年間豊臣秀吉此樟を測らしめしに、當時既に五丈八尺ありしと、されば三百年間には僅か二尺を増す、其千古の樟たること、推して知るべし。

●佐貫驛 是、阿部氏の舊城市にして、安房西街道の衝に當り、周准郡貞元驛を距ること二里一町、望浪郡木更津町を距ること四里四町、戸數二百餘、商家軒を接して、稍街衢の態をます。

●人見山 是、周准郡小蘇川の河口に臨み、周西村大字人見に突起

雙となす、今馬溪百里妙義の如き者幾十峰なるを知らず、之を海内第一と云ふ、或は廻ひざるなり、己卯の臘、豪を脱ぎ、爾時山を寫し粉本數紙を得、戯れに意を以て之を接屬し、横長一卷となす、又其由を記し、併せて得る所の詩九首を録す、余が詩文筆拙、其方弗を狀するに足らず、况んや畫をや、後能者董巨倪賁の流の如きもの有りて、其境を踏み、而して之を補成せば、庶幾くは此山水に負かざらん、然れども此山水を目して海内第一となす者は、乃ち頼子成より始まる、圖は舍公の取り去るが爲めにす、備後の故友橋元吉も亦山水を好み、爲めに一本を寫さん事を請ふ、諾して未だ果さず、今茲己丑、母を護して尾道に至り、留まる旬日、乃ち前約を踐む、而して舊圖在らず、胸を胸臆に尋ね、冥想默運し、山情水神の或は來り我を助くるを覺え、遂に能く此を成す、指を屈すれば既に十二年なり、憶ふに當時歸帆の外に、豊山依々

する一峰にして、船人の常に目標とする山なり、石階二百五十餘級直立二百尺、其上に妙見堂あり、眺望頗る妙なり。
●貞元親王の墓 は、周濠部貞元村より周南村に至る郡道の左傍、林の中に在り、碑面に、清和天皇第三皇子貞元親王御廟の十四字を勒し、其兩側に、廟扉開放の狀を彫り、右側の扉底に、延寶六年戊午秋七月十五日の十數字を刻す。又此墓を東南に距ること凡そ二町ばかりにして、一古丘あり、丘上一根の老松あり、周圍二丈二尺餘。此丘は、貞元親王の寵妃阿萬なるもの塚なりといふ。
●神將山 は、南日山と號す、貞元親王の墓を距ること五町強、地は、林を隔て、小絲川の南岸に位し、風光頗る快爽なり、此寺藏するところの什寶中貞元親王の遺物に係るもの數品あり、往時土人、親王の古趾字親王邸の田圃より獲たるところなりと云ふ。此品總て異形、悉く其用を辨ずる能はず、一は名づけて板鈴と云ひ五方形の銅板より成り、一角毎に、同製の鈴を鑄綴す、一は名づけて花鏡と云ひ、楕圓形にして、長徑二寸五分ばかり、半ば赤色を呈し、半ば黒銅を生ぜり、一は方現にして處々缺損し、其形既に全からず、一は徑一寸ばかりの銅物にして、而に、五三の桐の

として相送るが如き者、今猶目中に在るなり、

○身延と久能

清水 渡 臣

四日、天氣よし、廣義父がり出で、眞文、宜風は田中大塚へ歸る、己は自延山へと志す、國秀啓行はなほ付き従へり、十町ばかり西南へ行くに、大門村に弓削神社あり、式内の神にて、式にも八代郡に見え、今も八代郡なるを、古本日本後紀殘篇には、延暦二十四年十二月乙卯、甲斐國巨麻郡弓削社、預宮社、以有靈驗也、とあり、郡さかいいと近き所なれば、時によりて堺のまがへるにや、いふかし、鵜澤より、あし川、笛吹川と落ち合ひて、富士川と名かはる、啓行足を害ひたりといへば、こゝより舟に乗せて、富士川を下さず、己は國秀と從者と、川に沿ひたる崖路を行く、舟路は浪かしく坂路は岩さかし、互に見かはして行く、珍らしくもをかしきふしも、又互に有る

紋を刺すと云ふ、好古家一覽して可なり。
●鹿野山 は、周濠郡草斗村に在り、此山に遊ばんとする人は、午前八時に、東京蘆岸島發の氣船に乗りて、木更津沖に着し（此氣船賃二十五錢）それより解にて、十五六町の遠淺を渡り、其先は人力車にて濱地（水中）敷町を行けば、午前十一時頃までは、木更津町に到着すべく、解賃は三錢、人力車賃は八錢なるを以て、漁船賃共に三十七八錢位にて行るべし、借木更津町には、鳥飼其他の旅店三四軒あれば、就て晝食は終り、ゆる／＼休息の上、鹿野山に向ふも、其里程五里程なれば、徒歩するとも、午後六時までは、山上に着すべし、若し人力車を備へば、其賃金は、綱曳にて七八十錢、山上の宿屋へ、直着に往かるゝなり、此山上の宿屋吻々館といふは、頗る有名にして、宿賃上等壹圓より、下等四十錢まで、別に洋食の賄ひをもなす、其風景の明秀なるは、こゝに説くまでもなし、夏日の避暑には至極の地、脚氣患者の轉地療養にも頗る妙。
●木更津 は、望陀郡の西方木更津灣に枕す、戸數千四百餘、人口七千餘、なか／＼盛んなる町なり、此處へ到るのは、右鹿野山の案内を見よ。

べし、岸の岩根に棹さしあて、早瀬を廻らし行く流れば、岩のはさまを切り開きてくぐり抜けるやうの處あり、舟は早く着きて陸路におくれたり、下山の宿の北に、早川といふ流あり、二瀬に分れたり、一瀬は人の肩を懸みて渡りぬ、渡瀬は流れの烈しさ、たゞへんに物なし、唯白浪のたぎり落つるばかりにて、水の色を見ず、川原の此方彼方、水煙霧合ひて袖を濡す、舟の舳に太き麻細を二筋づ、結び付けて、川向ふに二人づ、立ちて、此細を取り持ちて引き緩むる即ち舟の川下へ下る事一町ばかり、中には舟人二人棹させど、浪の勢強くして棹さしあへず、岸なる四人引き付くるに、激浪の落しかる様、恐ろしとも恐ろし、おのれ此處彼處の旅ありきして、數多の早瀬わたり見しかども、かゝるばかりなるは見し事もなく、渡りし事もなし、市川の縣司へ要の事有りて行きしなりといひしかば、渡守等心のかざりいそしみたるた

に、かくこそはあれ、大方の旅人如何に渡り悩むらんかし、とかくして向の岸へ引きつけぬ、嬉しさいはん方なし、舟路も、此川の落口の水さきに、屏風岩といふありて、この瀬いと恐ろしとぞ、未のさかりに身延山に到り着きぬ、身延は古へは蔓生と書きしなるべし、名は草の名にて、延喜式、新撰字鏡、和名抄などにも見え、生は淺茅生蓬生の生にて、草生の様を云ふ詞なり、此草の葉もて作れば、箆をもやがてみのは云ふなりけり、西行上人の、雨しのぐみのぶの里の柴垣に巢立ちをはじむる篇の聲、とよまれしも、箆と續けられたり、旅屋を定め置きて、先づ羅漢閣に入りて、菩提樹といふ石階三百餘級を登り、白毫樓に詣づ、本堂、祖師堂、位牌堂、いと大きやかなり、本堂に古鐘をかけたたり、文字は無けれど、千歳の古物と見ゆ、位牌堂のかたへの板礎より、通水橋を渡る、光悦の筆して、通水橋と書けるを掲げたり、谷の

●田代の瀧 は、望陀郡龜山村大字四方木の山間に懸る、即ち小櫃川の上流直下して瀑布を成すものなり、四邊清涼、水甚だ清冽、最も避暑によろしく、又秋の紅葉にもよろし。

●姉ヶ崎神社 は、市原郡姉ヶ崎驛の東五町ばかりなる明神岡に在り、なか／＼立派なる社にして、しかも眺望絶佳、亦一遊の價あり。

●飯香岡八幡 は、市原郡八幡宿字飯香岡に鎮す、此社も風景よろしく加ふるに、清見の瀧といふものあり、頗る避暑に好し。

●湯倉鍬泉 は、夷隅郡西畑村大字湯倉に在り、木更津より八里ばかり、其地山谷重疊の間一脈の溪流あり、即ち夷隅川の一水源にして、湯倉川と呼ぶ、川を隔て、斷崖空に聳え、其高さ凡そ四十丈餘、鍬泉は、即ち其崖脚より湧出するものにして、儂麻質斯性の慢性筋關節症、痛風性の同症等を治し、又重病後の回復期に浴して効ありと、宿屋もあれば、避暑旁々入浴すると可なり。

●勝浦町 は、夷隅郡に在り、木更津を距ること十六里九町、戸數四百餘、人口二千餘、随分盛んなるところにして、頗る風景に富みり。

●下總國千葉町 は千葉縣下第一の都邑にして、東京灣の東北隅に在り、戸數三千二百餘、人口二万二千七百餘、なか／＼に盛んなる町にして、名所舊蹟も多し、東京府より、此處まで其里程十里

○七町ありといふ。

●稻毛海水浴 に至らんと欲せば、東京より、本所、堅川、逆井、市川、船橋、馬加、検見川等を経て、千葉縣千葉町に到る、途中千葉より一里ばかり手前(東京より八里餘)、街道の傍ら字稻毛といふところに、海氣療養館といふ海水浴あり、兩國廣小路より、毎日數回往復する千葉通ひの乗合馬車に乗れば、凡そ三時半にして同所に達し、其馬車賃は三十六錢、人力車賃は八九十錢なり、偕て此海氣館は、稻毛大山の緑樹枝をまじへける處に、客室數棟を

設け、温浴あり、清泉あり、土地は海面より高きこと四五尺、前に道を挟みて海を控へ、其濱邊には、磯馴松幾百本ともなく生茂り、一寸舞子の浪の趣あり、館内の客室素より眺望よろしく、實に命の洗濯する好場所なり。其處で、此館一週間の膳料はと言へば上等四圓、中等三圓三十錢、下等二圓五十錢、洋食膳料は、一日六十錢以上壹圓五十錢以下にして、別に席料を取らず、又此處より淺田へ七里、佐倉へ四里、鹿野山へ八里なり。

●佐倉町 は、印旛郡の中央に在り、東京を距ること十三里十八町

底に水曲かに響きて、杉の梢を見下しつ
つ渡る、香積厨といふは庫裏なり、檜皮
茸の軒の大きなる、棟木の太さ、聞きし
にも勝りて目驚かれぬ、今日は日も山の
端に傾けば、歸りて旅屋に宿る、
五日、朝日さし登るに驚かれて、脚結つ
くろひ立ち出で、羅漢閣のかたへより與
院に行く、其道に坊の敷とも多し、鬼子
母神、大黒天、三光堂、餓佛など敷へ盡
しがたし、五重塔殊にうるはし、山路五
十町と云ふ、富士見坂と云ふより富士山
よく見ゆ、奥院なる思初閣に到り着きぬ、
こゝぞ日蓮上人の遺骨を納めし處なる、
草山不可思議の髪も、此堂の柱に結び付
けありといへり、堂の後ろより西谷、あ
りて、七面、詣づべき一の鳥居にいづ、
七面をば遙かに拜み置きて、くれ橋を二
つ渡りて、澤に沿ひ下れば、涅槃塔に到
る、こゝに日常母塔、並び立てり、釋迦
堂の前に狗子石あり、又澤水に渡せる橋
を過れば、該所に到る善學院と云ふあ

餘、千葉町からは四里三十三町なり、戸數千三百餘、人口五千六
百餘、随分盛んなる町なり。
●宗吾靈堂 は、印旛郡公津村大字靈萬に在り、所は人の知る如く
幕府時代の民権家木内宗吾埋葬の地なり。其義を慕ふの人は參詣
せらるべし。
●印旛沼 は、印旛郡を中斷せる大池なり、東西凡そ二里、南北凡
そ七里、周廻十有二里、随分大きなもの、風景佳ならざるにあら
ねど、蘆荻叢生して、平地からは、其景見憎し、高地に登りて見
れば、至極妙なり、特に船を浮べて湖中の景色を賞すること頗る
好し。
●成田山新勝寺 は、世俗成田の不動と稱し、下植生郡成田村に在
り、東京よりは、本所、逆井、市川等を経て、船橋に至り、此處に
て、千葉街道より分れ、左折して成田街道に入り、大和田(萱田)、
井野、上座、白井寺の村を過ぎ、佐倉町に入り、猶本佐倉、酒々井、
中川、伊篠等を経て、成田村に達す、此里程東京より十五里十町、
兩國より成田通ひの乗合馬車ありて、日々二回づつ、發車し、其賃
金は、一里間四錢五厘の割合なり、偕て新勝寺の前に到れば、正
面石段の上に巍々として、寺門の時つあり、之れを仁王門といふ、

り、此左右に、月の寮、竹の寮、柳の寮
などいへるあり、さかく廻りくしてあり
果てぬれば、羅漢閣のかたへに出でたり、
旅屋へかへり物食ひ、よろづ取り認めな
どして、こゝより國秀啓行に別れぬ、二
人は吉田へ歸るなり、分きて國秀は江戸
より伴ひて、今日まで十八日が間伴ひ
慣れたれば、別れがてにす、されど二人
共に、淺間の御社恒例の祭、卯月の初申
にて、今年は十一日なれば、巳の日より
神わざむりとして急げば留め難し、二人と
も、歌多く讀み連ねて別れ惜みあへり、
身延山の惣門を出で、南部を經萬澤に到
る、山に登り澤に下り、富士川のかたそ
ばを傳ひ行く、いと歩み苦し、すべて山
の側陰を、此あたりの里人はをねと云へ
り、をはそのへのをにして、ねは根なる
べし、今宵は萬澤に宿る、
六日、明方より雨降り出でたれど、さら
ぬだに宿屋のわびしきを、ゆき、稀なる
片山里なれば、暫くもためらふべきなら

仁王門石階の下より左すれば、此に新勝寺の本坊あり、殿堂いか
にも壯麗、其後園の如きは、なかく見事。又石階を登りたどこ
ろ、即ち不動堂なり。此處の縁起は、素より説ねど、寺寶中天國
の寶劍ありといふ。人若し此處に參詣せんとせば、乗合馬車にて、
午前六時兩國を出るときは、正午には、成田へ着す、人力車を備
ふとも、先づ一里の割合八錢の上に出でず、但し人力車ならば、
船橋、佐倉等にて懸換ふるを善しとす。
●香取神宮 は、香取郡香取村に在り、極めて風景好きどころ、色
々の名蹟もあり、社の背後に、櫻の馬場とて、多くの櫻もあり、
眼を放てば、十六島の風光さながら番圖の如く、遠く常陸の潮來
の景さへ望中に入り来る。
●銚子港 は、即ち利根川の河口にして、常陸國鹿島郡の羽崎と相
對し、東海岸の要港なり、戸數四千二百餘、人口二万三千餘、其
盛んなる港なることは、人の既に知るところ、風景亦よろし、此
港へ、千葉町からは、二十里十二町、佐倉町からは、十六里十五
町なり。
●結城町 は、結城郡の北隅に位し、戸數千二百餘、人口五千七百
餘、極めて盛んなる町にして、其名所も頗る多し。水戸鐵道の停

ず、明くるを待ちて出で立つ、萬澤の關を
 出づ、これは例の四十八關の一つなり、
 境川を渡れば、駿河國麻原郡なり、
 長嶺のをねを傳ひて完原に到るほどに、
 雨いよ／＼強く風まじりて歩み苦し、山
 藪といふ物にもして急がす、雨しぶき
 入りて、わびしどもわびし、されど人の
 足を借けたれば、奥津の宿に出でぬ、ま
 だ未のかしらなれば、又乗りかへて急が
 す、江尻を経て府中に着きぬ、清見寺菴
 神社なども雨おほひの中たれこめられ
 て、あからめせられず風まじり居たれば、
 徒にのみ過しぬ、今宵は府中に宿る、
 七日、昨日雨烈しかりけるにや、今朝は
 名残なく晴れ渡りたり、府の西、殿機山
 の麓にいつかれす淺間神社に詣づ、其
 莊殿いふばかりなし、延喜年中富士の本
 宮をここに勧請せるなりと云へど、か
 くばかりきらくしきは、東照大神のこ
 こにははしましたるよりの事ならんか
 し、うらの方に古鐘あり、嘉暦の字はの

車場は、市街の南六町ばかりの地に在り、是より四哩十九鎖を隔
 て、下野國小山停車場に達して東北鐵道に連絡し、水戸に赴くも
 のは、二哩二十九鎖を走りて、常陸の川島停車場に至る。
 ●累塚は、岡田郡大花羽村大字羽生の法藏寺に在り、寺門を入り
 て右側に、百姓與右衛門歴世の墳墓累々として併立するが、其中
 歸心理屋性貞女承貞二癸巳天八月十一日と鑽するもの、即ち累
 の墓なり、執念深き累のことは、既に演劇に於て昔々承知の筈、
 好事の人は、往て訪ふとも、どうともなされ。
 ●本多重次の墓、墓の序に記せば、此勇者の墓は、北相馬郡井野村
 大字井野の寺といへる地に在り、一小丘にして、松樹茂生す、其
 中程の芝地即ち墓所なりといふ。
 ●常陸國筑波山は、富士と相對する關東屈指の名山にして、筑波
 郡に屬し、麓は、眞壁、新治の二郡に跨がり、峯尖二つに分れて、
 西を男體、東を女體と云ふ、遠く二峰を望めば、殆んど馬車の相
 双べるが如し、此靈山に登らんとするには、小山驛より、水戸鐵
 道の岩瀬停車場に到り、同所より眞壁まで人力車を雇ひ、夫より
 案内者を雇ひて徒歩登山すべし、小山より岩瀬まで下等流車賃二
 十二錢(東京より岩瀬まで八十錢)、岩瀬より眞壁まで凡そ二里半、

かに見ゆ、銘もありて文字多く見れども、
 ちび消えて讀み難し、燒津神社へも詣で
 まほしかれど、三里の上も横へ入らざれ
 ば到りがたしと聞けば、もだしぬ、久能
 山へと志す、府の東南一筋の松原うるは
 しく並みたてなぞ久能山への大路なりけ
 る、三里には近きなるべし、有度濱のあ
 たり、海路はるかに見渡されて、伊豆の
 岬、石廊のはなわより長く島めきて霞み
 たり、濱路の松原一里ばかり過ぎて久能
 山に到る、別當徳音院に就きて案内の人
 を請ふ、青侍一人出で來るに伴ひて、
 石坂十八町を登る、左右に折れ登るに、
 石垣いと嚴かなり、登りはていいかめし
 き門あり、關屋めきて儀仗事々しく飾り
 立て、守人數多居なみたり、青侍事を
 傳へて己が名を呼ぶ、さて仔細なし通り
 ねといふを待ちて、又青侍に具して石
 坂を登ること五町にして、山門に到る、
 こゝより麓靴をぬき素足にて宮居を拜み
 奉る、東照大神の御骸を葬り奉りし

人力車賃は二十五錢内外にして、眞壁には、龜屋外二三の宿屋あ
 り、先づ眞壁より發足し、平原を辿り行くこと南一里餘にして羽
 鳥村あり、此處より道は次第々々に登り、二十五町にして山村に
 達し、又五六町にして、藥師堂の傍に出づ、此邊よりは、道深林
 の中に在りて、念々峻しくなれど、行くに隨つて眼界忽ち開け、
 仰ぎ觀れば、男體の峰は、頭上に聳え、願れば、葦穂、加波の二
 山は足下より起りて、筑波と相對峙し、其絶景何とも云ひやうな
 し猶登ること數町にして、石の華表あり、絶頂男體山まで二十五
 町といふ、既にして男體山の頂に達すれば、筑波神社あり、男體
 の社といふ。是れより社内を下り、鐵の鎖を便として、九折の危
 道をとどり、御幸の原を過ぎ、又登ること半里にして女體山に到
 る、こゝにも女體の社あり、其峻阻にして苦しきだけ、夫だけ風
 景の眺望好きは、言ふまでもなし。是より下り道は、益々峻しく、
 途中北斗石、大黒石、雷神の窟等の傍を過ぎ、戻り岩、歡喜天
 の社等を過ぎり、二十餘町にして麓に達す、眞壁より女體山まで
 三里ありとぞ、元來此山に登るは、白井筑波町よりするを本町と
 す、此本道は、さまで急峻ならずといふ。
 ●筑波町は、筑波山の半腹に在り、宿屋もあれば、商家もあり、

所にて、寶塔、拜殿、廻廊、神庫、其外
 すべて目も輝やくばかりなり、こゝにて
 思へば、府の邊間の御社のきら／＼しか
 りしは、物にもならざりけり、いとかし
 こけれど、心の中に思ひつゝいけるる、
 かしこきや久能山松の嵐まで静けき
 御代を空に知らずる、

拜み果て、先の門より出で、石阪を下り
 果てぬ、こゝより一里ばかり行きて、村
 松村に久能寺と云ふあり、かの久能山は
 古く大悲者の立たせ給へる聖地なりし
 を、東照大神の御骸を葬め奉りし折、か
 の大悲者をこゝに移しす奉りたりと
 ぞ、此ほど開帳とて庭参りの人つとふ頃
 なりければ、いと賑はし、石阪五六町登
 りて見かへれば、見る目いとをかしき處
 なり、されど龍華寺には劣りたり、龍
 華寺と云ふは久能寺の隣りにて、小寺に
 はあれど、庭の様をかしく、鳳尾蕉の大
 きなる幾本か有りて、霸王樹と云ふ庭樹
 の一本にて廻り七間ばかりあるが、枝と

もに杖つかせたるあり、すがた枝ざしな
 つかしげなき物から、斯かるばかり大き
 やかなるはいと珍らし、松もふりたるあ
 り、後ろの岡に登りて見渡せば、近くは
 三保の松原さし出で、こなたさまに入江
 たへて、清水の淺にぎはし、薩埵七難
 のはなわさし出でたり、遠くは足高ふた
 と箱根の峰に連なりて、雲より上に不二
 の嶺高く聳えたり、伊豆は又遙に隔りて
 遙に島なせり、三保の入海見やらんに、
 こゝに勝る處あらじかし、こゝの十二景
 といふは、富士泰岳、三保長洲、田子古
 濱、清見窟、澳津釣船、清水清嵐、樹
 山返照、久能晚鐘、村松落馬、矢部夜雨、
 南方曉色、東海月花、などことごとくし
 く版にえりて、堂の前に掲げたり、清水
 の濱へありて、小舟に棹さして、入江
 のおもて二十町ばかりを渡れば、三保の
 島居ありて、千本の松生ひ茂れる中に、
 一筋の道しるくて、十三四丁往けば御社
 に到る、大宮司は圖書頭とていと古き家

其繁華なる、山間の僻村に似ず。

●震浦 は、一に香澄浦に作る、信太、河内、新治、行方の四郡及
 び下總の香取郡に跨れる大湖にして、東西七里十町、南北六里三
 十三町、周廻三十四里十七町、西南には富士、西北には日光山、
 筑波の峰は、倒さまに其翠を醸す、山水の風光妙又奇。

●浮島 は、震浦の一島にして、其周廻三里二十四町、浮島村と稱
 して戸數二百餘、人口千二百餘あり、風光の美なるはいふだけ野
 暮、眞珠此島に産し、其收穫を以て業となすものありとぞ。

●土浦町 は、新治郡の南境、震浦の西岸に在り、戸數千九百餘、
 人口一萬二百餘にして、なか／＼盛んなる町なり。

●潮來町 は、行方郡の南部に偏し、震浦の東岸に位す、潮來出島
 と唄にもあるところ、風景も好し、土地も繁華なり。

●唐島神社 は、唐島町大字宮中に鎮する社なり、種々の名所舊蹟
 ありて、狂者引の案内を借らざば、迎も審しきことは分らず、其
 中に、特に名商く人の知れる要石は、本社を東南に距ること一町
 餘の處に在り、石の頭凡そ二尺ばかり出で居り、其頂に回きと
 ころあり、唐島明神、地中の大魚に、此石を釘し、自由に動かさ
 ぬものなりといふ、何が借て此石神籠を以て嚴しく圍みあれば、

どうしても有難く見ゆ。

●大洗海水浴 は、常陸にて名高き海水浴場にして、水戸を距ること
 と東へ三里、東茨城郡磯濱村の海濱にあり、此地へ赴かんとする
 には、水戸上市三ノ丸杉山通りの海岸より、那珂川通ひの立舟に
 搭じ、那珂川を下り、那珂川港の對岸字祝町に上陸し、此處より
 二十町の海濱を歩みて大洗に到るを善しとす、水戸より祝町まで
 一艘借切の船賃三十錢、乗合四錢五厘、水路三里あれども、順風
 の時に、僅か一時間餘にして達することあり、其の景色は素よ
 り好く、加ふるに此處は鮑の名物にして品多し、宿屋兼料理屋は
 魚來庵、金波樓、小林、梓屋等の數軒にして、魚來庵定めの宿賃
 は、並二十五錢なり、此近邊名所もあれば、浴客時に遊覽するこ
 と可なり。歸路は、途を磯濱村の方に取り、水戸下市へ出で、停
 車場に達すべし、其途中は、二三の民家あるのみにて不便なれば、
 足弱の人は、磯濱にて人車を雇ふ方宜しからん、但し水戸まで車
 賃三十五錢、二時間にして達す。

●水戸市 は、誰れも知る繁華のところにして、東京府より二十九
 里十八町を隔てり。此市の中央上市及び下市の間に、水戸城趾あ
 り。

なり、この一村すべて大宮司の知る處なりけり、御社いとふりて神々ど、大木の楠五本有るが中に、老ひ朽ちたるにひこばへしたるを、神木とてませ結び廻したり、此御社の前を南へ松原の中丸町ばかり行きて、海べたに小さき石の祠あり、磯田社といへり、羽衣の松は老ひ朽ちて、其かたに植え置ける松もいと神さびたり、享和三年駿河の大城守らせおはす牧野成保ぬしの建てられし碑あり、辭は龜山の君の博士中島漁といへるが書きたるなり、もと來し道を歸りて又小舟に乗り、清水の湊へ着き、又此舟にて巴川を溯り、江尻の宿に到れり、清見が關の跡は清見寺の門前なりとかや、守り捨てし清見が關は諸人の言の葉とむる跡となりけり、寺に入りてかたへ見ありく、古鐘いとくめでたし、正和三年の銘あり、字いと大きく陽文にして古くみやびたり、書はためたし、摺らまほしかりしを日

●常盤公園 は、日本三公園の一に數へられ、水戸市の西南二十町字神崎に在り（東京より水戸まで下等瀧車賃一圓八錢）、停車場より人力車賃八錢を投ずれば、直に公園内に至る。此公園は、舊借樂園のありし所に於て、梅樹多く、又土地高所に在れば、風景も極めて、妙なり。宿屋は、上市泉町の鈴木屋、翹屋等を上等とし、料理屋は、同町坂本屋を最とす、鈴木屋の宿賃は一泊三十錢以上、停車場より同家までの車賃五錢なり。

●武藏國東京市 は、皇城の在る地、日本の首都なり、十五區を有し、總てのもの皆あらざるなく、此地に旅行する人は、瀧車、瀧船、其好みに從ふて自由なり、今こゝに委しく説くの要なし。宿屋は、大約三十錢以上の一泊料。長く滞在して諸方見物せんとするものは、下宿屋に泊るを勘定とす。

●宮城 は、翹町區の中央に在り、即ち元の江戸の大城にして、周廻凡そ二里、二重橋は、其正門にして、一は石を以て疊み、一は鐵を以て築く、石疊を隔て正殿、豐明殿等の費を望み、其左に舊書院櫓の聳立するを觀、堤上には、古松枝を交へ、千古の景色滴らんとす、仰ぎ見るもいと畏し。

●日枝神社 は、翹町區永田町二丁目に在り、之れを星ヶ岡公園と

暮れかゝりぬれば、徒らに門を出づ、口借し、奥津の宿に枕とる、

○寢覺の里

貝原益軒

上松の民家八十ばかり、此邊の景ここにすぐれたり、町より少し行きて、諏訪大明神の鳥居あり、それよりさき寢覺の茶屋あり、上松の町より此茶屋まで十四五町あり、半里には近し、茶屋より脇、二町程西へ行きて臨川寺と云ふ禪寺あり、其のうしろに浦島が釣せし寢覺の床あり寺より見ゆる岩間を傳ひて寢覺の床に下る道あり、其道はなはださかし、寢覺の床は木曾川の際にあり、大なる岩なり、岩の横十間、長さ四十間ばかりあり、其の高き所に辨財天の小さき社あり、其一段低き石の上平かなる所、とりわきて寢覺の床といふ、其大岩の岡のごとくなるもの、幾許といふことを知らず、其上平かなり、東の方は河原の如くにて、大石あり、水なし、西は木曾川流る、寢覺の床

なし、老樹鬱茂し、光景幽雅なり。

●靖國神社 は、翹町區九段坂の上富士見町三丁目に在り、俗に招魂社といふ、遊就館ありて武器を陳列し、又兵部太輔大村益次郎の銅像を建てあり、庭園清潔、養して其處ら遊覽すべし。

●西本願寺 は、京橋區築地四丁目に在りて、築地門跡と稱す、信心の人は參詣すべし。

●兩國橋 は、日本橋區吉川町より本所區元町に架するものなり、其北は柳橋と云へる狹斜の地、其處らの繁昌は言ふまでもなく、夏は納涼にて、煙火に、玉屋々々の聲賑がし。

●上野公園 は、下谷區上野三橋町の北に在り、新橋停車場から鐵道馬車賃六錢にて行くことを得、こゝには、清水觀音堂、大佛、鐘樓、五重の塔、東照宮、寛永寺、兩大師、徳川氏の靈廟及び博物館、美術學校、動物園其他種々あり、不忍の池を眼下に見あるし、景色もよければ、參詣し、遊觀する物も多く、櫻多きが中に、名高き秋色櫻もあり、實に遊覽するに好きどころなり。

●東本願寺 は、淺草區松清町に在り、上野より馬車にて行くことを得べし。

●淺草公園 は、淺草區廣小路に在りて、即ち淺草寺の境内なり、

の大岩は、西の方木曾川に臨みて、其石岸屏風を立てたるが如し、向ひにも大岩あり、兩岸の間、水の幅二間、或は三間、瀨ありて流の如くみなぎり流る、大河かくの如く狭く流る、故、深きこと測りがたし、其兩岸の狭き所、長さ五十間ばかりあり、水の上の落口の岩を、上臈岩といふ、河中に畑石とて一つの石あり、川向ひの大岩の上に三つの穴あり、一つの大なるを大釜と云ひ、二つの小なきを小釜と云ふ、皆空に向へり、むかひに屏風岩とて、屏風を立てたる如くなる岩あり、向ひの大岩の下の端の巖とて、墨の如くなる岩あり、又烏帽子岩とて、墨しに似たる岩あり、其前に、川のこなたに平岩あり、平岩の上に黒岩あり、其黒岩を象岩と云ふ、川向ひに岩山あり、其黒岩に檜、樅、梅、松などしげりてうるはし、および此地は、他所のすぐれたる風景にも越えて奇妙なる風景なり、いくしく潔きこと心にしるしがたく詞にも

新橋停車場から鐵道馬車賃八錢、上野からは二錢にて行る、園内に淺草寺觀音堂、淺草神社、五層塔などあり、其西部には、劇場、見せ物、茶店、楊弓店、飲食店等、何でも御座れ、ならび、其賑かなること、實にうるさき計りなり。子供つれたる旅客は、是非とも遊覽すべし。

●吾妻橋 は、淺草區花川戸より、本所區中の郷に架する鐵橋にして、其工費十三万六千八百四十二圓なりと、珍らしき立派な橋なり。

●待乳山 は、本名金龍山、淺草區今戸橋の南詰、聖天町に在り、前に隅田川、左右に富士筑波の山、近く遠く觀望するの趣なかなか妙。

●新吉原 は、淺草公園の北に在りて、京町、揚屋町、角町、江戸町、仲ノ町等の數町に分る、大小妓樓の數八十餘軒、娼妓千六百餘人、實に盛んなる狹斜の地にして、是れ江戸名物の一ツ、鼻下長旅客は、其路費をサラバンにして往くべしと案内せず。

●龜戸神社 は、本所區の東端龜戸町に在り、藤の名所なり、參詣して遊覽すべし。

●富岡八幡神社 は、本所區富ヶ岡門前町に在り、社地廣く、梅櫻

述べがたし、浦島が事、日本紀、雄略帝紀、并に扶桑略記に見えたり、此地に至りしことは見えず、又昔し木曾の寢蓑の床にみかへりの翁といふものありて、長生の藥を與へしことを、みかへりといふ世俗の謠にも作れり、又飛雲といふ謠に、木曾山中にて三熊野の山伏、怪しきものにあたりし事を作れり、たしかなる書に見えざれば、二つながら信じがたし。

○長崎

長 赤 水

六日、辰の刻より酒を出だし、沖に出づれば順風なり、周防灘三十四里を過ぎて、夜半に豊前の田浦に着く、翌朝五つ時より押し出だす、左は豊前、右は長門、相距る事僅に五六町、左の海岸に早戸茂明神あり、毎年十二月三十日夜半、社人海中に入りて和布を刈るゆゑ、めかりの神事と云ふ、一里ほど行きて右は下の關なり、前に岩瀧島あり、近年小倉侯の士宮本伊織、長門侯の士佐々木岩柳、兩雄武藝を

數百株あり、一箇の公園なり。

●芭蕉庵の舊趾 は、本所區西元町萬年橋北詰なる米倉一平と云へる米商の宅地に在り、「古池や蛙飛込む水の音」の古池の形今尙存せり、俳客は一訪すべし。

●金比羅神社 は、虎ノ門外芝區翠平町に在り。

●愛宕神社 は、芝區愛宕町の愛宕山に在り、此山に登れば、海を見渡し、市中の大半を觀るを得べく、風景好きどころなり。

●芝公園 は、芝區愛宕神社の南に在り、即ち増上寺の境内にして、園内には、増上寺、金地院、東照宮、徳川氏靈廟、能樂堂、紅葉館、彌生館、東京府勸工場等あり、其東南隅の一丘五層塔のある近傍を圓山と稱す、此圓山眺望よろしく、園中松杉鬱蒼、景致幽雅なり。

●泉岳寺 は、芝區高輪車町に在り、人も知るなる赤穂四十七士の墓あり、其義を慕ふ人は參詣すべし。

●後樂園 は、小石川區小石川町東京砲兵工廠の構内に在り、其廣さ方六町餘、老樹蒼鬱として、さながら深山幽谷に入るの思ひあり、又井ノ頭池より水を引きて、泉水を作り、瀑布を設く、實に東京中林泉の冠たり。

争ひ、佐々木が殺されし處、左は内裏と云ふ、昔し平家此處を行宮とす、其前に日久島あり、島の邊の石の上に、與次兵衛なる者の石碑あり、昔し豊太閤朝鮮陣の時、此處を渡り給ふに、御船洲に乗り甚だ危かりし故、船頭與次兵衛自害せし處と云ふ、暫しの間に小倉に着く、十月七日、船より上る、豊前小倉城主小笠原侯十五万石、城は海岸にあり、城櫓高大にして殿守ともいふべし、橋の邊船頭與次兵衛が家に宿る、夜に入りて商人ども土産の毛織、帯、袴地等、持ち來る、皆下品なり、明石縮とて亭主又兵衛方より、托の端切とも見せけり、皆上品なり、地細密にて唐さんどめの如し、其高價、紗縮、縞子にも過ぎたり、袴地にて三拾目位は至極の上品なり、平家蟹の枯れたるを賣る人あり、余五絶を作る、

夢中在帝所、二十四年榮、
豊意介虫小、稻遺平氏名、

八日、未明に出づ、城の隙を通り、一里半ばかり行けば豊筑の境なり、黒崎、上之原、茶屋三春、などを過ぎ、木屋の瀬にて我食す、此邊の畑に黄櫨あり、漆に似て紅葉す、實は蠟になる、品々多く是あり、九州の蠟燭は皆黄櫨の實なりと云ふ、石炭あり、土中より掘り鑿ちて採り、焼きて軽くして用ゆ、二擔三四十文なり、直方川あり、蘆屋の濱へ四里、舟通用宜しき故に魚多くあり、さとしと云ふ魚は鱒に似たり、やうざは常陸にていなたといふ魚なり、能方村に多賀明神社領百石、大社なり、又双林院とて福岡侯の菩提所あり、此處は黒田家先公の舊蹟なりと云ふ、飯塚に宿る

八日、雨降る、冷水峠を越ゆ、風烈しく行く人甚だ苦しむ、山家驛にて饒し、四五人相伴ひて宰府へ廻る、三本松の近道を小川に傍ふて上る、右の方に嶺然たるは法淵山、古歌によむ籠山、筑前第一

●御殿山 は、品川町の内、北品川宿に屬し、鐵道線路の西側に當れる岡にして、櫻花の名所なり。

●浦田梅林 は、荏原郡浦田村大字北浦田なる國道の西傍に在り、梅花の名所なり。

●飛鳥山 は、北豊島郡王子神社より瀧ノ川を隔て、南に位する岡の名にして、櫻花の名所、一箇の公園なり、其處らの景色極めて幽雅、瀧ノ川の清流夏も涼しく、西岸の楓葉、秋に紅に、眺望もよろしく、實に北部第一の勝地、上野より汽車にて行る。

●隅田川 は、東京市の東を流る、川、此川の東岸二里の長堤を向島と呼び、享保年間數千の櫻樹を移植せし以來、櫻の名所として其名特にあらはれ、春は花にて、都人群集す、此所に沿ふて、三國神社あり、其角が『夕立や田をみめぐりの神ならば』の句を刻したる碑あり、又牛の御前、長命寺、秋葉神社、蓮花寺、百花園、木母寺の梅若塚など訪ふべきところ多し。

●堀切菖蒲園 は、南葛飾郡南綾瀬村大字堀切村に在り、花菖蒲紫白の色なく、美しく。

●龜井戸梅林 は、龜井神社の東三町ばかり、南葛飾郡龜井戸村に在り、臥龍梅と稱する古木ありて世に名高し。

●與野公園 は、北足立郡浦和町の西北一里餘、川越別路の途中與野町に在り、老少の櫻樹ありて美し。

●大宮公園 は、浦和町の北一里半大宮町の内停車場を距る東北十町のところの在り、此處は即ち氷川神社の境内にして、古樹老杉鬱然として繁茂し、東北隅は、松樹林を爲して、景致自ら閑雅、なか／＼好き遊び場所なり、園内料理屋ありて、旅舎を兼ね、其中萬松樓は、館内に鑛泉温浴場を設く、旅客一浴して可なり。

●小金井の櫻花 北多摩郡小金井村、多摩川上水の兩岸凡そ一里の間數百株の櫻花を栽る、花は流水を挾みて、なか／＼に見事なり。此處に到らんとするものは、甲武鐵道に據り、境停車場より車を下り、北に歩すること半里にして、多摩川上水の岸に達す、此處より西小川村まで五十七町の間兩岸悉く櫻花、見る目も眩し。

●御嶽山 此山避暑に強地の地なりとて、近頃は外國人多く好むで往くやうになれり、道程は甲武鐵道の、立川停車場より青梅宿まで五里餘、人力車一人良の賃金六十錢、道は、多摩川の南岸に沿ひ行くこと三里にして羽村に達す、此村は、即ち多摩川上水の分るゝところにして、水門は石を以て疊み、水道の兩岸には、奇岩

の高山あり、権現は天狗にて靈驗新かなる故、國中尊信して繁昌す、寺院二十五坊、麓より一里上ると云ふ、山家より二里ばかりにて暮方に幸府に至る、天満宮の境内古木茂りて神さびたり、石鳥居、石橋、二王門、別殿、東西の法華堂、藥師堂、淨殿、中門、回廊、本社、神樂堂、鐘樓等あり、後に數多の末社あり、本社の前、左に飛び梅、右に一夜の松、皆柵を以て圍めり、御詠歌によりて生じたる故に追松と云ふ、飛び梅と云ふ、折る人つらしと惜しまれしものなり、池は心の字の形なりとて、島ありて三つの橋を渡る、池邊に老楠數株あり、其中にて二三本甚だ大木にて、攝州天王寺にあるよりも大なり、池中に、雁、鴨、をしどり、群集し、鯉、鮒、游泳して人の茫然を待つに似たり、社寺は即ち古への安樂寺なり、延喜十九年藤原仲文建立、今の齋師寺は昔しの講堂なり、近代延壽王院と號し、神宮寺と稱すと云ふ、祭禮は二八月

立ならびて、恰も小赤壁の趣を備へたり、羽村より青梅まで二里餘、又青梅より御嶽村まで二里の間は、上り阪にて、車を通せざるが中にも、山に近づきては道愈々峻しく、漸やくにして御嶽神社に近づけば、兩側に舊御師の家二十軒ばかり並び居り、今は此家通常の宿屋の如く客を泊め、其取扱ひも深切丁寧なり、借て此社の境内は、古松老杉生ひ生りて、風いと涼しく、土地は海面より高きこと三千八百尺もあれば、盛夏と雖も、なかく涼し。近傍には、瀧もあり、遊覽すべき所も少なからず。

●横濱市 日本開港場の第一に位し、其盛大繁華なることは、こゝに案内するまでもなし、新橋停車場より瀛車にて達す。

●杉田の梅林 は、久良岐郡に在り、前は海、後は山、山水の風光美なるが上、月下美人の咲き匂ふところ、自らは別乾坤。

●金澤八景 金澤は、横濱を西南に距ること凡そ四里餘、久良岐郡の南端に在り、此地は、東南に海を擁して、夏島、烏帽子島は、灣の入口に點在し、後には連峰を繞らして、山水の眺め兩つながら備はり、其風色支那杭州の西湖に似たりとて、明の心越禪師曾て八勝を撰びて詩賦を殘し、吉田の兼好法師も亦此地に住みて、其風景を愛したりといふ鑑定つきのところなり。其八景といふは、

とも、二十三日より二十八日までなり、梅の守は梅の種に經文を書きたるものなり、靈驗新かなる故に人はなほだ尊信す、六匁づゝにて之を受くる、凡そ宿願ある人は連歌の會を興行して神を慰め奉る、萬酌は金五兩、五十酌は三兩、十六酌は一分なり、別當社僧會集して懷紙を認め、神前へも奉納し、施主へも遺す、是れ即ち大神樂の代りなり、六月十七日かききの連歌あり、連歌師はなでつけ髪なり、

社領は御朱印千石、後筑の水田にあり、福岡侯より給地三千石、幸府にて寄附す、合せて四千石なり、東叡法親王に屬して僧坊五十六院、三大宮司、八禰宜あり、座主を大島居信觀といふ、千石を領し古來より菅原氏にて妻帯なりしが、前の大島居より清僧になり、弟子京都より來り嗣ぐ、今の信觀は高辻黃門の二男なり、次に小島居某も菅原氏にて妻帯なり、檢校、勾當、萬城院、とて三僧有りて、修

洲崎の晴嵐、瀨戸の秋月、小泉の夜雨、乙艦の歸帆、稱名寺の晚鐘、平瀨の落雁、内川の暮雪、野島の夕照等なり。此八景を一眸の中に收むるの地は、能見堂を以て第一とす、能見堂は、稱名寺より西北に當れる山上に在りて禪宗の草庵なり。昔し巨勢金岡が、此景を寫さんとて、其天然の風光到底筆にする能はざるに失望して筆を投じたるより、此山を名づけて筆棄山といふとぞ、實に其絶景、逆も筆の盡せる所にあらずと免れて余景は止むべし、借て此山を下ること數町にして稱名寺に到る、此處より町屋村を過ぎて洲先に到り、行くこと數十歩にして、瀨戸の斷橋を渡れば、左に料理店東屋、千代本の二軒あり、二軒とも眺望よろしく、鮮魚自慢にて、甘く喰せるところなり。此處に遊ばんとするものは、横濱より根岸、杉田、富岡等を経て洲崎に出べし、併し旅客の都合に依りては、瀛車にて鎌倉に到り、同所より朝比奈の切通しを経て、此地に出る方便利ならん、鎌倉より金澤までの里程は二里十町其途中切通しの嶺凡そ二十町の間を徒歩すれば、其他は入車通す、鎌倉よりの人車賃一人乗二十五錢なり、又横濱より金澤に到らんとするには、何分人車賃の高きところとて、六七十錢ばかりも取るゝなり。

造一切の寺務を主る、皆菅原氏にて妻帯なり、三大宮司は、小野伊勢守、同但馬守、同加賀守、是も本姓は菅原氏なり、祭禮のことに主る、安樂寺の座主は、安性院、子院十七坊別れてあるなり、半里程西の方に姥宮にて御旅所あり、祭禮の時神輿ここに到る、昔麴屋の婆々にて菅家に思ある人の蹟なりといふ、菅家の御在所は内山村の中に、聖主として今に礎など有りといふ、幸府より一里ばかり東の方なり、観音寺、戒壇院、國分寺、皆幸府の村の中にあり、都府樓の跡、大門の礎、徑六尺、観音寺の西にありといふ、晩き故に尋ねず、幸府、鎮西名のみにて、今は淋しき山里なり、幸府より一里ほど西南に天拜山あり、さのみの高山にはあらず、古木生ひ茂りてすさまじく見ゆ、山中に瀑布あり、菅家の祈誓し給ふ處なり、道隔りければ遙に拜して過ぐ、幸府にて馬を借り、二日市より春田に出で、田代に着く、時は夜半なり、

●相模逗子海水浴 逗子は、横須賀支線に於る鎌倉より第二の停車場にして、新橋より下等涼車賃三十五銭、停車場より西に向い行くこと數町にして其海濱に出れば、前面に近く江の島を望み、伊豆の陸地は、大島と連なりて、一大灣形をなし、其風光の美、をさく江の島鎌倉にも劣らず、海水浴の宿屋は、養神亭、日影の茶屋等にして、何れも海岸眺望の好き地を撰びて建築し、傍ら料理を業として客を待つ、養神亭一日の宿料は二十五銭以上五十銭までにして、之れを他の海水浴場に比すれば、其價も亦稍廉なり、逗子停車場より、此海水浴場までの人車賃十二銭なり。なかく好い處、行くべし、行くべし。
●鎌倉 是は、其廣さ東西二里、南北一里餘、雪ノ下、大町、小町、扇ヶ谷等十三ヶ村を亘れる一郷の總稱にして、此處の案内するはなかくの大仕事、依て左に其大畧を擧ぐ、細かなことは、猛者引に聞き給へ。
鶴ヶ岡八幡宮 東京より此宮へ參詣せんとするものは、新橋より涼車に乗り、大船にて更に横須賀行の列車に乗換れば、第一着の停車場は、即ち鎌倉にして、此停車場は八幡宮二三島居の間在るを以て、徒歩三四町にして、八幡宮本社に到るを得べし

九日、神崎にて晝食す、佐賀城下を過ぐ、鍋島侯三十五万石、昔は龍造寺城と云ふ、町より十丁餘り南にありて見ることを得ず、此邊より西方に高山あり、先づ西南に多羅岳、南に温泉岳、東南には柳川の山、東に久留米の諸山、西南に川上山、北に阿彌岳、筑前の千部山等連れり、其日は峰々に雪少し有りて風寒し、牛津に宿る、十日、此邊路傍の山野に山梔子あり、塚崎にて晝飯す、温泉あり、山島多く櫻栂、山茶花あり、山茶花は皆白花なり、實は油を採る、此處にては小椿と云ふ、嬉野に宿る、温泉あり、十一日、三の瀬村の堀に十圓の楠あり、道中一の大木なり、園木にて晝飯す、是より時津へ舟行七里、船を雇ふ、六反帆にて水主五人なり、此處は海口より大村まで十里餘の大海、迫門は僅に一二町ばかりにて、島原の早崎、阿波の鴨門、共に日本三所の迫門なりとぞ、折節海豚

し(新橋より鎌倉まで、下等涼車賃三十三銭)。靜御前がしづやしづと歌ひし若宮の社段、公曉が實朝を斬殺したる石階の遺跡、吊古の物甚だ多し。
鎌倉宮 是は、大塔宮護良親王を祀りたる社なり、八幡宮より東北凡そ六町二階堂ヶ谷の山麓に在りて、親王を押し籠め參らせし土牢は、即ち本社の後在り。
頼朝屋敷跡 是は、八幡宮の東金澤通り傍に在り。
荏柄天神社 是は、頼朝屋敷の東北に在りて、鶴ヶ岡八幡宮の一ノ島居を距ること凡そ七町。
壽福寺 是は、八幡宮の東龜ヶ谷に在りて、開山塔、壽窟、政子塔、實朝塔、望夫石等は、皆此寺内に在り。
英勝寺 是は、壽福寺の北隣に在り。
淨妙寺 是は、源の直義の像あり。
建長寺 是は、名高き寺、其構造の宏大なるは、鎌倉中多くの寺のうちにて第一とす。
長壽寺 是は、尊氏の塔あり。
圓覺寺 是は、種々見るべきものあり。
禪興寺 是は、蜀の大帝、章獻天、北條時宗、同時貞、上杉重

魚躍りはねて面白し、長さ一間ばかり色黒く、海鰯の如し、昔或る人猫を入れければ、却つて鼠に噛み殺されしといふ、向の出崎とし崎といふ所に竹山あり、一尺四五寸なる竹有りといふ、申の刻には時津に着きて酒屋に宿る、
 十二日、朝雨降る、髪月額など用意して静に出づ、一里程行きければ、長崎より迎の人麻上下にて追々五六人來る、馬次郎の先衛にて知られたり云ふ、此邊路傍に豕或は羊兒を放ち飼ふ、所々に徘徊す、之を問へば長崎へ唐人共の食料に賣る故に、多く飼ひ置くと云ふ、八つ時長崎に着く、かねて宿制定まり、小林氏、堅田氏、我輩は櫻町伊勢屋理左衛門所なり、鳥羽氏、坂部氏の旅宿は田中菊左衛門とて櫻町の乙名なり、又其隣家組頭加藤次郎處に中る者も有り、すべて櫻町組頭丁にて、亭主は勿論給仕人まで、皆上下なり、奉行所の役人並に通事人等、かはるがはる來りて遠勞を慰す、就中通事目附

房等の像あり。
 妙本寺 は、停車場の東南僅かに數町、大町比企ヶ谷に在り、此處には、高さ一尺五寸もある水晶塔あり。
 光明寺 にも、見るべきもの少なからず。
 長谷觀音 は、八幡宮一ノ鳥居より西凡そ十八町の處に在り。
 大佛 は、右觀音の北、御輿藏の麓に在り、長三丈五尺、奈良の大佛と共に日本の二大銅像。
 海濱院 とは、鎌倉海水温浴場の名にして、停車場の南凡そ十町餘、由井ヶ濱の松林中に在り。此院の有様は、純然たる外國ホテルの仕組にして、重に外國人を客とし、其宿料は、一日二圓五十錢の定めなり、普通の宿屋は、長谷の三橋樓を第一とし之れに次では、雪の下にて、角正樓、丸屋、三橋支店等を善しとす。
 此餘、鎌倉に遊ぶものは、名所番頭耳目も疲れる程多しと覺悟すべし。
 ●江ノ島 は、鎌倉八幡前停車場より七里ヶ濱を経て、西凡そ二里鎌倉郡南端の海中に點在す、鎌倉より人力車に乗りて、極樂寺切通しを過行けば、左に稻村ヶ崎を望む、稻村ヶ崎は、前に由井ヶ

高尾嘉左衛門は本藩恩顧の者なれば、屢々伺候し、漂流の事異國の物語りなどあれど、余が輩は遠慮あり、唯目撃して打ち過ぎぬ、
 十三日、予好の道歌止がたぐ、高尾嘉左衛門へ一通の名刺を通じ詩を贈り、今客館の清客に、文才の人あるよし、詩文贈答の紹介を爲し給はらんやと言ひ送る、其日の八つ時漂流人の引渡し有りとして、諸役人中我等まで禮服等改め、案内者ありて御奉行所の廳に行く、漂流四人の吟味終り、船子どもを引きつれ旅舎に歸る、其夜亭主が物語に、長崎學者の中にて熊代太郎左衛門文章の名ありと云ふ、高尾氏より返翰未だ來らず、清客へ紹介の事も、おぼつかなきにより、夜中詩文を認め、翌朝熊代氏方へぞおくりける、
 十四日、奉行所より馳走のため案内者有りて、異國人の館舎に入りて一見す、先づ阿蘭陀の屋敷は、出島とて内海へ築き出だし、四方石垣はなはだ嚴密なり、石

濱、七里ヶ濱の海濱を擁し、西北は、江ノ島及び遠く富士と相對し、後は松山を負て、風景佳絶の地なり。此處に行んとするには藤澤停車場(新橋より下等汽車賃三十二錢)にて下車し、島の入口まで一里餘のところ人力車を雇れば僅かに四十分ばかりにして達す、宿屋料理屋は、恵比壽屋、岩本樓、讃岐屋、金龜屋、江戸屋、堺屋、北村屋、立花屋等とす、中にも恵比壽屋茂八は其構へ手廣にして、崖には別荘を設け、眺望も亦佳なり、同家の宿料は一等一日八十錢、二等七十錢、三等六十錢、四等五十錢、五等四十錢にして、料理は、客の好みに應じて、鮮肉を喰せるなり。又金龜樓其他一二軒にては、西洋料理をも調進す。
 ●鶴ヶ沼海水浴 は、藤澤停車場を距る南二十餘町、江ノ島を距る西北凡そ十二町のところに在り、此地は、一の灣形をなし、前面には、近く江ノ島を手に取る如くに望み、東は、片瀬腰越を隔てて相房の遠山を眺め、南は、大島及び伊豆の小島を水天男爵の間に見認め、西南は、伊豆の陸地と相對し、西には、富士、後には大山嶺の峰巒を遠らして、其眺望決して江ノ島に劣らざれど、此地は、近年に開けたるところなれば、世間其名を知るもの少なし地は一面の砂濱にして、處々に松樹繁茂し、其水浴場に充るそこ

橋一つにて出入す、門の傍に番所あり、入口に禪寺の刹竿の如き旗柱あり、舎々に樓あり、樓の窓より阿蘭陀人どもさしのぞくを見れば、目光り眉毛赤さび、人相甚だ怪し、側に女も見ゆ、此地の遊女なりといふ、同行の人皆厨下より入りて階を登る時に、紅毛人も出で迎へて嚮導す、其顔色甚だ白し、頭髮を剃りて黒髪の假髻を被る、衣服は此方の股引の如く、手足をくるみ卸にてしめ、上衣も袖なく、前は卸にて合せ、腰下分開けて此方の輕業裝束に似たり、皆羅紗の類なり、又節季を量る時計なりとて、硝子の筒二本内へ水を入れ、板につけて壁に掛く、其板に文字あれども落字なるが故に讀め難し、蘭人常に四壁に其本國の畫を額の如く數多く掛けたり、畫面に硝子を張りたれば、透き徹りて見ゆ、周りの莊嚴甚だ美麗なり、畫は山水人物と、いろいろ有り、筆細密にして、倉卒には見分けがたし、又大鏡を所々に掛け置く、皆びい

ろは、海面十餘町の遠淺にして浪高からず、潮水も亦清潔なれば老人婦女などの海浴には、至極宜し、此處には、料理屋にして宿屋を兼るもの二軒、鵠沼館と云ひ、待潮館といふ、物價も低廉なれば、轉地療養などには適當の場所なり、藤澤停車場より此地への人車賃晴天十錢の定めなり。

●大山雨降神社 鵠沼より西北を望めば、甲武の連山南に延びて漸く低くなりし處に、鬱蒼として傘翁帽形の山天表に聳ゆるを見らるべし、之れを相摸に名高き大山とす。新橋より平塚停車場まで涼車賃下等四十錢、此處より人力車に乗換へ、中原、豊田等を経て上粕屋村に至る、此里程三里、人車賃二十八錢、同處子易明神前より二十町の間は、峻坂にして車を通ぜず（駕籠賃二十錢）此坂を登り詰れば、即ち大山町にして、人家凡そ三百軒ばかりあり此道の近傍瀧多し、町の盡頭より阪路二つに分れ、右を男阪と云ひ、左を女阪といふ、登ること八町にして、奥の不動堂に至り、此處より尙登ること十八町にして、雨降神社の本殿に達す。大山町の宿屋は、翠浪閣を以て最とし、一日の宿料二十五錢、此外に伊豆屋、駒屋、玉本等の宿屋あり、避暑には好き處なり。

●大磯海水浴場 は大磯停車場を距る南の方僅かに四五町の海濱

どろづくりにて、座中の人影相うつり、堂上甚だ玲瓏なり、座敷物として樓上にて、この方の如く疊を敷き、中央に几案を設け、フラスコの注子の類をならべ置く、皆名酒なりといふ、フラスコの中に罍龍蛤蚧を藥水にて蓄ふ、鱗動くが如くに見ゆ、側に交椅數々あり、船頭と筆者は生平にこれに坐すなり、此時筆者リノイトルフロイトマンといふもの出で、上客に對して長揖す、通事人數多従ひ行く中にも、西善三郎蕃語を以て言語しければ、彼筆者頓首拜伏し畢つて、復起つて交椅に坐す、其前に書案を出だし、筆者即ち筆を把つて、番字を七八紙書く、文字の形雲を畫くが如し、左の方より書き始めて右の方へ横行に書く、通事人の譯文なれば何の字といふことを知らず、紙は此方の奉書に似たり、筆は石筆の如く、鳥の羽莖の本の枯にて、尖所に刻目有つて墨汁を含むなり、紅毛ども種々の乾菓子を持ち出だし、茶を勸む、又葡萄酒其

に在り、此處は、古歌に『小ゆるぎの磯』と詠みたる名所にして其風景の好きは、管々しく言ふまでもなし。海水浴旅館は、藤龍館、松林館、松仙閣、愛松園、太田樓等にして、別に角屋、宮代屋、石井、青柳等の普通宿屋もあり、旅館は、昔潮水を館内に導き、一大温浴場を設けて客を浴せしめ、又海濱には、各々休足所を設け、下帯、湯巻、麥藁帽子等を貸與し、女子供には、付添人を出して水浴せしむ、藤龍館は、和洋食客の好みに應じて調理す其席料は、室に依て高下あり、宿泊料は日本賄ひにて一日五十五錢（晝食共）、但し毎年十月一日より六月三十日迄の間は、席料等に、特別の割引を爲すといふ。松林館は、長者林の中に在り、景色よろし、宿料は上等一日五十錢、並四十錢なり。旅客年々此處に集るを、以て段々盛んなる町となれり。驛の兩端（停車場より七八町）に、鴨立澤あり、西行堂あり、虎子堂あり、旅客遊覽すべき所乏しからず。

●國府津海水浴 國府津は、大磯より第二の停車場所在地にして、眺望もよろし（新橋より下等涼車賃四十九錢）、昔しは一寒村なりしも、今はなかく盛んなる所となれり、此地の海水浴旅店は萬屋別荘及び國府津館等にして、其海岸を以て、直ちに冷水浴場

色赤黒なり、アチン酒（甘味辛砂金入）
 フンツロ酒（色薄白うしてあわもりりに似たり）肴はカチンの實、生姜蜜漬、内蔵豆等、フランスの注子硝子のコップといふ盃にて酒を飲む、肴ありて階を下り、又花園の上なる樓に上る、座敷の中央に床のやうにて足高きもの、横六尺長さ一尺ばかり、羅紗にて包み四方の隅に穴あり、通事人に問へば、紅毛人の丸を弄し懸勝負をする所なりと云ふ、厨下に至り見れば、豕牛等を屠撃して甚だ腥し、宿の前に鬼奴四五人居る、其中に童子も有り、年を問へども通せず、予双手の指を開きて見せければ點頭して退く、十歳ばかりと見えたり、面色は薄黒く髪は巻きて茜の木綿切にて包めり、

○武藏野紀行

北條氏康

天文十五年仲秋の頃、武藏野を見んとて此の年月思ひ立ちぬることなれば、人々數多打連れて、小鷹狩して遊ばんとて、

皆々狩の装束して馬に打乗り、まづ鎌倉に詣でける、あなたこなたの古跡を眺め、八幡山より四方の景色を眺め、小磯大磯を見わたせば、鶯鷺や鴈の波に立ち騒ぐを見れば、

をしきもの立つ白波のいそべよりあ

まのみるめを袖にかけはや

大磯の波路をわけて行く舟はうき世

を渡るたつぎなるらん、

過ぎにし庚子の歳、宿願のことありて、

此の宮に詣でけるが、やう／＼八年あま

りにやなりぬらんと覺え侍る、若宮の御

前にまゐりて、

左のみ來し身はものゝふの八幡山い

のる契りは萬代までも、

さて此處彼處の谷々山々、由比の濱、大

鳥居古寺古跡を眺め、あくれば藤澤の北

松井の庄に、三田禪正忠氏宗が宿所に一

夜を明して行くに、此なん小磯の磯とい

きのふ立ちけふこゆるぎの磯の波い

に充て、館内別に内風呂の備へあり、葛屋方一日の宿泊料は、一日三十五錢以上五十錢迄にして、又其座敷は、一週間乃至一ヶ月の約束を以て浴客に貸渡すこともあり、故に家族を携へて永く逗留せんとするものは、第二の法に據るを善しとす、村の西北一里を隔て、曾我村あり、曾我兄弟の木像其他縁故ある古物を存すといふ。又此地より、箱根湯本に通ふ馬車鐵道あり、蒸車の着後十分間を隔て、發車し、其賃金は、下等一人十三錢、中等三十錢、上等五十錢、一輛借切は、小の中等四圓、大の中等五圓五十錢、小田原まで下等七錢、中等十五錢、上等二十五錢。

●酒匂海水浴 國府津より、小田原に至る途中に、酒匂村あり（國府津より人力車賃五錢）、其國道より左へ入込たる處にある旅館を松濤園と云ふ、十四五軒の別荘を建て、室敷の多き少なき色々れど一軒毎に、臺所も、湯殿も、便所も附きあれば、家族を引つれ、出養生せる人には、至極勝手よろし、其賃金は、小なるもの一ヶ月七八圓、大なるものは、同じく三十圓乃至五十圓なり、尤も安屋には、大いなる湯槽にて、晝夜海水を沸しあり、且つ料理の業をも兼ね居れば、總て自由なり。

●小田原海水浴 國府津から鐵道馬車にて、僅かに半時間を以て小

田原へ達す、此處は戸數二千百餘りもありて、なか／＼盛んなる町なり、鷗盟館と稱する宿屋は、頗る手廣にして、其宿料は一日三十五錢以上七十五錢以下の定めなれども、客の好みに依りては、座敷のみを貸して、自賄ひをも許すといふ、其他通常の宿屋は、中松屋、小伊勢屋、片岡など名高し。道了權現とて、名高き神社は、小田原の北三里二十八町字道了山に在り、此處の海水浴に來りしものは、序に參詣するも可ならん。

●箱根の温泉 國府津より鐵道馬車に乗り、一時間にして湯本に達し、借て好みの湯に入るべし、今籠より順を追ふて、其案内をなせば、

●湯本温泉 は、箱根群山の東麓早川の西岸に在り、小田原より官道は、此處より左に分れ、三枚橋を経て箱根驛に達し、七湯路は、早川の左の岸に浴ひ、右の方に登り行くものなり、温泉は、湯坂山の麓岩石の間より湧出し、其色透過りて、少しく鹹味を帶ぶ、温泉宿福住九藏、小川甚右衛門の兩家にては、内湯の設けあれども他の宿屋にては、小川の家の後に在る總湯を用ゆ、借て此福住は、誰れも知る通り、貴族的の宿なれば、其宿料も高く、紫紅雪月花の五等に分ち、紫一日三食及び夜具雜

そいで行かん夕暮の道、
 頃は八月上旬朝霧深く、分入りて行く
 に山あり、岩山と云ふ、此の山の後は、
 甲斐の山、北は秩父など申し侍る、それ
 より武蔵の國勝沼といふ所に着きぬ、齋
 藤加賀守元此の所の領主なり、つねつ
 ぬ道々のこと申しかよはしければ、山海
 の珍物數を盡し饗應ける、此の所に二日
 逗留して、それより武蔵野を狩り行くに、
 まことに行くともはてのあらばこそ、萩
 薄、女郎花の露に宿れる虫の聲々、哀れ
 を催すばかりなり、
 武蔵野といづれを指して分入らん行
 くも歸るもはてしなれば、
 古の草のゆかしもなつかしければなり、
 此も紫の一本ゆゑなるべし
 隔つなよ我が世の中の人なれば知る
 もしらぬも草のひとごと、
 あくれば八月十三日、秋霧いよく深く
 して、道もさだかに見えわかず、馬にま
 かせて行くに長井の庄にも着きぬ、まこと

費とも一人一圓、紅八十錢、雪六十五錢、最下等の花と雖も、
 一日の宿泊料三十五錢の外に、尙相當の座敷料を要す、小川の
 方は、一日五十錢を以て上等の賄ひをなすといふ、此處へ電氣
 燈會社が出来て、箱根山中を化して不夜城となしたるは、いか
 にも見事なり。
 今湯本より、各地への里程、并に人車并に輿賃を掲ぐれば、
 塔之澤まで五丁、人車賃一人輿 五錢。
 堂ヶ島まで一里半 同 二十五錢。
 宮ノ下まで一里半 同 二十五錢。
 底倉まで一里廿二丁 同 二十八錢。
 木賀まで一里三十二丁 同 三十三錢。
 小涌谷まで二里、駕籠賃 六十錢。
 蕨ノ湯まで(新道)三里二十丁、同八十五錢。
 箱根驛まで(國道)二里廿八丁、同七十錢。
 姥子まで四里二十二丁、同 同
 大涌谷まで三里三十二丁、同 同
 乙女峠まで四里二十丁、同 同
 小田原まで一里二十二丁、人車賃一人輿十五錢。

とや若紫の巻に、かゝる朝露をわけ入
 らんとあるも是なるべし、大澤の庄など
 を行くに、やうく隅田川にも着きぬ、
 河面を見れば、まことに白き鳥の嘴と
 足と赤き鳥の、群れ居て魚をくふありさ
 ま、昔を思ひ出で、
 都鳥すみだ川原に船はあれどたゞ其
 人は名のみありはら、
 向は安房上總、そのあたりに見えわたる、
 茲に葛西の庄、淨興寺の長老、年八十餘
 に及べるが、迎ひに出でられ、寺内に立
 寄り、一宿すべき由申されければ、河を
 渡り彼の寺に行きて一宿するに、夜に入
 り風冷かに吹きたり、松風入琴といふ事
 を思ひ出で、
 松風の吹く聲聞けばよもすがらしら
 べ異なる音こそかはらぬ、
 あくれば駒をはやめ歸らんとて、舊の道
 にさしかかり、つごころの礎づたひ、
 日數積りて今日は八月中旬にもなりぬ、
 小田原にこそ着きにけれ、

國府津まで三里、同 三十錢。
 塔之澤温泉 は、湯本より早川に沿ひて、登ること僅かに五丁
 にして此地に達す、温泉は、湯坂山の麓、又は勝驪山の傍より
 湧出し、其泉質は、湯本の如し、温泉宿は、玉泉樓(堀貞藏)、
 玉ノ湯(福原遠藏)、環翠樓(鈴木善左衛門)、一ノ湯(小川鎌太
 郎)、藤屋(安藤徳治)、福住樓(長谷川まつ)の六軒にして、各
 々内湯の設けあり、併て此環翠樓鈴木方の宿泊料は、一等一週
 間七圓、二等五圓二十五錢、三等三圓五十錢、四等二圓八十錢
 五等二圓五十錢にして、同家は、外國人を除くの外一切席料を
 受けざる定めなりとか、他の宿も、玉ノ湯の西洋賄ひを除けば
 大抵鈴木方と同様なるべし。
 堂ヶ島温泉 湯本、塔之澤より、宮ノ下に至る新道は、始終早
 川の南岸に沿ひ、山を回り、谷を越え、屈曲幾百遍なるを知ら
 ず、登ること二三町にして、右に松露の瀧を望み、亦三四町も
 登りて、姥の水と云へる茶屋の邊に至れば、道二筋に岐れ、右
 を新道として、左を舊道とす、舊道の方險しれども近し、湯元
 より凡そ一里にして少しく平なる所に出づ、之れを大平臺と
 呼び、家居二十軒ばかりも並び、其盡處に到れば、茶屋ありて

○長江の旅泊

肥前國大村の城下をかたなな見物し終り、夫より小舟を借り、海に浮んで長江といふ所に渡りぬる船の内より、はや夜に入りぬれば、案内も知らぬ旅の空に夜に入り宿り求めんもほづかなしといへば、船頭の知るべの家ありとて、川の岸なる所へ送り入れぬ、いと貧しくいぶせき伏屋なりしかども、一夜の宿り主の妻快くもてなすに嬉しくて、手洗ひ足そそぎなどして、打ちくつろぎ、夕の食なども取りしためてやすらひたるに、其家南面にして、しかも大きな川を前に受けて、海づらさへ遠く、打ち望めば、風景の面白きに、六月二十日頃の月海上にさし出で、さゝ波のさら／＼しきは黄金を散らすが如く、浪風また涼しくて限りなき興に入り居たるに、此家の子の十二ばかりなるが、他の家の子に頭打られたりとて、此方の父親又先の子の頭を

西に、宮の下を望み、風景特に好し、又行くこと半里ばかりにして、宮の下に達す、其二三町手前なる「しのぶ塚」の碑あるところを右に折れ（人車は此處より、下へは通はず）、狭くして勾配急なる坂道を下れば、やがて堂ヶ島に達す。皆て當地の温泉宿は、大和屋爲太郎（小蓬菜館）、近江屋半之丞、江戸屋茂興次郎の三軒にして、大和屋定めの宿料は、一週間一等三圓、二等二圓五十錢、三等一圓七十五錢、四等一圓五十錢、他の二軒も凡そ之れと同様なれば、一體に、費用の低廉なることを推して知るべし。

宮ノ下温泉 宮の下は、箱根中最も盛んなる所にして、七湯中第一に位す、地勢も頗る高く、海面より高きこと千百二十尺、随つて眺望もよし。温泉宿は、二軒にして、一を富士屋（山口仙之助）といひ、一を奈良屋（安藤兵治）といふ、兩家とも巨大なる西洋館を築き、一軒にして、殆ど他の四五軒に敵す、就中富士屋は、日本風の宮殿めきたる高樓を新築し、専ら外國人の宿泊に供へ、又各室に電氣燈を點じて室内を照せり、富士屋は、總て外國人のみを客として一日の宿料三圓五十錢、其仕組は、純然たるホテルなり、奈良屋は、本道の右手に在りて、日

強く打ちぬ、先の父親又怒りて此方の子をして、後には互に親と親とのいさかひとなりて打ち合ひしに、此方の親力強くて、打ち勝ちて歸りぬ、暫くありて、さきの家の近きあたりの男ども大勢集り來て、打ち負けたる意趣をはらさんと、機にせまき家の庭に込み入りぬ、此方にも又近きあたりより若き者大勢救ひ來りて、はじめは詞、戦ひに其かまひすしき事言はん方なし、暫しが程は田舎人のいさかひ又珍らしと傍に見居たりしが、次第に大勢集り來て、機かの家に數十百人込み入りたれば、予が居たりし所も奪はれて、坐し居つべくもあらず、兩方互に怒り罵りて、棒庖丁の類を携へ來り、已に打ちかゝりぬれば、故もなきにそば杖に打たれ、疵つかんことの恐ろしくて、急ぎ走り出でたるに、案内は知らず立ち入るべき所もあらず、喧嘩はますますはげしく、すべきやう無くてかたなな立ちまよひ居たりしに、年老ひたる者一

本客室と西洋館とを設け、洋館の方は、客室凡そ二十七室をならべ、其浴室は八角形をなせる小堂の中に設く、其宿料は二圓五十錢、又日本の客間は、廣きあり、狭きありて、一定の席料は記し難けれど、凡そ一人に付、席料宿料其他の雜費を合せて一日四五十錢より一二圓の間にあるべく、郵便電信の事務は、奈良屋の店に於て取扱ひ居るをもて、爲換等を振出すには都合よし、近頃主人學生をして、直安に宿泊せしむるの法を設け旅行券又は學校の證明書を携へたる生徒には、宿料等も、特別の割引をなし、心安く逗留せしむるといふ。

温泉湯口は、總て五ヶ所にして、之れを三日月の湯、熊野の湯、去田の湯、瀧の湯、明治の湯といふ、何れも鹽類泉なり。温泉宿の浴室に引けるは、重に三日月の湯を明治の湯にして、浴槽は、微熱、温度、微冷の三個に分る、奈良屋には、別に湯瀧水の瀧の設けあり。皆て此地より、近傍への里程を記すれば、

堂ヶ島へ 五町。
底倉へ 三町。
木賀へ 十町。
小涌谷へ 十六町。

入出で来て、旅の人不慮の事に逢ひて力なくもあはすらん、向ふに見ゆるは我舟なれば、急ぎ彼の舟に乗り給ひて休息し給へど、懇に言ひて、多葉粉の火などもてなしくれらるゝに力を得て、乗り移りたり、獵船と見えていと小さく、苦少し吹きかけたり、月は隈なく澄み、小夜嵐涼しく吹き渡りて、さし捨てたる棚なし小舟、引潮にゆらめきて行末も定めぬ宿りどめたるはいと心細けれど、又風景の面白きに心慰みて、出づる儘に詩歌數々書き付く、陸には猶いさかひやまで大勢打ち合ひぬれど、川中に隔り居れば危くもあらず、然れど夢結ぶべくもあらぬは、夜もすがら月と暈嘩とを詠め居たるが、明方近き程には、露置き深ひて風いと冷かに、ふすま懸しう思ひしかども、すべきやうもなく、苦引きかづきて臥しぬれど目も合はず、とかうする間に夏の夜の短き、明け易き習ひなれば、山かづら引渡し、鳥の慶花やかなれば、草鞋引き

其他の方への分は、湯本の部に配したる里程の内より、凡そ一里半を引去りたるものと知るべし、又人足賃は、小涌谷へ 十銭。
 蘆の湯へ 二十銭。
 乙女峠へ 往復五十銭。
 箱根へ 三十七銭。
 同じく地獄廻り五十銭。
 駕籠賃は、人足賃の凡そ二倍なりと知るべし。
 底倉温泉、底倉は、宮の下の町續きにして、温泉は、蛇骨川の上流なる岩石の間より湧出し、神靈湯、萬壽湯、盤仙湯などの區別あれども、其成分は、何れも硫酸の二質より成りて、略宮ノ下の湯に同じ、温泉宿は、梅屋牧太郎、仙石屋大助、葛屋きくの三軒にして、宿泊料は、一日一人に付、二十五銭より五六十銭の間に在り。此邊秀吉の舊跡、新田義隆の遺跡など、歴史家の訪ふべき所なり。
 木賀温泉は、底倉を距ること八町ばかり、温泉宿は、龜屋新太郎(神代樓)、伊勢屋増右衛門の二軒にして、別に底倉の梅屋よりの支店あれど、斯は盛夏の時のみ店を開きて、客を迎へ、

九州道の記

結んで食もせず、舟よりぞ立ちぬ、誠に旅路の習ひ、あはれにも又をかしかりき、
 今茲天正十五三月初、博陸殿下九州大友島津わたくしの鋒楯を止めらるべきために、御進發の事あり、息與一郎同立番允、參陣の上家を通れ入道せし身なれば、供奉のことにてもまがりしを、適なる御陣の程を、徒に在國もそらあそろしき心地して、四月十九日に舟をば熊野郡まで廻して、二十一日田邊を出で、其日は宮津にどまり、二十二日松井の城松倉に着きて、明けなば出立ちぬべき旅装せしに、雨降りいで、終日晴間なかりしかば、松井子禪門といふ出で、抑留し、盃たびく出だして慰みくらし、其夜はどぞまゐりて、二十四日いよく晴れて、風も追手なりとらば出立つとて、足占山近ければ
 かならずの旅の行くへはよしあしも

其他の時季には、戸を鎖して家人は皆底倉の本店に移り住むとの事なり。然るに此地先年火災ありて、温泉宿悉く焼失せしが今はボツ／＼新築出來たり。此地より、蘆の湯まで、里程一里半、駕籠賃は三十銭、往復五十銭の定めなり。
 蘆の湯温泉は、七湯中の最高處にあるものにして、海面より高きこと凡そ二千七百六十尺。木賀より此地への山道は、登るに従つて險しく、特に七曲りと稱ふる處は、登るに苦しむ程の難處なるが、此坂を登り詰めれば、漸く廣き高岡に出づ、其景色頗る妙、此處より西に折れて行くこと四五町、即ち蘆の湯なり、温泉宿は、紀伊國屋儀三郎、松城屋方右衛門の兩家を以て最とし、客室各々三四十を備へ、和洋二様の割烹を調理して客を待つ、其宿料は、洋食賄ひの方一日凡そ二圓五十銭、日本風の旅館は、凡そ三十銭以上一圓以下なれども、客の好みに應じ何品にても別に料理して、其膳に上すこと甚だ自由なり、其他の温泉宿は、吉田屋國三外二三軒なり。
 小涌谷温泉 右に案内せしは、所謂箱根の七湯なるが、其外にも新温泉場三四ヶ所ありて、小涌谷も亦其一なり。此處は、宮ノ下より十五町、蘆ノ湯道の途中小地嶺山の麓に在りて、温泉

問はでふみしる尾占の山、軍書に「欲必則莫令卜」問軍吉凶とあれば、思ひよれり、個様にして、湊といふ所より、辰の時ばかりに出船して、其の日の暮れ程に、但馬因幡の境居汲といふ所に舟泊りしける、旅宿いと所狭くて、上中下らうかはしき假枕し侍りて、

主従はたびにしあれば里の名の居くみにしたる假の宿かな、二十六日、伯耆國厨屋より舟を出だし、出雲國仁保の關に上り見物し侍りて、それより磯づたひを行くに、錦の浦と云へばしばらく舟を止めて、船よするにしきの浦の夕なみのたゝむや歸る名残なるらん、かやうに口ずさみて、其のわたり近き加たといふ所、漁人の家にとまりぬ、哀れにもみだれ乳をのみあまの子のかゝのあたりや離れざるらん、二十七日、雨風あらし故に、加加より船

は、さながら蒸氣の沸騰する如く小地獄山の半腹より湧上るものを取り、桶にて之れを浴槽に導くなり。温泉宿は、開化亭星野常次郎及び参河屋蒸三の二軒にして、開化亭には、西洋室もあり、外國人の來泊に差支へなし。此外仙石湯、姪子、新湯等あれど、途も險しく、地も僻なれば、都人士の行くには便ならず。大涌谷 昔しは大地獄と云ひけり、谷の中央より頂上に至る凡そ十二三町が程は、處々に、硫氣燃え、熱泉迸り、溪の流れは皆温泉となり、其近傍は、悉く焦石にして、草木は枯死し、地の皮は、總てグサクとして軟かく、試みに杖もて地を突くときは、容易く二三尺の深きに入り、其穴より蒸氣を噴出す、若し降雨杯の時、過つて此地の皮を踏破りでもせば、半身焦土の中に埋められて、焚死することあり、いかにも焦熱地獄、うツかり往きて命を玉なしにすべからず。早川 は、水源を箱根の湖水に發し、仙石原の平原を、北に向ひて流れ、東に折れ、左は、種々の山間を潜り、五里ばかりも流れて、早川村に至り、終に小田原の海に入る、景色好し、時に絲を垂れて、小魚を釣るも面白し。

出成りがたかるべき由を、船人申し侍れば、されば徒に暮さんものうしとて、船をば波間を待ち廻し侍るべき由申して、杆築の宮見物のため、徒行にてたどりゆく、道の程三里ばかり歴て、木ふかくて山のため、すまひたならぬ社あるを見めぐりて、社人と覺えたるに尋ね侍りしに、是なん佐陀の大社なり、神跡伊賀諸伊賀の尊と教えけるに、しかく物曆し侍るに、日もたけ雨もいたく降れば、衣あふらん程のやどりもとめてとまりぬ、千早振る神のやしるやあめつちと別ちそめつる國のみはしら、二十八日、佐陀を出で、秋鹿といふ所に、湖水の舟に乗りて、平田まで行くに、生浦なりと船人のいふを聞き、磯まくらうらなみやあふの浦千鳥見はてぬゆめのさむる名残に、かやうにして暮れかゝる程に、杆築の社に至りて、寶前を始め末社等、こなたか

蘆ノ湖 は、箱根の湖水なり、其廣さ、東西二十町十五間、南北一里二十三町、周回は三十町五十九間半、景色頗る美なり。元箱根村 は、権現坂の西蘆ノ湖の東岸に在りて、人家凡そ三十戸ばかりあり。脚氣患者の轉地療養するものあれど、居るところ不潔、食物不自由なれば、好き場所とは言ふべからず。箱根権現 は、蘆ノ湖の東岸駒ヶ嶽の南麓に在り、元箱根村より湖岸に沿ふて行くこと六町ばかりの處より、更に石階を踏んで登る、其好景奇且妙。箱根驛 は、権現坂を下り、塔ヶ島離宮の前を過ぎて此驛に到る、驛は蘆ノ湖の東南に在りて、戸數凡そ二百戸、昔しは盛んなる驛なりしも、今は大いに衰へたり、富士峯、遙かに湖面に倒映す、之れを箱根の倒富士といふ。宿屋は、土生屋四郎右衛門、石内彌平太最も大なり、土生屋の宿料は、一日三十錢より五六十錢まで、西洋料理も出来る。湖尻 は、蘆ノ湖の北端に在り、此處より、姪子温泉に至る、其里程十八町なり。乙女峠 仙石原より、西の方二里の處に在り、仙石原より一里半の處から、險しき九折の山路を登り、十七八町にして峠の頂

なたに見めぐりて尋ねるに、當社兩神司千家北島、いつれも國造となんいひける、其の家々見物して、其の後旅宿を借りいで、樵葉ばかりに盛りたる飯など喰ひて、息み居たるところに、若州の葛西といふもの、尋ね來りて對面しける、大鼓打つ人にて、若き衆多く同道ありて、一番聞くべき由あれば、さらばとて催しけるに、兩國造より所につきたる肴樽など、使にて送られける程に、笛鼓の役者ども來こみて、夜更まで亂舞ありけり、思ひがけぬ事なりき、

二十九日、朝なきの程にまはしつるものども來て、急ぎ舟に乘れ、日もたけにけりといへば、心あはたしくして、

此の神のはじめてよめる言の葉をかぞふる歌や手向なるらん、

遠き千家蓋鳥尊到出雲國、初有三十一年、

歌、とあれば、やうく字の數をあはするはかりを、手向にしたりといふ心ざしばかりになん、此の短冊を千家方へつか

上に立つ、風景頗るよく、箱根より富士山に登るは、此時を越るを常とす。

●足柄上郡の瀧 足柄上郡には、大いなる瀧多し、旅客序あらば見に行くべし。白木綿の瀧は、神細村字日蔭に在り、二層にして、上級高さ二十四丈、下級高さ十二丈、幅各々三間。河西の瀧は、山市場村字柳ノ澤に在り、高さ二十四丈、幅二間。大瀧は、世附村字大瀧澤の東に在り、高さ二十四丈、幅十四間。尼瀧は、中川村字大瀧澤に在り、高さ四十八丈、幅七間三尺、實に郡中第一の瀧なり、其他にも尙あり。

●甲斐の猿橋 猿橋驛は、甲州街道に當り、大原村に屬す、此地の桂川に架するものを、猿橋といふ、急流の上に架するものにして、橋下に一柱なく、西方より段々に木を組み合し、即ち所謂橋力を利用したるもの、其奇工感ずべし、景色も頗る好し。甲府より十一里二十五町あり。

●武田晴信の墓 は、西山梨郡里垣村字岩窪に在り、甲府を距ること北へ八町ばかり、田圃の中に、老松亭々として鬱茂し、其中央に、三間半の石柵を周らしたるものは是れなり。又同村字古府中に、武田の古城趾あり、今尙城濠の跡を存す。古英雄の跡を吊せんと

はしけるに、兩可なれば一方へは如何と主のいひけるに、俄かなれば同歌を書きてやりける、又當社本願より發句所望なれば、

卯の花や神のいがきのゆふかつら、かやうにかきやりけるに、千家方より、今の發句は北島にて連歌たるべし、吾方にては百韻興行すべしとて、舟に乗る所に追ひ付きて、發句所望なり、忙はしきになり難き由度々申せしかども、所の習ひにやわりなく申されける程に、人の心をやぶらじとて思ひめぐらすに、折ふし郭公の名残りければ、

ほととぎす聲の行方やうらの波、二十九日、石見の大浦といふ所に泊りて、あくる朝仁間といふ津まで行くに、石見の海あらしといふ故事にも違はず、白浪かゝる磯山の巖峙ちたるあたりを漕ぎゆくとして、

これやこの浮世をめぐる舟の道石見の海のあらし波風、

欲する人は行くべし。

●湯村温泉 は、甲府市を距ること北へ一里弱大宮村字湯村の山麓に在り、三湯あり、何れも眼病、皮膚病などに宜しと。

●御嶽山 へ、東京より到らんとするには、八王子へ行き、夫れより小佛峠を経て、相模の吉野驛まで五里半の間は、乗合馬車あり、其賃金は、一人三十五錢《雨天二割増》、此處より一の谷川を徒渉し、又猿橋行の乗合馬車に乗り、右と同額の賃金なり、行くく好風景を觀斷し、斯くて猿橋の宿屋、大黒屋儀前、久保田屋健一郎、小松屋要藏、何れへでも投宿す。斯くて此處を發し行くこと四里餘にして、笹子峠の東、黒野田に達す《乗合馬車賃二十八錢》、同所より笹子峠を登るには、駕籠馬車なるものあり、一輛三客を載せて、峻坂を攀づ、いかにも危なげなれど、其代り、駕籠に比すれば、賃銀安くして且つ速し《駕籠馬車賃上り二十五錢、下り十五錢》、偕て峠を下りける處を駒飼村と云ひ、此處より右折すれば、行くこと二里にして、勝頼の古戰場天目山に達す、駒飼より甲府まで五里餘、其間にも乗合馬車あり、愈々甲府へ着すれば、北へ三里二十町、甲州西山梨郡宮本村なる御嶽山へ行くを得るなり。

それよりやがて銀山へ越えて見るに、山吹といふ城、在所の上にあるを見て、城の名もことわりなれやまふよりも堀る白金をやまぶきにして、宿りける慈恩寺、發句所望、庭前の楓のあるを見て、

深山木の中に夏をやわかきえで、温泉の津まで出で、寶塔院に宿りけるに、先年連歌の一番見せられしとなど、互に申し出で侍りしに、五月三日發句所望にて、其の夜は百韻を連ね侍りぬ、

五日、出船するに、跡にても一折張行すへき由にて、發句所望なれば當座に、浮草の根にひかれゆく葛浦かな、

七日、渡田を出で行くに、高角といふ所なりといふを、舟より見やりて、

石見瀧九かつの松の木の間よりうき世の月を見はてぬるかな、

と人丸の詠せしことを思ひ出で、移り行く世々をへいれど朽ちもせぬ

名こそ高津の松の言の葉

どかくして長門國に到り、磯の上島々を見渡して行くに、假島といふ所ありと聞き、誰も世の無常なることを思ひ出で、みな人のいのちながとたのめども世はかり島の浪のうたかた、同じき國浦小畑といふ濱に、唐船のつききある由を、舟人の中に語りければ、さらば見物せんとて、遙に舟を寄せ、しばし止めて、

我もまた浦づたひして漕ぎとめぬもろこし舟のよりし漕に、

網の浦波の高く聞えければ、

小つゝみのとしにしらべやはすらんうつ音高しあみの浦波、

十日、瀬戸崎といふ所を出船せしに、風あらくて、高波なかばは船をも越し侍るばかりなり、召供したるものども、酔心地たいたらで、色を失へる躰なれば、さらば漕ぎかへすべき由いひて、山かけて舟の入る程、三十町ばかりには過ぎず、

甲府よりは、新舊二道あるが、新道は、随分峻険なれど、景色好くして徒歩退屈せず、二里ばかり登りて、右に鞍掛岩を望み、又十数町にして、石門に到る、此石門といふは、巨巖山腹より斗出し、自然の洞門をなし、人は其岩下を潜り行くなり、昇仙橋を渡り、二町ばかり行けば、又一の洞門あり、是れより猪狩の里に出で、七八町にして御嶽に達す、宿泊は、松田屋、大黒屋の二軒にして、外に名物の蕎麥を賣る家、水晶細工を業とする家あり、御嶽より水晶山まで、里程四里餘、道險しくして登り易からず、又甲府より御嶽までの間と雖も、人車を通せず、駕籠賃は、一挺七十五錢、案内者の賃金二十錢、松田屋、大黒屋の宿料は、一泊二十錢内外なり。

●甲府公園 是、甲府市の南端宇太田町に在り、園内には、林泉の趣よろしく、楊弓店料理屋等あり。

●神代櫻 是、信濃街道の武里村宇宮脇より西凡そ三十町の山麓、新富村字山高に在る實相寺中の奇樹なり、其高さ十五間、枝の廣がること、東西十五間、南北十七間、幹の周圍凡そ七尋半、花は八重にして淡紅、地上より凡そ一丈、枝の八方へ分るゝ處は、幹稍平らにして、疊二三疊を敷くべく、花の頃には、此樹上に宴を

開く洒落者あり。旅客一見するも亦一興ならん。

●身延山 此處は、日蓮宗總本山久遠寺のあるところ。甲府より到らんとするには、馬車又は人力車にて鵜澤へ出で、同所より舟にて富士川を下り、身延村字波木井の岸より上陸するを善しとす、其道順は、甲府より鵜澤まで、里程四里十六町、乗合馬車賃二十錢、鵜澤の宿屋は、上田屋高造、萬屋徳平、粉屋丑造などよし。併て富士川を下る川舟に、二種あり、一を時間船と云ひ、一を並船と云ふ、時間船は、午前四時より五時までの間に鵜澤を發し、同十一時まで岩淵停車場に着し、途中飛乗を許さざるものにして、賃金は、一人前三十五錢、並船は、午前十時までに鵜澤を發して、日一杯に岩淵へ着し、其途中にて、客の上り下りを許すもの、一人前の賃金二十二錢五厘、波木井までは八錢。此波木井の岸より登り行くこと十五六町にして、身延の總門に達す。久遠寺より五十町登れば奥の院あり、又四里二十六町にして七面山に着く。

身延の宿屋の上等なるものは、升屋重利、田中屋勘造、玉屋久之助、梅屋半作、山田屋龜之丞等なり、宿泊料は、一泊二十五錢、晝食十錢なり。

されども千里をも行く心地なんしける、辛うして宿りける在所の歸りけるに、猶風あらくなりて、草木をも吹きしほりて、海の面は襖を張りたるやうなり、何人の乗りたるは知らぬども、先へ出でたる舟は波に沈みたるなど云へば、命一つを拾ひたる心地して、其の夜は寝てのあさけも、昨日の名残にや猶雨風やまず、波の音高潮に競ひて見ゆれば、舟の出づべきやうもなしなど、舟人むびあへり、さらば徒にて、關の渡まで行くべき由いひあひて、馬など借り出だして、十一日瀬戸崎を出で、大導寺大内義隆のはてられし所と聞えし程に、立寄りて一見し、それより深山をわけこえて、同國妙榮寺といふにまきりぬ、住寺の和尚出でられて、終夜佛法の物語などありて、つとめての朝出行くとして、

かたちなき夢てふものを心とも法のむしろに臥してこそ知れ、心法無形通貫十方とやらんいへば、思ひ

よれり、聞えがたくや、豊浦宮を行き過ぐるとして、

水もらぬ池の心の深さをもとよらの宮のつゝみにぞ知る、

手洗といふ在所にて、簡喰ひ侍らんとて、假の宿にあがるとて、下々足を洗ふに、まめの出来て、痛きなどいふを聞きて、

さし入れて洗へる足のまめおほみ馬だらひとや人の見るらん、

關のわたりにつきて、阿彌陀寺に参り侍るに、其側に寺あり、所の人には内裏となん言傳へ侍る、寺僧に案内して、安徳天皇御影、其の外平家一門の像ども見侍りける、彼の僧昔今の短冊など見せられしに、知りたる人の歌どもありし程に、

もしほ草かくたもともぬらす哉すすりの海の波の名残に、

豊前國門司の關にて
故郷にこつてやらんひとふても音きやたえなんもじの關守、
兵糧船多くつとひてあるを見て、倉梨の

此身延より東京へ歸らんとするには、同所より凡そ二十町、富士川の岸大野といふ所に出で、鵜澤より下りの並船を待受け、飛乗をなすを善しとす（乗合船賃十八錢）、又七八人連の時は、別に一艘の舟を仕立させるとも、其賃金は、一人割三十錢の上に出でず、船は六時間以内にして、岩淵停車場の堀割に達し、上陸すれば、二三の宿屋あり。岩淵より東京までの涼車は、五時三十分間、賃金一回一錢にて新橋へ着す。最初甲武鐵道に據りて東京を發し、八王子、猿橋、甲府等を経て、鵜澤に到り、富士川を下りて、岩淵に達し、同所より涼車にて歸京すれば、日數凡そ四五日を費し、其旅費も儉約すれば、十圓の上に出ざるべし。

●下部温泉 は、西八代郡富里村下部に在り、名高き鐵泉にして、浴舎七八戸あり、されど道路甚だ不便なるは、残念のことなり。●屏風岩 は、西八代郡共和村字宮木、富士川の東岸に在り、さながら屏風を斜に疊みかけたる如くに、無数の斧痕あり、富士川舟行の一奇觀。

●伊豆熱海 は、賀茂郡伊豆山の南日金山の東麓に在りて、夏冬共に湯治よろしき所なり、戸數は、實に五百戸、多くの町になり居りて、郵便電信局もあり、銀行の支店もあり、西洋料理、鰻の

浦焼、蕎麥も汁も大弓も揚弓も、玉突屋、借馬屋、貸本屋、新聞縦覽所、何でも御坐れ、旅客消閑の具には蓋支へなし。楮て此地へ到らんとするには、國府津停車場より、里程凡そ八里半、此内小田原までの間は、鐵道馬車の設けありて、頗る便利なれども、残り七里の間は、阪道にて步行に困難なり、小田原熱海間の人車賃は、一人輒六十五錢の定めなれど、十月より三日までの間は、二人輒ならでは、客の注文に應ぜず。

- 熱海の温泉宿は、
- 一等温泉宿 石渡第一(富士屋) 石渡要作(相模屋) 世古六之助(眞藏社)
 - 二 樋口忠助(氣象萬千樓) 須田藤次郎(大光館)
 - 二等温泉宿 鈴木三三(鈴木屋) 杉崎富八(阪口屋) 藤木準三
 - 平野新兵衛(小松屋)
 - 三等温泉宿 野村庄左衛門(尾張屋)
 - 四等温泉宿 内田市真左衛門(古屋) 大木圓藏(高砂屋) 山田中兵衛(山田屋)
 - 鈴木敬助(鱈屋) 野田通八(藤居玉屋) 藤井文次郎
 - 山田敬明(新鈴木屋) 油井龜吉(新玉屋) 野村幸太郎
 - 五等温泉宿 加藤中七(登倉屋) 松尾宗兵衛(福嶋屋) 野田宗助(中玉屋)
 - 山田藤吉(升屋) 二見中右衛門(釜嶋屋) 芥川九右衛門(伊勢屋)
 - 船澤莊吉(東屋) 野田久七(角玉屋) 船澤たい

濱當國なれば、

米舟は國々よりも着きにけりあけても積まん倉なしの濱、豊前の柳浦名主とて、發句所望せしに、豊國の山口しるき早苗かな、

同月二十三日、赤間關を出で、行きけるに、雨の名残にや、波風の荒きゆゑに、小倉に泊りて、明る夜をこめて舟よそおひして、筑州箱崎を指して行くに、舟人の此なん金が御崎といふ、昔鐘を求め船に載せて來り、汀近くなりて取陸して、今にありと云ふ、日和のよきときは、龍頭など見ゆる由語る、勅撰名寄には、金と云ふ字を書きたりと覺えけるが、鐘にてあるべきかなど、友達などに語りける次に萬集に我は忘れずしかのすべ神とやらん、詠みたる事など思ひ出で、くれわたる鐘の御崎をゆく舟に我は忘れずふるさとの夢、かやうに言ひ戯れて漕ぎゆく程に、夕浪あらくなりて、やうく志賀の島に着き

て、金剛山の宮司の坊に宿りて、當社大明神の由來など尋ねけるに、春日鹿島當社同じ御誓の神なりと物語りあり、縁起など取出して見せらるゝ次に、波あらしき沙干の松のかつらがた島よりつづく海の中道、

是當社の御歌の由社僧の語られける、又香椎の神詠には、山よりつづくと一句かはりたるなどあり、立出見侍りけるに、砂の遠さ三里ばかりも海の中を分けて、島につまき侍り、取別きて細き所は十町ばかり、廣さは十四五間ばかりも有りて見えたり、文殊なども御座ませば、橋立の事など思ひくらべられき、當社は安藝磯良丸といひて、神功皇后異國退治の時、龍宮より出で、兵船の楫取して、海上のしるべせし神なり、しばし打眺めて、みかさ山としてやかよふ鹿の島神のめくみのへだてなければ、名にしおふ龍のみやこのあどゝめて波をわけゆく海の中道、

六等温泉宿 渡邊徳右衛門(松屋)

米倉三右衛門

水谷佐助(阪本屋)

上杉鐵次郎(永樂屋)

福井善四郎

根本徳右衛門

小倉清助(丸屋)

稻田松次郎

岩本吉五郎

などにして、夫れ其等級によりて、家の構へも違ふなり、樋口の如きは、別に蒸風呂を設けあり。倍て浴客逗留の費用は、座敷食物等の如何んに依りて、固より一定し難けれども、其食物の眺へ方に、凡そ三ツの方法あることを知らざるべからず、其第一を自賄いと云ひ、客人自ら食物を調へ、又は下婢を雇ひて調へしむるなり、第二を伺ひと云ひ、宿屋より、三度々々調理すべき食物を客人に問合せ、其好みの物を調ふる謂ひなり、第三は宿賄ひにて、通常の賄ひなり、若し第一の方法に依りて下婢を雇ふときは、之れに食物を興へて、一週間三四十錢の給料を取らすれば、毎朝來りて、夕刻まで深切に諸事を辨ず、尤も第一第二の仕方なれば、食料の外に、座敷料、炭油料、湯錢等を宿屋に拂ふものとす、座敷料は、其席の大小美などに依りて差異あれども、一週間凡そ五十錢より三圓迄を限りとし、夜具損料は、一組一夜四錢より十錢まで、絹夜具は、十五錢以上二十五錢までを限りとす。大湯 熱海には、二十餘ヶ所の温泉あり、中にも面白きは

にて晝夜三たび時を違へず湧き、折々長湧する事もあり、長湧の時間は、概ね十二時間にて、此時間過れば、又十二時間休むとぞ其湯の湧出るときは、いかにも凄まじき勢ひをなし、側へも寄附けぬやうなりといふ。

噓氣館は、大湯の傍に在り、故岩倉相國、噓氣の患者に効あることを察し、官邸と謀りて建設せられしものなり。噓氣場は、其建築最も壯麗、場の中央に機關を設け、大湯沸騰の度毎に、蒸氣を場中に導き、患者に其氣を呼吸せしむるの仕掛なり、又別に浴室を構へ、病症に依りては、入浴せしむる仕掛なり、館内に、浴醫局あり、温泉宿に逗留する浴客の望みに應じ、往て病を診断し、浴法を指圖するなど頗る深切なり、館内診察料は十錢、浴醫長往診料は一圓より三圓まで、代診ならば三十錢より一圓まで、診断書料は三十錢、館内一回の入浴料は五錢、同じく一週間入浴料は三十錢、氣壓吸入氣施用料は一回三錢の定めなれども、委しきことは、館について問合すべし。熱海八景 故成島柳北翁の撰ぶ所にして、其一梅園の春曉、梅園は、熱海本町を距ること北へ凡そ十町の處にあり、其二來宮の杜鵑、來宮は、梅園の北湯前神社の西に在り、其三温泉寺の

此の兩首を書きて奉納して、二十五日朝なきの程に、箱崎に渡りて見るに、松原遙々ついで、八幡宮は北面に向ひて立ちたり、戒定惠の三學の箱を、昔埋もれたる所に、しるしの松とて古木あり、立寄りて、

そのかみにあさめちきつる箱崎の松こそ千代のしるしなりけれ、

日高く侍りければ、博多見にまかりけるに、此處を袖の滲と里人の教えければ、

いざさらばともねらさん旅衣そでの淡のなみのまくらに、

日も暮れぬいざ船よせて寝もしなんひしきものには袖の滲を、

二十六日、宰府は天神の住み給ひし所と聞き及びしまし、見物のため罷りける、

彼の宮寺は七年ばかりさきに炎上して、形ばかりなる假殿あり、舊跡のありさま、

松杉の多くきられたるに、さすがに所々にのこり、後は青山登えて、左の方七八町ばかりもあるらんと見えて、観音寺あ

古松、温泉寺は、上宿に在り、其四横磯の晩涼、横磯は、市街の東北端に斗出する海濱なり、海水浴をなすによろし、其五初島の漁火、初島は、海上三里を隔てたる一孤島なり、其六飾浦の秋月、錦浦は、念佛山の麓を回れる海岸の總稱にして、魚見崎より海上半里舟にて到るべし、其七魚見崎の歸帆、魚見崎は、錦浦へ到る途中、海上へ斗出せる岬の名、其八和田山の暮雪、和田山は、熱海の南方に立てる元山の名なり。

伊豆山は、伊豆神社の在る所にして、熱海の北十八町、小田原道の傍より左に登るなり。景色よろし。

序ながら、是れより三島、箱根等に赴く里程を記さん、熱海より日金山の絶頂十國峠を経て、箱根驛に至る程里五里（駕籠賃壹圓二十錢）、此邊觀望頗る廣し。又三島驛まで、里程凡そ五里（駕籠賃一圓二十錢）、又修善寺へ赴くには、平井より分れて南に入る、其里程八里餘なり。

●下田町は、賀茂郡の南端に位し、韭山を距ること十四里十四町餘、熱海を距ること凡そ十八里、伊豆第一の良港なり。

●湯ヶ島温泉は、田方郡上狩野村大字湯ヶ島に在り、三島町を距ること八里、景色好き所にして、冬寒からず、夏暑からず、冬夏共に善し。

り、誠に西都ともいふべき所なり、飛梅も古木は枯れてきりけるに、若生の生出で、あるを見て、

鶯の羽をやとひて飛梅のかこにはいかで乗らで來にけん、

それより染川を、里人に尋ねて見に行き侍るに、思ひしにはかはりたる、小川の淺き流なり、

老の波むかしにかへれ染川や色になるてふ心ばかりも、

思川にて、暮るゝ夜の笠やしるべ思川、

此處彼處見巡りて歸りける道に、刈笠の關の跡ありと教えけるに、今度の陣衆名乗らせて歸さることある由を傳へ聞き

て、名のらせてやう／＼通す陣がへり兵糧米やかるかやの關、

此の次に、籠山いづくぞ案内者に尋ねしに、歸るさの右に高き山あり、此なん

それといふ、龍門山寶重寺とて、山伏の

名のらせてやう／＼通す陣がへり兵糧米やかるかやの關、

●修善寺温泉は、君澤郡修善寺村に在り、熱海などの繁昌はなけぬど、閑靜なる宿賃などの安きとに、直打あり。此處には、獨鈷の湯、河原湯、眞湯、杉の湯、箱湯、石湯、珍の湯、瀧の湯等ありて、何れも共同浴室なり、此處へ到るには、熱海温泉場よりは、里程八里餘、其中間に熱海峠あれども、人車は二人轆を通じ、駕籠も亦往復す（此人車及び駕籠賃は、片道一圓七八十錢）、沼津停車場よりは、里程六里、馬車人車を通ず、人車片道四十錢、馬車なれば三十錢、又佐野停車場よりも里程六里餘にて、人車通ず。但し東京より赴く人は、沼津にて下車する方便利なるべし。

温泉の宿屋は、

- 一等温泉宿 野田修治（菊屋） 相原平八（餘氣館） 淺居保右衛門（對春館）
- 二等温泉宿 大川彦八郎（衛生館） 湯川廣吉（柳屋） 後藤龜之助（江戸屋）
- 三等温泉宿 野田八郎平（野田屋） 三須重吉（柏屋） 野田重綱（水月樓）

柳田いせ（四方樓）

等にて、外にも尙あり、宿泊料は、菊屋、養氣館等にて、一日上等五十錢、中等三十五錢、下等二十錢を定めとす、但し客の好みに依り、向品にても取寄せて、其膳に上すなど、田舎には似合し

住みける所にありけるを、近き年頃より、高橋といふもの城廓にこしらへてありけるが、去年島津出で、あたり近き岩屋の城攻め落せし時分、あけにけるが、此頃山伏の歸り住むと申せしに、五月雨の名裂雲のかかりて見えければ、立ちつらく雲を千里の煙にてにぎはふ民のかまど山かな、可也山にて、

しげりゆく可也の山邊に入りしかば秋より露にぬれてふすらん、姪濱より、人の安吉の脇指おこせて、目利して銘などもよく侍らば、主になるべきとて文あり、其返事に、

わきざしの代をも問へばやすよしのなかに正しきめいの濱かな、二十八日、姪濱といふ所に至り、それより生松原見にまかりて、

涼しさを風のためよりにこと、はん今幾日あらばいきの松原、姪濱にて、或人宗義執筆せられし連歌の

懐紙を見せて、奥書所望せしに、

これまたながれて末のみつきのあとのかたみと書きぞくはふる、六月三日、姪濱興徳寺住持耳堂玄熊和尚、和漢興行あるべきとて、發句所望ありしに、公も此の處まで御成の沙汰あれば、張行は成り難かるべしとて、發句を書きつかはして、入韻所望せしに、

風かざる南をまつのとぼそかな、

社同天月梅 同八日、利休居士へ關白殿渡御ありて、しばし御物詣ありて後、一折と催されて、發句仕うまつるべき由あれば、箱崎八幡の心を、

神代にもこえつゝ涼し松の風 雲間に遠き夏の夜の月 ほかにもあけゆく空の雨はれて

箱崎の八幡の内、關白殿御座所になりて各參上せしに、しるしの松に寄せて、祝言の心を各に詠ませられける、

からぬ便利あり、又温泉は、別に入浴料を要せず、唯浴室より、一日一厘より六厘までの錢を集め置き、之れを浴室の修繕費に充るまでなり。

修善寺 は、當村内に在り、此寺は、源氏、北條氏等の歴史つきの寺なれば、懐古の材料多し、什物には「尼將將軍の跋、北條早雲、豊太閤の御教書などもあり。

駿河佐野澤園 は、佐野停車場を距る僅に十二町、五條の澤布あり、此澤布の傍に、鑛野の旅館を設け、五龍館と名づけて旅客を宿泊せしむ、同館の宿泊料は、一日四十錢以上七十五錢以下にして、佐野停車場よりの入車賃は八錢の定めなり、避暑によろしきところ。

千本松原 は、沼津町の海岸に在り、砂濱一帯翠松を生じ、岸頭より望めば、駿河湾は一碧鏡の如く、東南は内浦の諸村に對し、西方には、田子、三保、久能山、清水港などを、雲煙模糊の間に望み、風景真に畫圖の物たり。

我入道海水浴 は、沼津町の南二十町柳原村大字我入道狩野川河口の南岸に在り、風光の美なるは言ふまでもなく、松風館と云へる、海水浴旅舎あり、其樓上から其風光を觀斷すべし。

●牛臥海水浴 東京新橋より沼津まで、下等氣車賃八十六錢、此停車場より南行し、更に右に折れて湊橋を渡り行くこと十數町にして、牛臥山麓海水浴場に到る、此間二十五町、入車賃十一錢なり海水浴場は、三島驛世古六太夫の支店にして三島館と號す、其風光の好きは、言ふも管なり。

●富士山 此美しくしき日本第一の高山は、海面を抽くこと壹万二千四百尺、毎年舊曆六月一日の山開きより向ふ四五十日間、即ち雪の稍解けたる時を見て登山するを常とす。其登り口は、大宮口(表口)、須山口(南口)、須走口(東口)、吉田口(北口)の外に、尙東表口、人穴口の二ヶ所あり、關西より來るものは、重に大宮口より登り、甲斐より來るものは、吉田口より登り、關東より赴くものは、須走口、東表口の二ヶ所よりす、こゝには先づ東表口新道の案内を爲さんに、新橋より瀛車にて御殿場停車場に到れば、同村に、旅店近江屋、富士屋あり、又富士山本宮出張所野木三平治に就て登山の案内を請へば、氏は親切に登山一切の事を周旋す、東表口新道は、即ち野木三平治、伴野佐吉外數名の有志が、新たに開墾せしものにして、御殿場より一合目まで三里八町の間一直線をなし、しかも傾斜急ならず、其面平坦にして、自由に馬車